

UENO HARUDA I 3

# 上 の 原 第 3 遺 跡

—県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I —

1999年

宮崎県埋蔵文化財センター

UENO HARUDAI 3

# 上の原第3遺跡

—県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

1999年

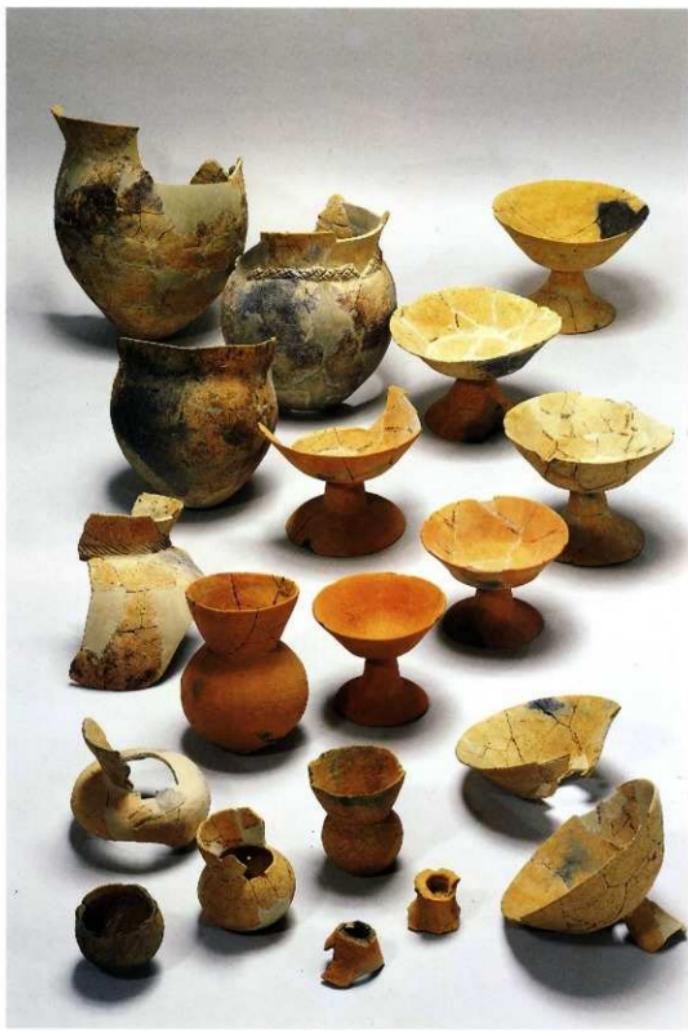
宮崎県埋蔵文化財センター



上の原第3遺跡全景（西から）



2号竖穴住居土器出土状況



2号竖穴住居 出土土器

# 序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚く御礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、県営農地保全整備事業時屋地区に伴い、時屋地区遺跡群の発掘調査を行いました。調査は平成6年から3ヵ年にわたり、5遺跡6地点、約14万㎡の大規模なものとなりました。本書はその報告書で、第1集として上の原第3遺跡を報告します。

上の原第3遺跡では、古墳時代中期～後期の集落が検出され、多くの土器が出土しました。これらは当地域の土器編年にとって重要な位置を占める資料になると思われます。また、時屋地区の他の遺跡では、旧石器時代から江戸時代にいたる各時代の遺構・遺物が大量に検出されています。一つの遺跡から得られる資料は断片に過ぎませんが、ある一定の広がりを持つ範囲で多くの遺跡が調査されたことにより、地域の歴史をより具体的な姿として浮かび上がらせることも可能になると思われます。こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料を得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成11年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 田 中 守

## 例　　言

- 1 本書は、県営農地保全整備事業時屋地区に伴い宮崎県教育委員会が実施した、時屋地区遺跡群・上の原第3遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県中部農林振興局の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、平成6・7年度は県教育庁文化課が、平成8年度は県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地での実測等の記録は、吉本正典、東憲章、鎌田次郎が行い、一部を業者に委託した。
- 4 本書に使用した写真是東が撮影し、空中写真については業者に委託した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面の作成、実測、トレースは主として東が行い、一部を整理作業員の協力を得た。
- 6 本書に使用した位置図は国土地理院発行の5万分の1図を基に作成し、調査範囲図は宮崎県中部農林振興局作成の2千分の1図を基に作成した。
- 7 本書の執筆は、第II章第2節を吉本が、他は東が担当し、編集は東が行った。
- 8 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	2
第Ⅱ章 時屋地区遺跡群について	
第1節 遺跡の位置と環境	4
第2節 時屋地区遺跡群の調査	7
第3節 基本層序	8
第4節 報告書の記述について	9
第Ⅲ章 上の原第3遺跡の調査	
第1節 調査の概要	
1 調査の経過	10
2 層序	10
第2節 調査の記録	
1 III層上面検出の遺構・遺物	13
2 IV層以下の遺構・遺物	45
第3節 まとめ	54

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	時屋地区遺跡周辺地形図	5~6
第3図	基本土層柱状模式図	8
第4図	上の原第3遺跡 遺構分布図	11~12
第5図	1号竪穴住居跡	14
第6図	1号竪穴住居跡出土土器	15
第7図	1号竪穴住居跡出土石器	16
第8図	2号竪穴住居跡	18
第9図	2号竪穴住居跡出土土器	19
第10図	2号竪穴住居跡出土土器(1)	20
第11図	2号竪穴住居跡出土土器(2)	21
第12図	2号竪穴住居跡出土土器(3)・鉄器	22
第13図	2号竪穴住居跡出土石器	23
第14図	3号竪穴住居跡、出土土器	24

第15図	4号竪穴住居跡	25
第16図	4号竪穴住居跡出土土器（1）	26
第17図	4号竪穴住居跡出土土器（2）・石器	27
第18図	5号竪穴住居跡	30
第19図	5号竪穴住居跡出土土器（1）	31
第20図	5号竪穴住居跡出土土器（2）・鉄器・石器	32
第21図	6号竪穴住居跡	33
第22図	6号竪穴住居跡出土土器・石器	34
第23図	7・8号竪穴住居跡、7号出土土器	35
第24図	8号竪穴住居跡出土土器	36
第25図	8号竪穴住居跡出土石器	37
第26図	9号竪穴住居跡	38
第27図	9号竪穴住居跡出土土器・石器	39
第28図	10号竪穴住居跡	40
第29図	10号竪穴住居跡出土土器	41
第30図	集石遺構	46
第31図	縄文時代早期土器（1）	48
第32図	縄文時代早期土器（2）	49
第33図	表土出土遺物（1）	50
第34図	表土出土遺物（2）	51

## 表目次

第1表	上の原第3遺跡出土土器観察表（1）	17
第2表	上の原第3遺跡出土土器観察表（2）	28
第3表	上の原第3遺跡出土土器観察表（3）	29
第4表	上の原第3遺跡出土土器観察表（4）	42
第5表	上の原第3遺跡出土土器観察表（5）	43
第6表	上の原第3遺跡出土土器観察表（6）	44
第7表	上の原第3遺跡出土土器観察表（7）	52
第8表	上の原第3遺跡出土石器・鉄器観察表	53
第9表	上の原第3遺跡竪穴住居跡一覧表	53

## 第Ⅰ章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

県営農地保全整備事業時屋地区は、宮崎市から清武町にかかる約60haの広大な面積を対象に、県中部農林振興局が平成元年に採択、実施したものである。事業は、南九州特有のシラス台地でのほ場整備、畑地灌漑、農道・排水路の設置が主たる目的である。

文化財の取り扱いについては、事業採択の平成元年10月に県中部農林振興局長名で県教育委員会文化課に文化財の所在の有無について照会があり、同課は同年12月に事業予定区内に12ヵ所の遺物散布地が存在する事を回答している。その後、事業の進行に対応しながら県文化課による試掘・確認調査が行われた。文化財の保存に関する協議（切り盛り調整等）を経て、事業施工により文化財が影響を受ける範囲については事前に発掘調査を行い記録保存の措置をとることとなった。

宮崎県の場合、県営ほ場整備事業に伴う発掘調査は、原則として市町村教育委員会が調査主体となつて実施している。平成3年度から5年度の調査（椎屋形第1・第2遺跡、上の原遺跡）については、県文化課と宮崎市教育委員会文化振興課との協議の結果、当時多大な量の発掘調査を抱えていた宮崎市の状況を鑑み、市教育委員会が調査主体となり、県文化課から調査員を派遣して調査を実施した。調査の結果については、平成8年3月に報告書が刊行されている。

平成6年度以降については、遺跡が宮崎市と清武町にまたがることから、県と両市町との協議の結果、県教育委員会が調査主体となり調査を実施した。各遺跡の調査面積と期間は以下の通りである。

平成3年度	椎屋形第1遺跡（市）	4,500m <sup>2</sup>	平成3年10月31日～平成4年2月10日
平成4年度	椎屋形第2遺跡（市）	4,500m <sup>2</sup>	平成4年10月15日～平成5年2月12日
平成5年度	上の原遺跡（市）	4,200m <sup>2</sup>	平成5年6月14日～平成5年9月14日
平成6年度	上の原第2遺跡（県）	45,500m <sup>2</sup>	平成6年4月22日～平成6年11月1日
	上の原第3遺跡（県）	15,500m <sup>2</sup>	平成6年7月26日～平成6年11月25日
	上の原第1遺跡（県）一次	48,000m <sup>2</sup>	平成7年2月14日～平成7年3月31日
平成7年度	上の原第1遺跡（県）二次	(48,000m <sup>2</sup> )	平成7年4月24日～平成7年11月28日
	上の原第4遺跡（県）	3,400m <sup>2</sup>	平成7年5月15日～平成7年8月29日
	白ヶ野第3遺跡（県）	300m <sup>2</sup>	平成7年8月30日～平成7年10月12日
平成8年度	白ヶ野第3遺跡B地区（県）	25,000m <sup>2</sup>	平成8年5月1日～平成8年10月15日

なお、調査にあたっては、地元の時屋地区土地改良区の皆さんに作付け調整や休耕措置、さらには作業員の確保まで多大な協力をいただいた。

#### （参考文献）

- 宮崎市教育委員会 1996 「椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡」県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
宮崎県教育委員会 1995 「上の原第2・第3遺跡」県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書  
宮崎県教育委員会 1996 「上の原第1・第4遺跡、白ヶ野第3遺跡」県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書(2)  
宮崎県埋蔵文化財センター 1997 「白ヶ野第3遺跡B地区」県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書(3) 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第3集

## 第2節 調査の組織

時屋地区遺跡群の調査の組織は次のとおりである。

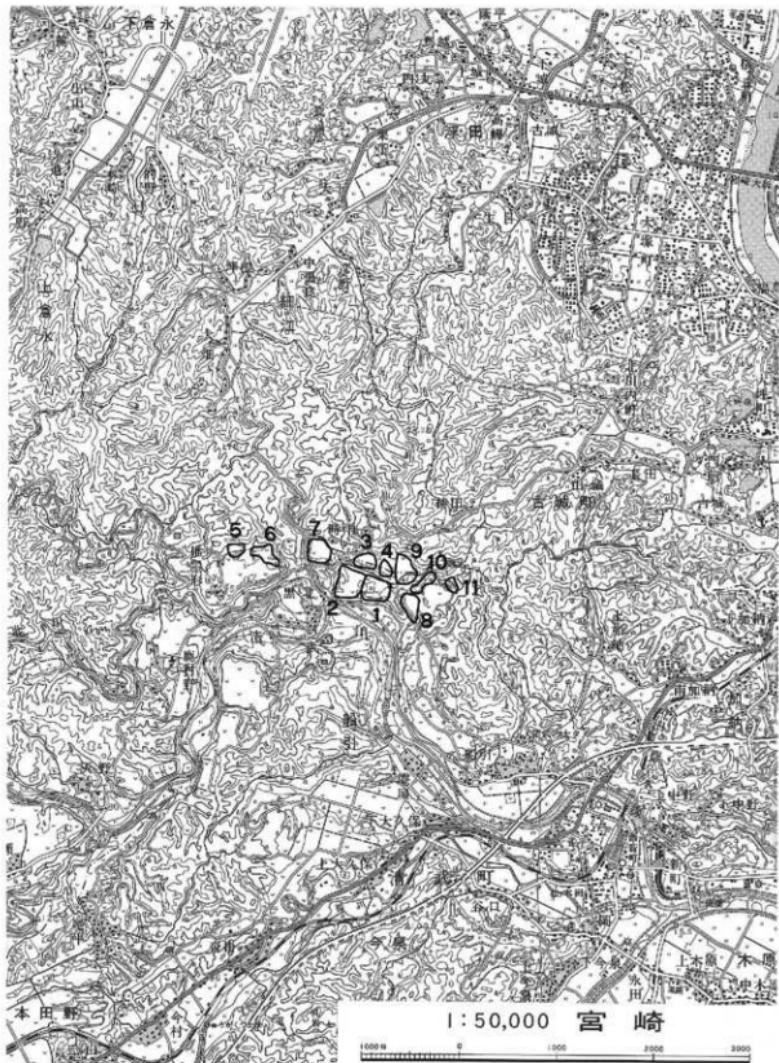
調査主体 宮崎県教育委員会

(平成6・7年度) 教育長 出原直廣  
教育次長 八木洋・中田忠  
文化課長 江崎富治  
課長補佐 田中雅文  
主幹兼庶務係長 高山恵元  
主幹兼埋蔵文化  
財第2係長 岩永哲夫(平成7年度)  
埋蔵文化財第2  
係長 面高哲郎(平成6年度)  
主査(調整担当) 皆付和樹  
主事(調査担当) 吉本正典(平成6・7年度)  
主事(調査担当) 東憲章(平成6年度)  
調査員(嘱託) 鎌田次郎(平成6年度)  
調査員(嘱託) 井田篤(平成7年度)

(平成8年度) 宮崎県埋蔵文化財センター

所長 藤本健一  
副所長 岩永哲夫  
庶務係長 三石泰博  
調査第2係長 北郷泰道  
主査(調整担当) 谷口武範  
主事(調査担当) 松林豊樹  
調査員(嘱託) 犀鳥由紀

調査協力 宮崎県中部農林振興局 時屋地区土地改良区 宮崎県農業開発公社



- |              |              |             |
|--------------|--------------|-------------|
| 1 : 上の原第1遺跡  | 2 : 上の原第2遺跡  | 3 : 上の原第3遺跡 |
| 4 : 上の原第4遺跡  | 5 : 雜屋形第2遺跡  | 6 : 雜屋形第1遺跡 |
| 7 : 上の原遺跡    | 8 : 白ヶ野第1遺跡  | 9 : 白ヶ野第3遺跡 |
| 10 : 白ヶ野第2遺跡 | 11 : 白ヶ野第4遺跡 |             |

第1図 遺跡位置図

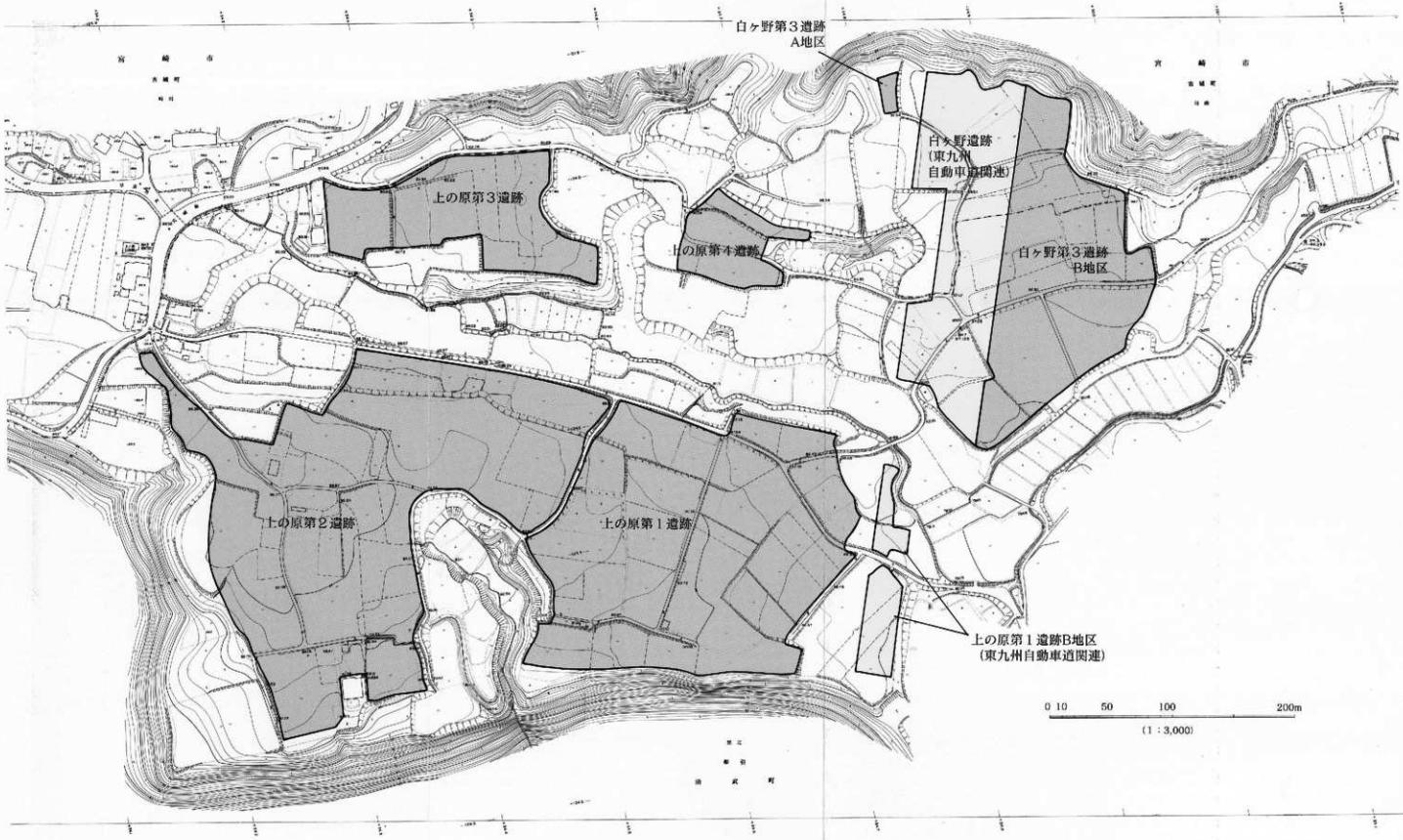
## 第II章 時屋地区遺跡群について

### 第1節 遺跡の位置と環境

時屋地区遺跡群は、宮崎平野の南西部、宮崎市大字細江字椎屋形・時雨柳迫から清武町大字船引字上の原・白ヶ野にかけての標高90m前後の台地上に立地する。宮崎市南西部域では、鰐塚山系から連なる丘陵と浸食の進んだシラス台地が展開し、その間を大淀川をはじめ清武川、加江田川などの大小河川が東流し日向灘へ注いでいる。台地縁辺の岸面や浸食小谷には所々に湧水地が見られ、遺跡立地の好条件が備わっている。

県営農地保全整備事業時屋地区では、清武川とその支流黒北川の合流地点左岸の約60haという広大な面積が事業の対象となり、これに伴い数多くの遺跡が発掘調査されている。なお、平成7・8年度には同事業地内で東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われた。また、隣接する清武町船引地区での農地整備事業でも発掘調査が行われている。以下はその概要である。

遺跡名	調査年度	調査主体	遺跡の時代(時期)	備考
椎屋形第1遺跡	平成3年度	宮崎市教委	縄文(草・早)、弥生(後)	時屋地区
椎屋形第2遺跡	平成4年度	宮崎市教委	縄文(早)	時屋地区
上の原遺跡	平成5年度	宮崎市教委	旧石器、縄文(草・早)、古代	時屋地区
上の原第2遺跡	平成6年度	宮崎県教委	縄文(早・後)、中近世	時屋地区
上の原第3遺跡	平成6年度	宮崎県教委	縄文(早期)、古墳(中)	時屋地区
上の原第1遺跡	平成7年度	宮崎県教委	縄文(草・早・中・後)、古墳(前)	時屋地区
上の原第1遺跡B地区	平成7年度	宮崎県教委	旧石器	東九州関連
上の原第4遺跡	平成7年度	宮崎県教委	縄文(早)、古墳(前)	時屋地区
白ヶ野遺跡(第2・第3)	平成7・8年度	宮崎県教委	縄文(早・中・後)	東九州関連
白ヶ野第1遺跡	平成7・8年度	清武町教委	旧石器、縄文(早・前)、古代	船引地区
白ヶ野第3遺跡A地区	平成7年度	宮崎県教委	縄文(早)	時屋地区
白ヶ野第3遺跡B地区	平成8年度	宮崎県教委	縄文(早・後・晚)、古代、中世	時屋地区
白ヶ野第4遺跡	平成8年度	清武町教委	縄文(早)	船引地区



第2図 時屋地区遺跡周辺地形図

椎屋形第1遺跡では、縄文時代草創期～早期の集石遺構が検出され、隆起土器・爪形土器・前平式土器等が出土している。また、竪穴住居と掘立柱建物からなる弥生時代後期の集落も検出されている。椎屋形第2遺跡では、縄文時代早期の集石遺構69基、連穴土坑（炉穴）24基が検出されている。

上の原遺跡では、縄文時代早期の集石遺構3基が検出され、ナイフ形石器・爪形土器・前平式土器が出土している。

上の原第1遺跡では、縄文時代草創期～早期にかけての遺物群、縄文時代中期～後期の竪穴遺構（住居やその他の機能を持つものを含めて）29基、古墳時代前期の竪穴住居6基などが検出された。

上の原第2遺跡では、縄文時代早期の集石遺構45基、縄文時代後期の竪穴住居48基・土坑65基、中世～近世の掘立柱建物群や通路、墓塚、土坑などが検出された。

白ヶ野第3遺跡では、縄文時代早期の集石遺構、後期から晩期の土器、古代の竪穴住居が検出された。

時屋地区遺跡群が立地するシラス台地は、標高90m前後の大いな平坦面を持つ。背後には北から延びる丘陵が迫る。南は清武川による開析谷の断崖で、その比高差は約50mを測る。台地上の大いな平坦面はほぼ全面が遺跡と言っても過言ではなく、前掲の表のとおり多数の遺跡が調査された。

時屋地区の各遺跡は台地平坦面上に刻まれた小規模な谷地形により区分されているが、これはあくまでも便宜上のものであり、本質的な意味で人間の活動範囲を指すものではない。一つの遺跡の調査で得られる資料は断片的なものであり、遺跡群全体を見渡すことによってはじめて本来の地殻像が浮かび上がるるのである。

## 第2節 時屋地区遺跡群の調査

時屋地区遺跡群の各遺跡に付された遺跡名やその範囲は、前述の通り便宜的なものであり、年度単位で行った調査の成果をつなぎ合わせて後の作業を進めていく必要がある。通常、このような広域的かつ中・長期的な調査においては、国土座標に準じたグリッドを設定し、記録作成がなされることが望ましい。しかしながら今回の調査では、調査開始時の混乱した状況もあり、当初設定した任意のグリッドを最終年度の調査まで踏襲する形となった。

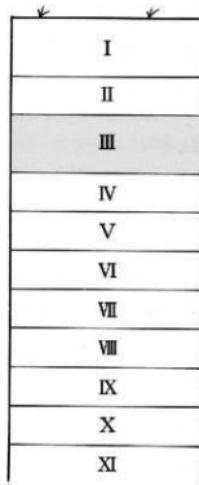
グリッドの基準線は、東西方向を貫く計画道路のセンターラインに基づくもので、N-23°-Eの方向をとる。これを基に時屋地区の台地全域を覆う形で10mグリッドを組み、北西端部のO点から南方向10m地点の杭を1杭、20m地点の杭を2杭とした。区の名称は、O～1杭までを1区、1杭～2杭までを2区とした。東方向についても同様とし、南北方向・東西方向の数字をハイフンでつなぎ杭・区名を設定した（○-○杭、○-○区など）。従って、グリッドの南東隅の杭とその区の数字が一致することになる。

調査にあたっては、後に述べるⅢ層が鍵層として重要な役割を果たしている。Ⅲ層の上位にある文化層の調査では、この層の上面が遺構検出面となる。また、下位に予想される文化層の状況を知る上で、Ⅲ層の存否が目安となる。なお、Ⅲ層の上下にわたって文化層が遺存する場合、調査期間の制約から下位の文化層の調査が十分に行えないという状況も生じている。詳しくは個々の遺跡の報告に譲るが、トレンチによる状況把握→調査範囲拡張という手法を探るなど、出来うる限りの記録化を目指した。

### 第3節 基本層序

時屋地区遺跡群の各遺跡の層序は基本的には共通であり、宮崎県中南部域に発達するシラス台地の代表的なものと一致する。以下、その特徴を概観する。

- I層：暗褐色土 表土（耕作土）である。柔らかく粘性が低い。
- II層：黒色軟質土 やや粘性を帯び、柔らかく黒みの強い層である。縄文時代前期以降の遺物包含層であり、地形や土地の利用状況で層厚は異なる。遺跡によっては、包含遺物の時期等により細分が可能である。
- III層：黄褐色土 ブライマーなアカホヤ火山灰層である。層最下部には直径数mmの軽石粒が見られ、上部にいくほど緻密になる。層上部に2次アカと呼ばれる風化層が見られることが多い。
- IV層：黒褐色硬質土 ローム層である。この層の下半部に白い粒子と光沢のある粒子を多く含む火山灰が混じる。
- V層：暗褐色硬質土 IV層よりも明るい色調である。IV・V層は縄文早期の遺物包含層である。
- VI層：褐色硬質土 ローム層である。粘性が高く硬質である。微小なバミスを疎らに含む。
- VII層：明黄褐色土 基層はローム層であり、粘性が高い。含水量により硬度が大きく変わる。霧島小林軽石を多く含む。
- VIII層：明褐色土 粘性の高いローム層である。炭化微粒と小林軽石をわずかに含む。
- IX層：明黄褐色土 粘性が高く、柔らかなローム層である。粒子が細かく、バミス・スコリアをほとんど含まない。
- X層：明褐色土 XI層よりもやや暗い色調で、粒子もやや粗くざらついた感触である。
- XI層：淡黄褐色土 やや土壤化したシラス（姶良火山入戸火碎硫）である。5mm程度のバミスを疎らに含む。粘性は低く、粒子の粗いザラザラした感触である。



第3図 基本土層柱状模式図

## 第4節 報告書の記述について

県教育委員会が調査主体となり発掘調査を実施した遺跡は、3か年で5遺跡（6地点）である。報告書については、その資料の膨大さと整理作業の進捗状況を考慮し、2巻に分けて年次的に刊行することとなった。本書はその第1巻であり、平成6年度調査の「上の原第3遺跡」のみを報告する。報告書の執筆・編集にあたっては各調査担当者がその責を負うが、記載・記述に関しての基本方針を明確にしておく必要があろう。以下、本書及び第2巻（平成12年3月刊行予定）について若干の説明を付す。

### （1）遺構

遺構の略号は次のとおりとする。

S A 穴住居 S B 挖立柱建物 S C 土坑 S D 土壙幕 S E 溝状遺構  
S I 集石遺構

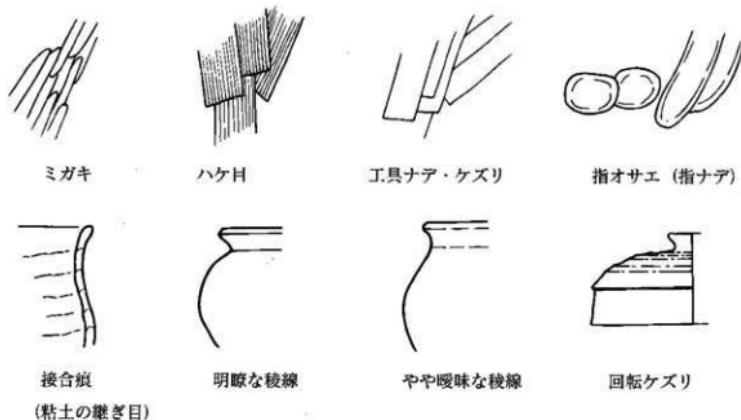
遺構図のスケールは、原則として穴住居跡1/60、土坑1/40、集石遺構1/30とし、分布図については1/500を基本とする。

方位は座標北・磁北を用い、それぞれG.N.・M.N.で表記する。レベルは海拔絶対高である。

### （2）遺物

遺物実測図のスケールは、原則として縄文土器・須恵器・古代の坏皿類を1/3、弥生土器・土師器を1/4とする。鉄器・石器類は1/2を基本とし、小型の打製石器を3/5（60%）、大型の石皿等を1/4とする。須恵器の断面は黒塗りする。

土器実測図の調整表現は以下のとおりとする。ナデ調整は特に単位が明瞭な場合以外は図示しない。



### （3）観察表・計測表

土器観察表・石器計測表は、報告書掲載のもののみ作成した。土器の色調は『新版標準七色帖』（農林省農林水産技術会議事務局監修）に掲った。法量の（ ）は現存値である。

## 第III章 上の原第3遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

#### 1 調査の経過

調査対象面積は15,500m<sup>2</sup>である。重機により表土を除去し、アカホヤ火山灰（第III層）上面で遺構検出を行った。Ⅲ層上面は、旧地形にそって南東から北西方向に緩やかに傾斜しており、調査区西寄り約4分の1程の地点で畠の区画境の段落ちが見られた。比較的高位な部分では、表土下にⅣ～層が表出し、畠地造成の際の地形改変が読み取れた。

Ⅲ層上面で検出された顕著な遺構としては、竪穴住居跡10基がある。全て調査区西半部に検出され、2基が切り合いを見せたものの、他は近接することなく散漫な分布状況であった。3号住居跡は、調査区北縁に約3分の1が検出され、残りは舗装道路下に延びていたため全体を調査することができなかつた。また、6号住居跡は旧畠地境の段落ち部に検出されたため、西側壁が検出されず正確なプランを把握できなかつた。

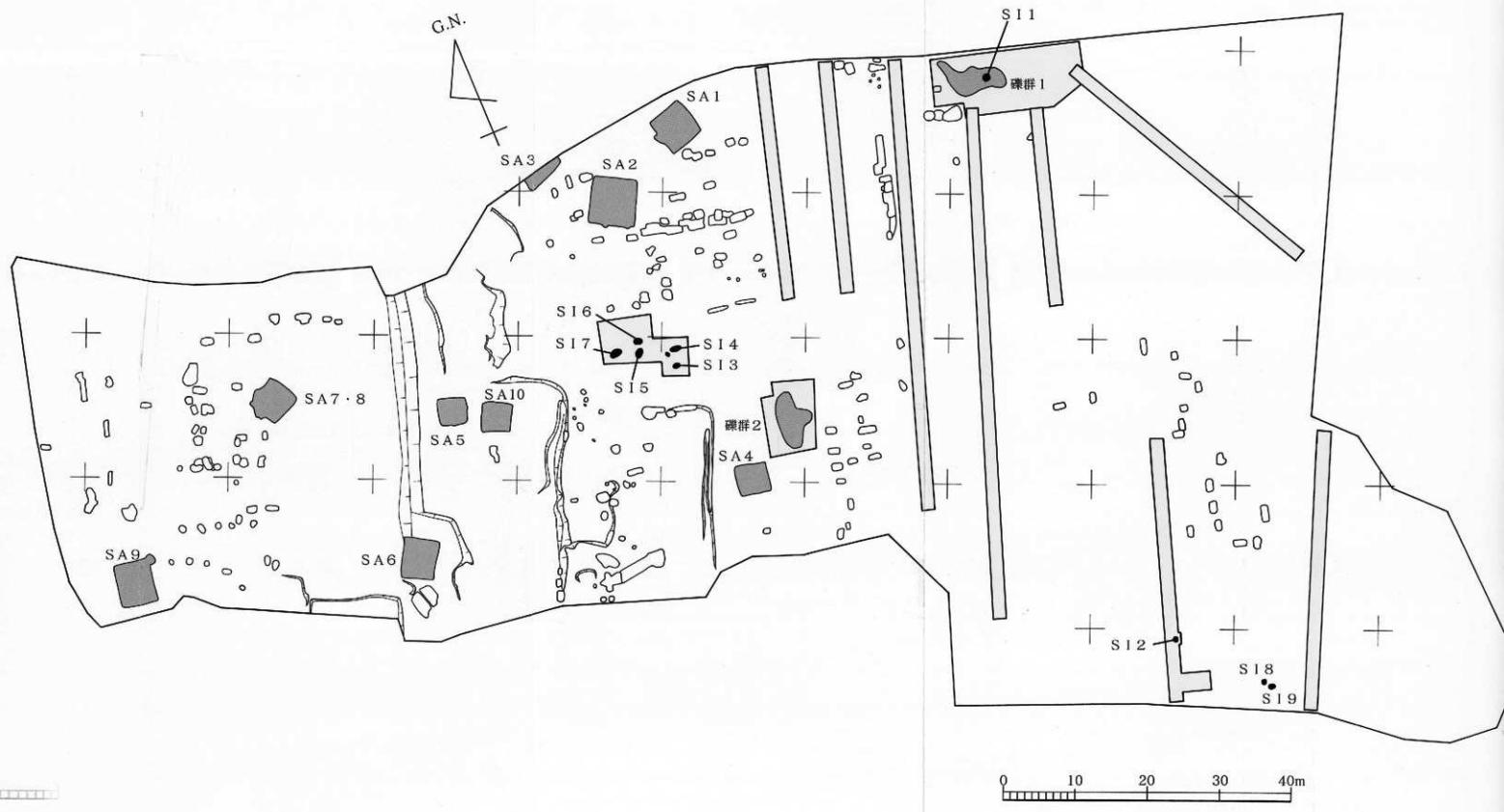
検出された10基の住居跡は、全て方形プランで、ほとんどのものが4本柱である。遺物の出土状況は各住居毎に差が見られ、比較的完形に近いものが床面付近から多数出土したものと、小破片のみが床面から浮いた状態で出土したものが見られた。いずれの住居跡も炉跡（火廻）は明確でなく、6号住居跡に床面の被熱痕と、9号住居跡で床面中央に焼上の高まりが見られたのみである。

竪穴住居跡以外には顕著な遺構は確認されていない。土坑状の掘り込みが多数見られたが、遺物の出土上はなく、埋土も畠耕作土に近似した灰褐色の濁ったもので、後世の耕作に伴うものと判断された。

Ⅲ層検出の竪穴住居跡の調査を終了した時点で、アカホヤ下層（縄文早期）の調査について検討を行った。農地整備施工上、盛土あるいは現状の高さが維持される調査区西半部についてはⅣ層以下の調査を除外し、切り土施工の東半部のみを対象とした。また、調査期間の制約上、東半部全面を4層以下まで掘り下げる事が困難であったため、遺憾ながらトレンチにて遺構・遺物が確認された部分のみを掘り広げることとした。その結果、集石遺構9基と礫群2ヶ所が検出され、貝殻文円筒形土器を主体とする土器、石鎌・スクレイバー等の石器が出土した。制約の多いなか、遺構・遺物とともに断片的な資料を得たに過ぎないが、小谷を挟み対峙する上の原第1・第2遺跡や白ケ野遺跡の当該時期資料と比較検討することによって、調査の不備を埋め本遺跡の縄文早期像の輪郭を浮かび上がらせることが可能であると考えている。

#### 2 層序

上の原第3遺跡の基本層序は、時屋地区の他の遺跡と大きく異なることはない。表土（耕作土）下に黒色土（第II層）の堆積が見られたものの非常に薄く、包含遺物の時期による分層把握は困難であった。部分的には表土直下にアカホヤ火山灰（第III層）やその下層が表出する箇所も見られた。アカホヤ火山灰は一次堆積で、約20～30cmの厚みが見られた。アカホヤ下の黒褐色土（第IV層）、暗褐色土（第V層）は縄文時代早期の遺物包含層であり、礫群・集石が検出されている。



第4図 上の原第3遺跡 遺構分布図 (1/500)

## 第2節 調査の記録

検出された遺構・遺物を、調査の進行に従いⅢ層検出のもの（古墳時代）、Ⅳ層以下検出のもの（绳文時代早期）の順に記述する。表土（耕作土）中からの出土遺物、明らかに所属時期の異なる遺構への流れ込みについては、最後に一括した。なお、掲載した遺物については観察表・計測表を作成した。個別遺物の観察所見はそちらを参照されたい。

### 1 Ⅲ層上面検出の遺構・遺物（古墳時代）

竪穴住居跡を10基検出した。遺構番号は、プランを確定し竪穴住居と認定し得た順に付している。

#### 1号住居跡（第5図）

1号住居跡は、調査区北縁ほぼ中央に検出した。5.5×5.1mの方形プランで、検出面からの深さ50cmを測る。主柱穴は方形配置の4基で、床面には貼り床が見られたが、柱穴で囲まれる床面中央部は貼り床が見られず浅い土坑状の落ち込みとなった。また、西壁中央に張り出し部が、南壁沿中央に土坑状の落ち込みとその左側に灰白色土による土壁が検出された。後者はその構造からカマドと推定されたが、被熱による変色や炭化物・焼土等は見られなかった。構築途中で放棄された可能性もあろうか。住居埋土はレンズ状の堆積を見せ、遺物の多くは床面直上か若干浮いた状態で出土した（第6・7図）。

1～4は甕である。1・4は住居北東隅、2は北東ピット横で、それぞれ床面直上に倒位で出土した。頭部に稜を持たず、口縁は緩やかに外半する。器面調整はナデ・ハケ目で、粘土の輪積み痕を残す。底部は、やや丸みのある厚手の平底と径の小さな平底が見られる。

5・6は壺である。ともに埋土3層からの出土で、住居の半分以上が埋まった時点での流れ込みと考えられる。5は刻み目貼付け突帯を有し、刻み内に布の圧痕が認められる。6は、やや突出する小さな平底を呈す。

7～14は环である。大きく2つのタイプに分けられる。平底で口径のやや小さなもの（7～10）と、丸底で口径のやや大きなもの（11～14）である。前者にはナデ・ハケ目調整が、後者にはミガキが施され、口縁部は短く内湾する。11・12は、床面から若干浮いた位置で伏せた状態で出土している。

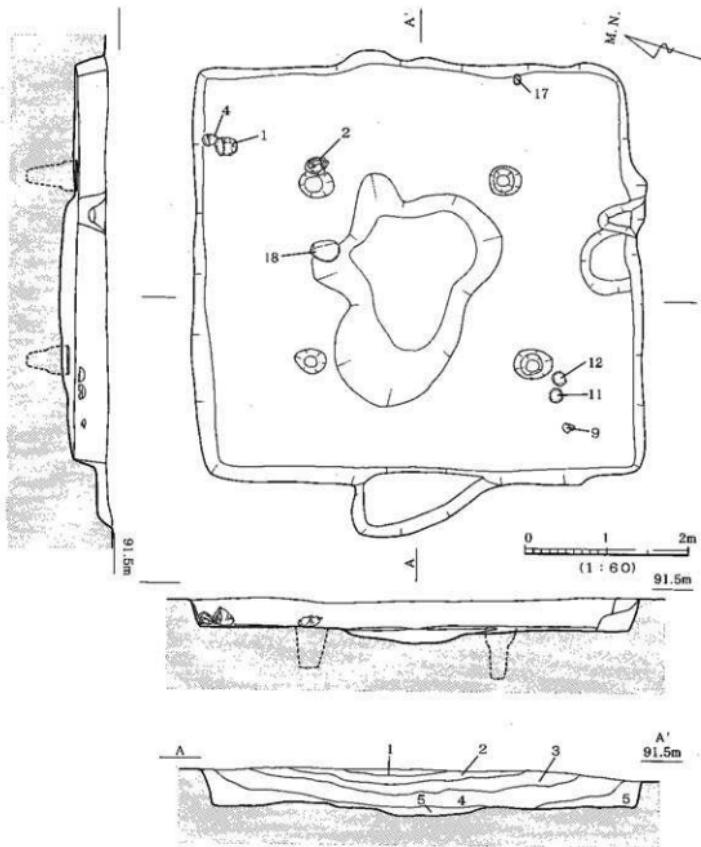
15は須恵器の环蓋である。口縁端部に段を持ち、天井部と口縁部の境に1条の沈線が見られる。TK10に相当する。

16は円盤状高台を有す古代の环で、埋土上位に流れ込むかたちで出土した。高台は左右に張り出し、体部にはロクロ成形の俊線を明瞭に残す。

17は尾鉢山系酸性岩の磨石、18は砂岩の石皿で、ともにほぼ床面上から出土した。

#### 2号住居跡（第8図）

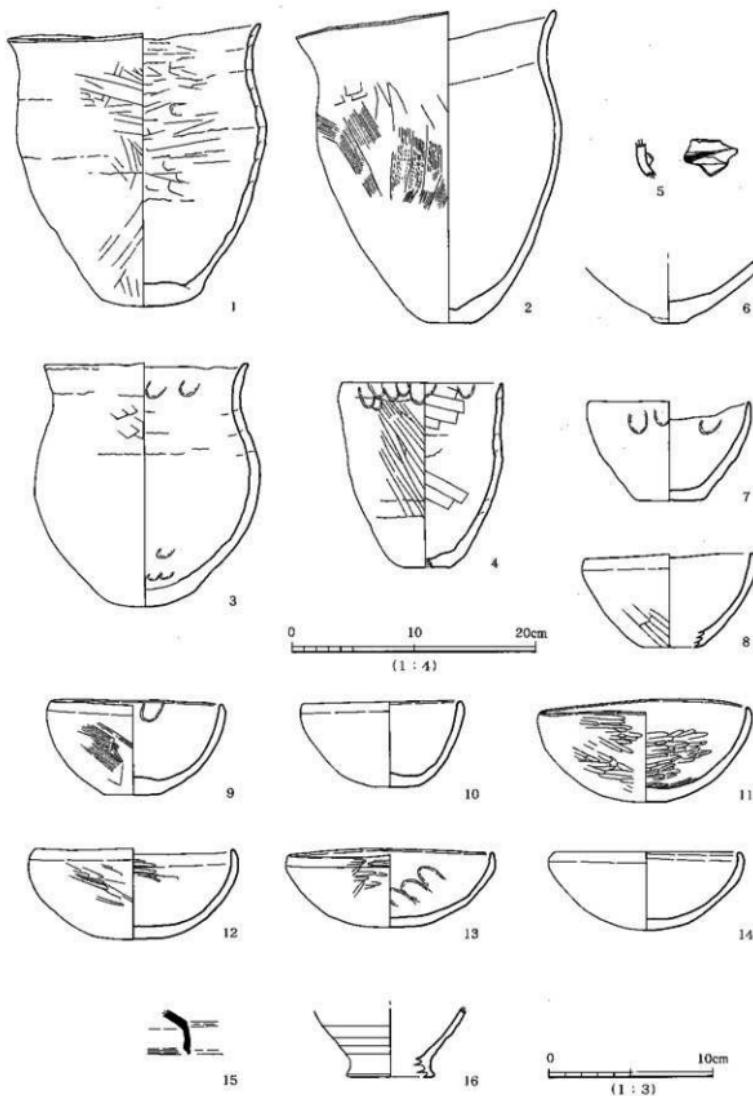
1号住居跡の西側約6mの位置に検出した。一辺約6.5mの方形プランで、検出面からの深さは約80cmを測る。主柱穴は4基。床面には貼り床が見られたが、住居中央部では硬化面が不明瞭となり、やや軟質の土を除去すると、柱穴を囲む範囲よりも一回り大きな段落ちとなり、東を除く三方がベッド状となった。炉跡や焼土は見られなかった。埋土はレンズ状の堆積を見せ、床面直上や10～20cm浮いた状況で多くの遺物が出土している。住居南東隅では、完形の高环が3個体床面直上で出土している（逆立位2、倒位1）。



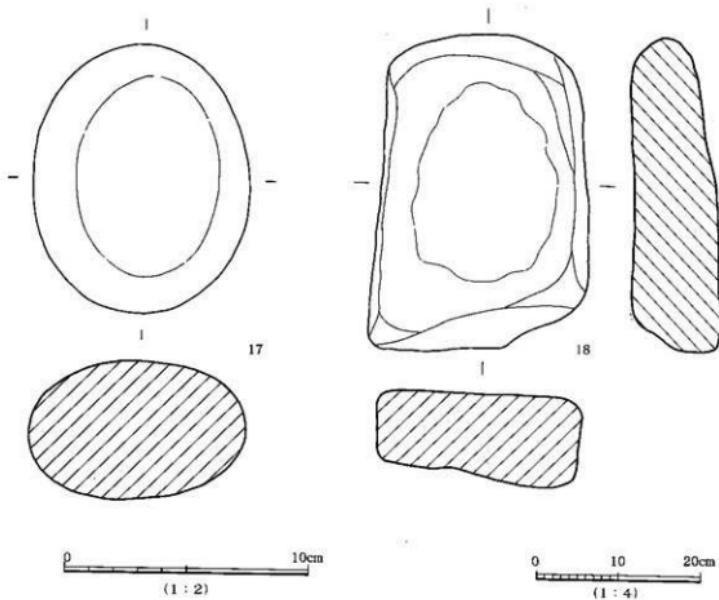
#### 1号住居跡埋土上層注記

- 1 黒褐色土 白・橙色のバミス (1~3mm) を含む。
- 2 暗褐色土 砂質。橙色のバミス含む。
- 3 暗褐色土 炭化物顆粒を多く含む。
- 4 淡褐色土 砂質。炭化物粒を含む。土器片が多く混入。
- 5 棕色土 炭化物粒含む。完形土器はこの層から出土する。暗褐色ブロック (やや硬) を部分的に含む。

第5図 1号竪穴住居跡 (1/60)



第6図 1号竪穴住居跡出土土器 (15・16は1/3、他は1/4)



第7図 1号竪穴住居跡出土石器 (17は1/2、18は1/4)

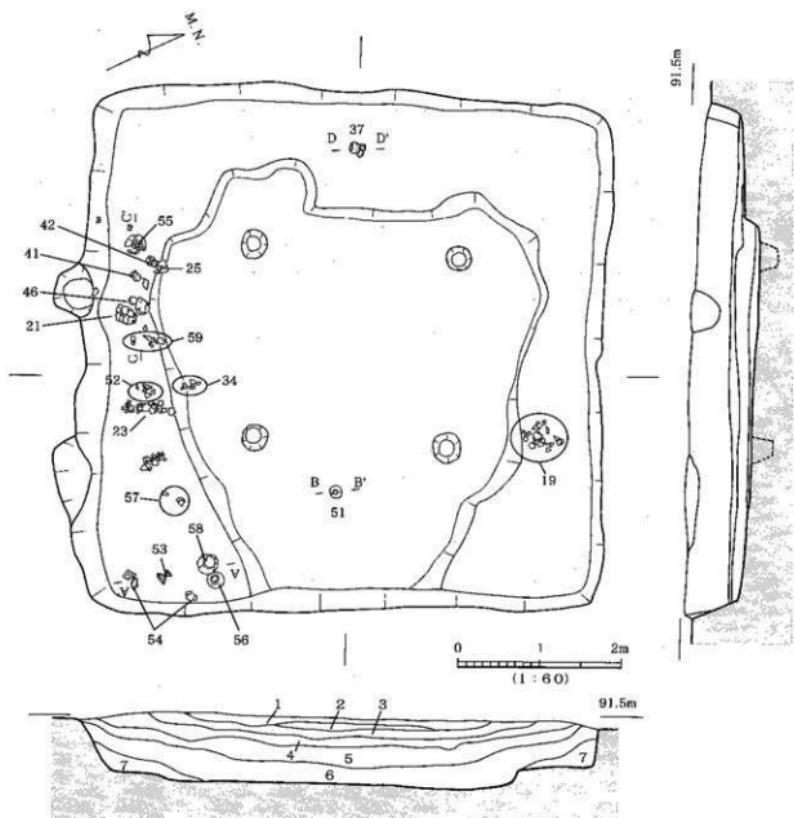
(第9~13図)。住居中央東寄りに出土した高環はかなり浮いた状態であるが、レベル的には南東隅の高環群と等しく、住居の床面を掘り過ぎた可能性もある。そうなると、住居床の段落ち部は方形となり四方がベッド状となることになる。

19~33は甕である。形態的にいくつかのタイプが見られる。屈曲する頸部に稜が見られ、口径と胴部最大径がほぼ等しいもの (19~21)。頸部屈曲が緩やかで、貼付け突帯を持つもの (23)。頸部屈曲がさらに小さくなり稜を持たず、胴部最大径が口径をやや上回るもの (24・25)。口縁部のみを見ても、直線的に延びるもの、外半するもの、先細りするものなど、いくつかの形態が見られる。底部は尖底気味の小さな平底である。また、図示はし得ないが、タタキを施す甕の小破片がまとまって出土している。

34~46は壺である。34は、球形の胴部に強く屈曲し外半する口縁部が付き、刻み目貼付け突帯を持つ。調整は丁寧なナデである。37~40は中型の壺で、球形・扁球形・倒卵形のものが見られる。37は丸底、39・40は平底である。41~46は平底の小型壺である。形態はそれぞれに異なり、41は大きく開く口縁部に肩張りの胴部、42はやや内湾する口縁部に扁球胴、45・46は底径が小さく球形の胴部となる。41・46は、底部外面に凹みを有する。

第1表 上の原第3遺跡出土土器観察表（1）

通 番 号	種 別	器 種 部 位	出 土 地 点	法 量(cm)			手法・調整・文様ほか				色 調		胎 土 の 特 徴	備 考
				口 径	底 径	高 さ	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	土師器	実形 完全形	SA1	20.7	7.2	22.4	横・斜方向のナデ 粘土の織目 スス付着	横・斜方向のナデ 粘土の織目 スス付着	に赤い緑	に赤い緑	5mm以下の褐色	灰色の砂粒		
2	土師器	実形 完全形	SA1	21.3	4.1	25.6	ナデ 粘土の織目 スス付着	ナデ	橙	橙	5mm以下の暗褐色	灰褐色の砂粒		
3	土師器	実形 完全形	SA1	16.6	5.6	20.2	横・斜方向のナデ 粘土の織目 スス付着	横・斜方向のナデ 粘土の織目 スス付着	に赤い緑	に赤い緑	1mm以下の褐色	白灰色の砂粒		
4	土師器	口縁一部部 部	SA1	13.1	4.2	15.2	横・斜方向のナデ 粘土の織目 スス付着	横・斜方向のナデ 粘土の織目 斜面	に赤い緑	に赤い緑	3mm以下の褐色	白色の砂粒		
5	土師器	実形 頭部	SA1				ナデ	風化気味	に赤い緑	橙	2mm以下の茶色	白色の砂粒		
6	土師器	腹部	SA1			2.9	ナデ 工具痕	ナデ	橙	橙	1mm以下の褐色	灰褐色の砂粒		
7	土師器	口縁一部部 部	SA1	13.0	5.6	8.1	ナデ 工具ナデ 所附痕	ナデ 指頭痕	に赤い緑	橙	2mm以下の茶色	白色の砂粒		
8	土師器	口縁一部部 部	SA1	13.8	5.3	7.5	ナデ 工具痕	ナデ 黒斑	橙	橙	2.5mm以下の赤褐色	灰色の砂粒		
9	土師器	完全形	SA1	13.9	4.9	7.8	横ナデ 工具痕 ハケ目	ナデ 指頭痕	に赤い緑	橙	2mm以下の赤褐色	白色の砂粒		
10	土師器	口縁一部部 部	SA1	12.8	4.4	6.9	ナデ	横ナデ	に赤い緑	橙	2mm以下の茶色	褐色の砂粒		
11	土師器	実形 茎部	SA1	16.8	2.5	8.4	ミガキ	ミガキ	橙	橙	2mm以下の茶色	赤褐色の砂粒		
12	土師器	実形 茎部	SA1	16.2	5.6	7.5	ミガキ ナデ 黒斑	ミガキ 黒斑 ナデ	に赤い緑	橙	2mm以下の茶色	白色の砂粒		
13	土師器	実形 茎部	SA1	16.7	5.8	6.4	ミガキ ナデ 黒斑	ミガキ ナデ 黒斑	に赤い緑	橙	1.5mm以下の褐色	白色の砂粒		
14	土師器	口縁一部部 部	SA1	15.0	5.2	6.4	ナデ	ナデ ミガキ 指頭痕	に赤い緑	橙	2mm以下の茶色	白色の砂粒		
15	須恵器	口縁	SA1				ナデ	ナデ	灰	灰	精良			
16	土師器	部	SA1			5.2	ナデ 円盤状高台	ナデ	に赤い緑	に赤い緑	2mm以下の茶色	砂粒		
19	土師器	口縁一部部 部	SA2	26.3		33.8	横ナデ スス付着 斜方向	横ナデ スス付着	に赤い緑	橙	4.5mm以下の褐色	褐色の砂粒		
20	土師器	口縁一部部 部	SA2	22.1			ナデ スス付着	ナデ スス付着	に赤い緑	橙	1mm以下の透明光沢粒			
21	土師器	口縁一部部付近 茎部	SA2	20.8			横ナデ ハケ目 粘土部 黒斑	横ナデ 工具ナデ	に赤い緑 黒斑	橙	0.5mm以下の褐色	褐色の砂粒		
22	土師器	口縁一部部 部	SA2	22.9			スス付着	横ナデ	に赤い緑	橙	0.5mm以下の褐色	褐色の砂粒		
23	土師器	口縁一部部付近 茎部	SA2	21.3			ナデ 黒斑	ナデ 黒斑	に赤い緑	橙	3mm以下の茶色	褐色の砂粒		
24	土師器	口縁一部部付近 茎部	SA2	22.1			ナデ スス付着	ナデ L型板 表面板 粘土の織目 黒斑	浅黄	浅黄	3mm以下の茶色	褐色の砂粒		
25	土師器	口縁一部部 部	SA2	25.4			ナデ	ナデ 粘土日付書き	浅黄	灰黄	2.5mm以下の褐色	褐色の砂粒		
26	土師器	茎部	SA2				ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	1mm以下の透明光沢粒			
27	土師器	口縁	SA2				工具ナデ	工具ナデ	灰黄	灰白	3mm以下の茶色	白色の砂粒		
28	土師器	口縁	SA2				ナデ スス付着	ナデ	に赤い緑	4mm以下の茶色	褐色の砂粒			
29	土師器	口縁一部部付近 茎部	SA2				ナデ	ナデ 粘土の織目	に赤い緑	暗灰黄 橙	4.5mm以下の褐色	褐色の砂粒		
30	土師器	口縁	SA2				スス付着	ナデ	灰黄	に赤い緑	2.5mm以下の褐色	褐色の砂粒		
31	土師器	口縁	SA2				ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	1mm以下の黒の砂粒			
32	土師器	口縁	SA2				スス付着	ナデ	に赤い緑	に赤い緑	2mm以下の茶色	褐色の砂粒		
33	土師器	口縁一部部 部	SA2				ナデ	ナデ	浅黄	橙	4mm以下の茶色	褐色の砂粒		
34	土師器	口縁一部部 部	SA2	15.1			ナデ 刻み目突起 工具痕 スス付着	ナデ 指頭痕 粘土の織目	橙	黄 灰 灰 灰	1.5mm以下の褐色	褐色の砂粒		
35	土師器	口縁一部部 部	SA2				スス付着	ナデ 粘土の織目	浅黄	浅黄	3mm以下の褐色	褐色の砂粒		
36	土師器	茎部	SA2				ハケ目 黒斑	ナデ	灰黄	灰白	1mm以下の黒の砂粒			
37	土師器	口縁一部部付近 茎部	SA2	12.3			ナデ ハケ目 黑斑	ナデ 粘土の織目 黑斑	橙	暗灰黄 橙	1.5mm以下の褐色	褐色の砂粒		
38	土師器	口縁	SA2	14.5			横・斜方向のナデ	横ナデ	浅黄	浅黄	2mm以下の茶色	褐色の砂粒		
39	土師器	腹部	SA2			5.2	ナデ ミガキ	ナデ 粘土の織目 明黄	明黄	明黄	3mm以下の茶色	褐色の砂粒		
40	土師器	口縁一部部 部	SA2	11.3			横ナデ 黑斑	ナデ ハケ目	黄 淡黄	黄 淡黄	1.5mm以下の茶色	褐色の砂粒		
41	土師器	完全形 茎部	SA2	9.8	5.2	10.9	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	に赤い緑	橙	3mm以下の茶色	褐色の砂粒		
42	土師器	口縁 茎部	SA2	7.8	5.9	10.4	ナデ	ナデ 指頭痕	に赤い緑	浅黄	1.5mm以下の茶色	褐色の砂粒		
43	土師器	口縁 茎部	SA2				横ナデ	横ナデ	浅黄	浅黄	1.5mm以下の茶色	褐色の砂粒		
44	土師器	口縁 茎部	SA2				ナデ	横ナデ	浅黄	浅黄	2mm以下の茶色	褐色の砂粒		



## 2号住居跡埋土上層注記

- 1 黒褐色上 しまりなく、乾燥すると黒く崩れる。白のバミス (1~3mm) を含む。
- 2 黒褐色上 白・桜色のバミス (1~3mm) を含む。
- 3 暗褐色土 砂質。橙色のバミス含む。
- 4 暗褐色土 炭化物塊を多く含む。
- 5 淡褐色土 砂質。炭化物粒を含む。
- 6 棕色土 炭化物粒含む。完形土器はこの層から出土する。暗褐色ブロック (やや硬) を部分的に含む。
- 7 暗褐色土 アカホヤブロック、炭化物粒を含む。

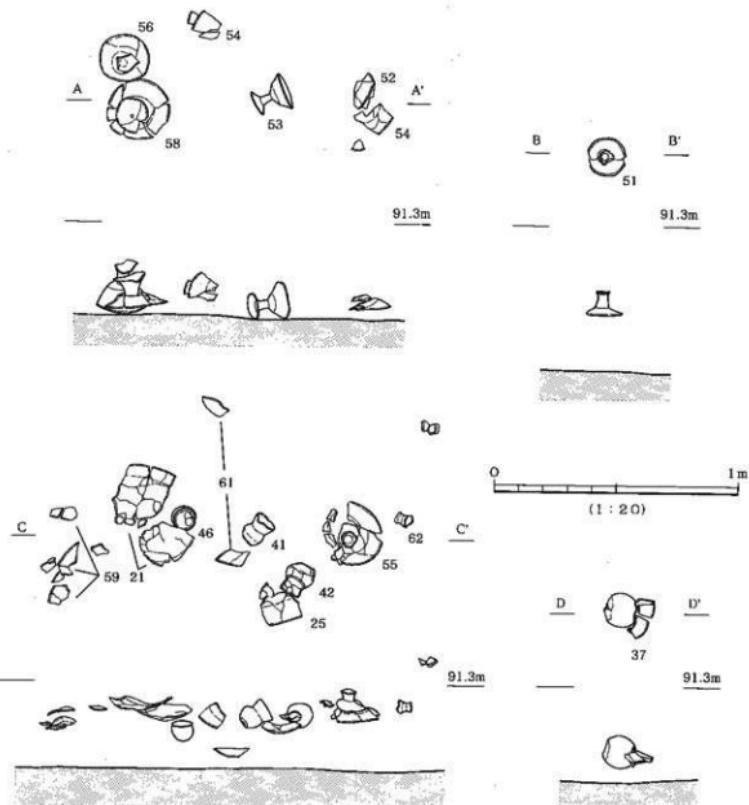
第8図 2号竖穴住居跡 (1/60)

47・48は鉢で、粗いナド調整である。

51~65は高环である。53は倒位で、57・58は逆立位で、北東隅床面直上から出土した。

形態的バリエーションが多様であり、坏部と脚部に分けて分類する。

- 坏部a 浅い体部に直線的な口縁部が付き、稜が明瞭なもの。(51~53)
- b やや深さの有る体部に大きく延びる直線的な口縁部が付くもの。(54~56)
- c やや深さの有る体部に大きく外半する口縁部が付くもの。(57~59)
- d 全体に丸みを持ち、後の不明瞭なもの。(60)



第9図 2号竖穴住居跡土器出土状況 (1/20)

脚部a やや開き気味の直線的な脚に強く内湾する伏鉢状の裾部が付くもの。(51)

b やや開き気味の直線的な脚に強く屈曲する直線的な裾部が付くもの。(52・53)

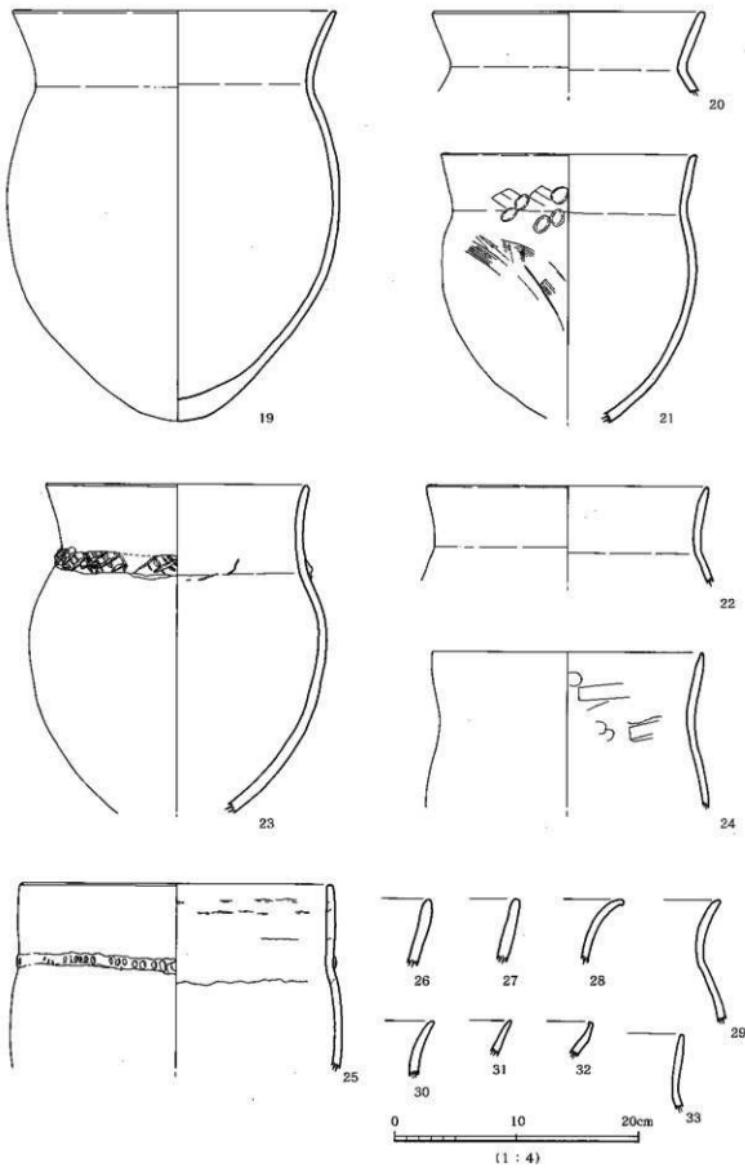
c 滑らかな「八」字形を呈し、裾部との区分が不明瞭なもの。(55・56・58)

さらに、坏部と脚部の接合法には、粘土塊の充填と脚の貼付けの2通りが見られる。

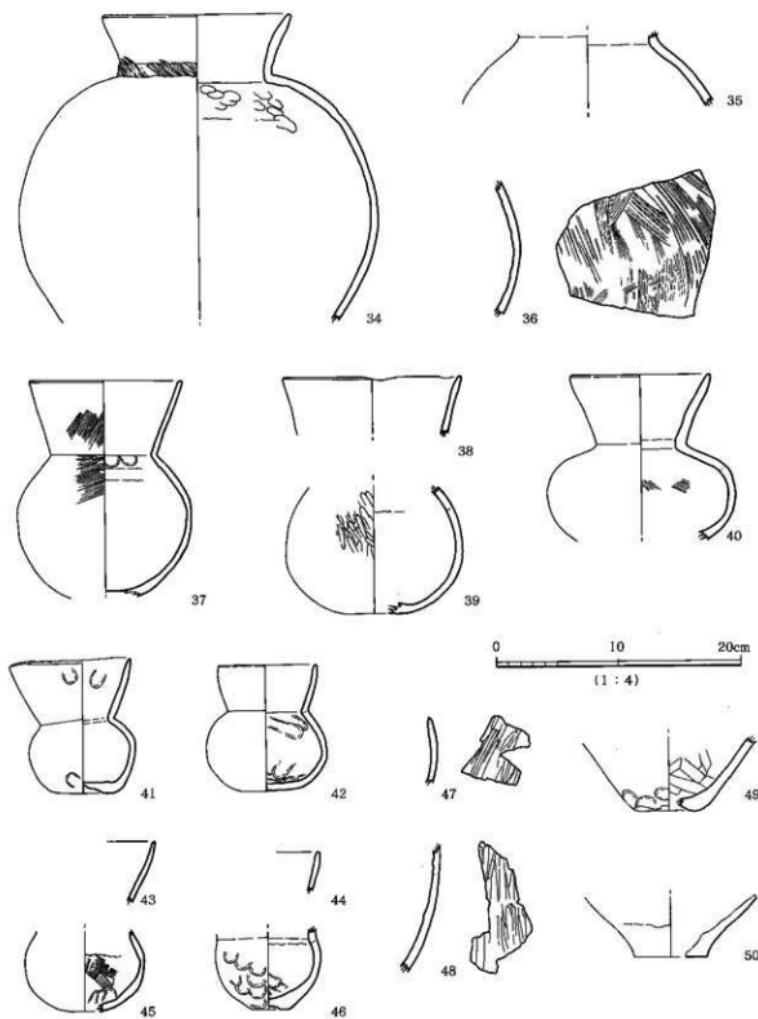
66・67は須恵器である。66は坏身で、たちあがり部のみ残存する。端部には段を残す。TK47に相当する。67は壺腹部で、外面に平行タタキ、内面は同心円當て具痕をナデ消している。

68は鉄器片である。直線と円弧の組合せから半月形をなすと思われるが、欠損のため全体形は不明である。厚さ2mm。端部は平坦な仕上げで刃部等は確認されない。用途不明である。

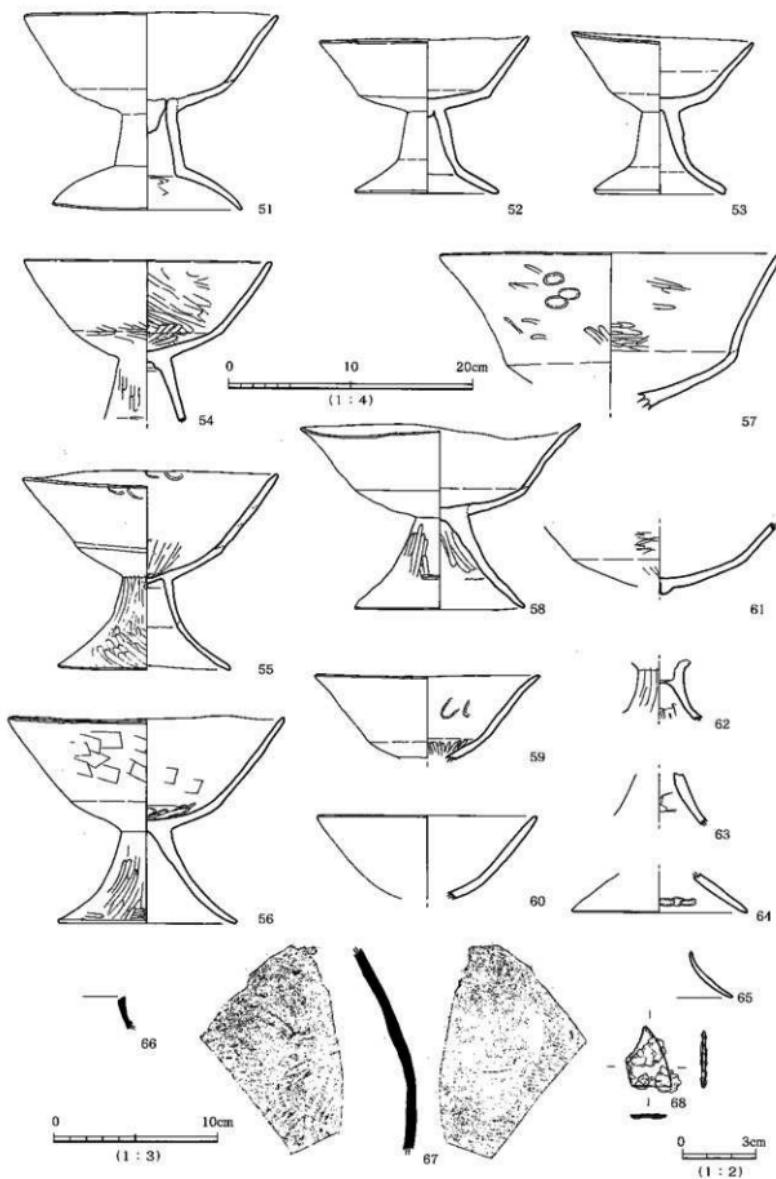
69は砂岩製の磨石で、側端部に敲打痕が見られる。70は頁岩製の打製石斧で、両面からの大まかな剥離をほぼ全周に施している。



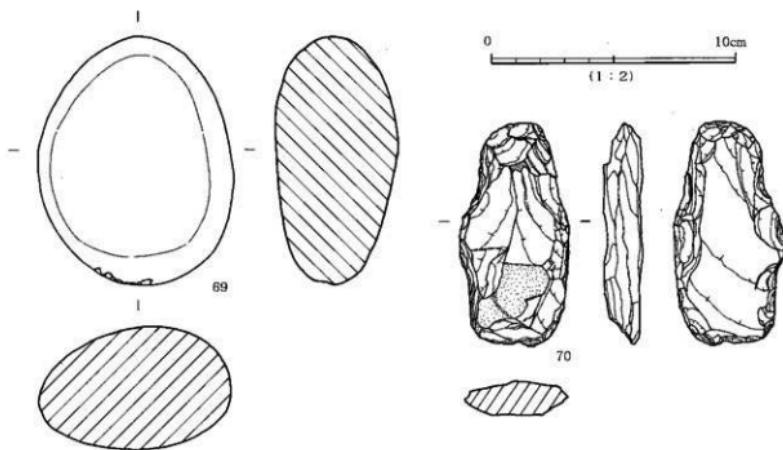
第10図 2号竪穴住居跡出土土器(1) (1/4)



第11図 2号竖穴住居跡出土土器(2) (1/4)



第12図 2号竪穴住居跡出土土器(3)・鉄器 (66・67は1/3、68は1/2、他は1/4)



第13図 2号竖穴住居跡出土石器 (1/2)

### 3号住居跡 (第14図)

2号住居跡の北側約5m、調査区外の道路上に逃げるかたちで、プランの約3分の1を検出した。一方約4.2mの方形プランで、検出面からの深さは約1mを測る。主柱穴は4基と思われるが、そのうち2基を検出した。貼り床は見られず、焼土・炉跡も確認されなかった。遺物は、床面直上で数点出土した他は、埋土中位の第5層から破片が多数出土した。

71~74は甌である。71~73は、明確な接点がないものの同一個体と思われる。薄手の器壁にタタキが施される。74は、口径が頸部最大径を上回る。

75~76は甌で、接点は見られないものの同一個体と思われる。薄手の器壁で頸部に刻目目貼付け突帯を持つ。77の貼付突帯上の交差刻みには、先行のもの（左下り）のみ布の押圧痕が認められる。

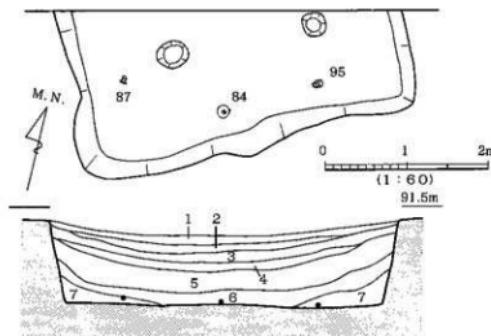
79~82は、小破片のため甌か瓶かの判断をし得ない。やや肥厚するもの、先細りのもの、外半し口唇部を外に折り返すものが見られる。

84~86は高杯である。84は、円柱状の脚に伏鉢状の裾部が付く。85は裾部で、内側に屈曲し稜を有す。

87は脚付の鉢で、口縁が小さく外半する。器面は丁寧にミガキが施される。床面直上から出土した。

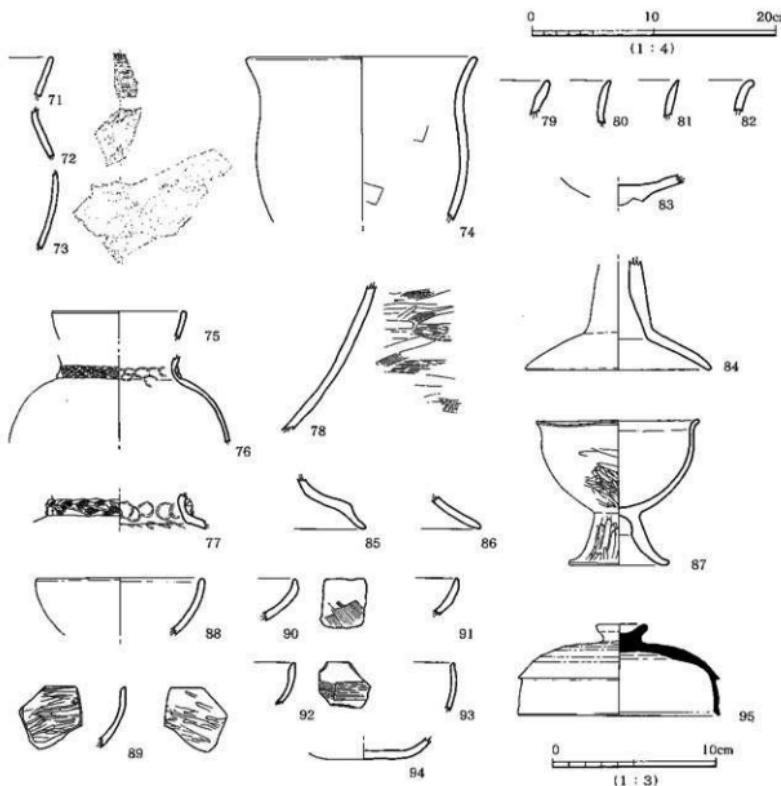
88~94は甌である。体部は一様に丸みを持ち、口唇部を丸く仕上げるもの、口縁部下で短く内湾するもの、先細りの口縁が小さく外半するものなどが見られる。

95は須恵器で、有蓋高杯の蓋である。床面直上から出土している。口径は12.2cmで、鋭い棱と口縁部端の段を行す。つまみを持つ天井部は、その3分の2程度まで回転ヘラケズリが施される。TK23に相当する。

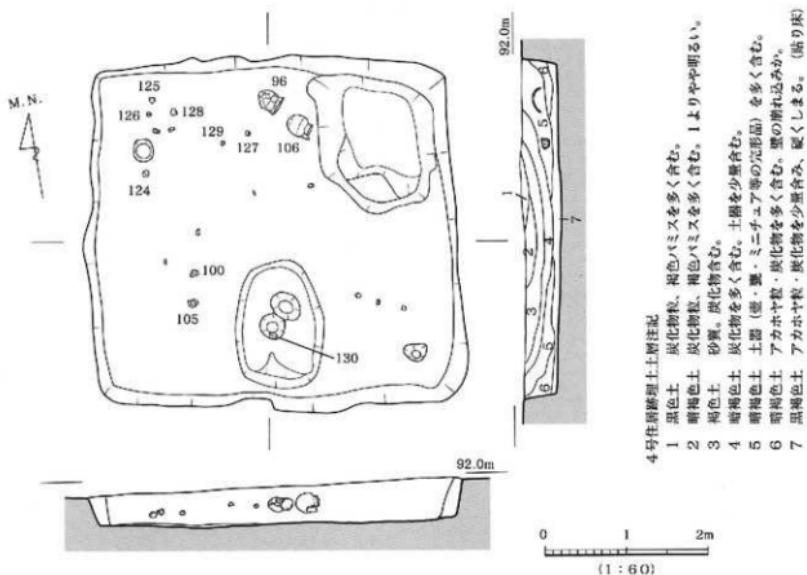


3号住居跡土層注記

- 1 黒褐色土 しまりなく、乾燥すると脆く崩れる。白色のバミス (1~3mm) を含む。
- 2 黒褐色土 白・橙色のバミス (1~3mm) を含む。
- 3 暗褐色土 砂質。橙色のバミス含む。
- 4 暗褐色土 炭化物細粒を多く含む。
- 5 淡褐色土 砂質。炭化物粒を含む。
- 6 梅色土 炭化物粒含む。完形土器はこの層から出土する。暗褐色ブロック (やや硬) を部分的に含む。
- 7 暗褐色土 アカホヤブロック、炭化物粒を含む。



第14図 3号竪穴住居跡 (1/60) 、出土土器 (95は1/3、他は1/4)



第15図 4号竖穴住居跡 (1/60)

#### 4号住居跡 (第15図)

調査区中央南寄りの位置に検出した。4.6×4.4mの方形プランで、検出面からの深さは50cmを測る。床は貼り床で、その上面では柱穴を検出し得なかった。貼り床を除去した時点での柱穴4基と浅い土坑状の落ち込みを2ヶ所検出した。しかし、柱穴の配置は通常の2本柱や4本柱のような対称的なものではなく、いまひとつ不確定要素を残す。埋土はレンズ状の堆積を示し、貼り床面から多少浮いた状態(第5層中)で、ほぼ完形の甕・壺・ミニチュア土器が出土している。

96~105は甕である。96は、明瞭に屈曲する頸部を有し、底部は小さな平底となる。口唇部は平坦に仕上げ、器面調整は粗いナデ、胴部には指頭痕が多く残る。口径と胴部最大径はほぼ等しい。99・100は、接点が見られないものの同一個体と考えられる。長胴で、底部は尖底に近い丸底となる。105は丸底で、底部を含めた外器面にはタタキが施される。

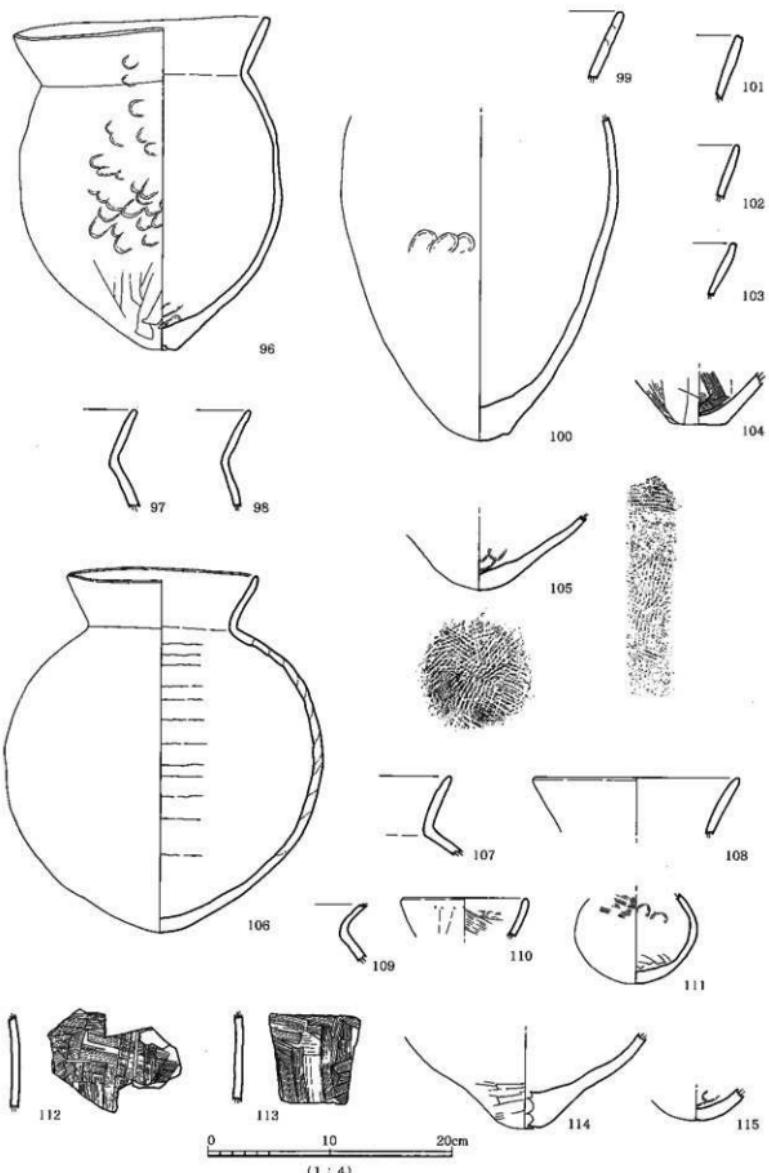
106~115は壺である。106は球胴に尖底に近い小さな平底を持ち、内器面に粘土の輪積み痕を残す。112・113は胴部片で、ハケ目が明瞭に観察される。114は、分厚く突出した小さな平底である。

116~121は高杯である。杯部は屈曲が明瞭で、内外面は細かなミガキ調整である。脚部は、円柱状の脚に強く屈曲する短い据部が付く。

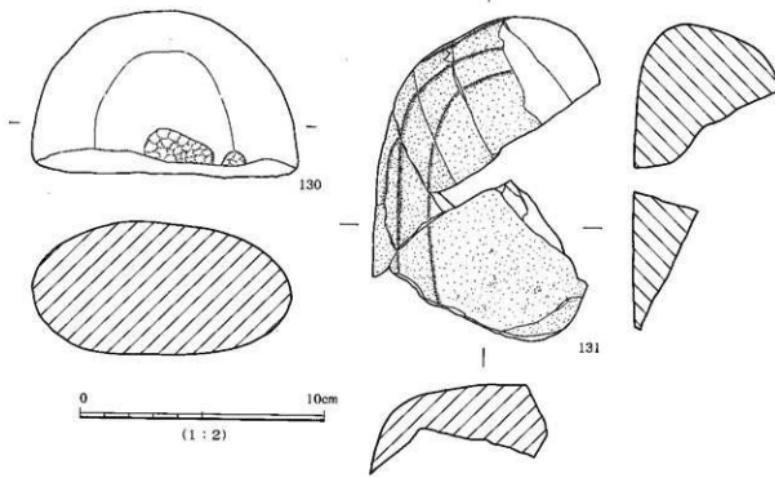
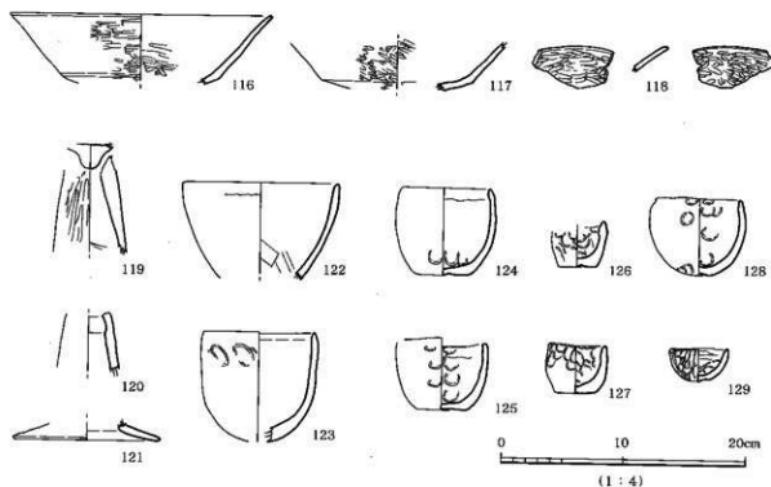
122・123は鉢、124~129は小型の鉢・手づくね小杯である。平底と丸底の両者が見られる。

130は砂岩の敲石で、中央部に敲打痕が見られる。131は砂岩の石皿で、表面は研磨による滑面となる。30cmを超える大きさと思われるが、幅5cm程度の小片に砕けている。

- 4号住居跡上層注記
- 1 黒褐色土 売化物質、褐色バニミスを多く含む。
  - 2 褐褐色土 売化物質、褐色バニミスを多く含む。よりやや明るい。
  - 3 棕褐色土 砂質、液化物含む。
  - 4 褐褐色土 土塊を多く含む。土塊を少數含む。
  - 5 褐褐色土 (壺・壺・ミニチュアの完形品) を多く含む。
  - 6 褐褐色土 アカホヤ粘・液化物を多く含む。壁の削れ込みか。
  - 7 馬鹿色土 貼り床・液化物を少々含み、硬くしまる。(貼り床)



第16図 4号竪穴住居跡出土土器(1) (1/4)



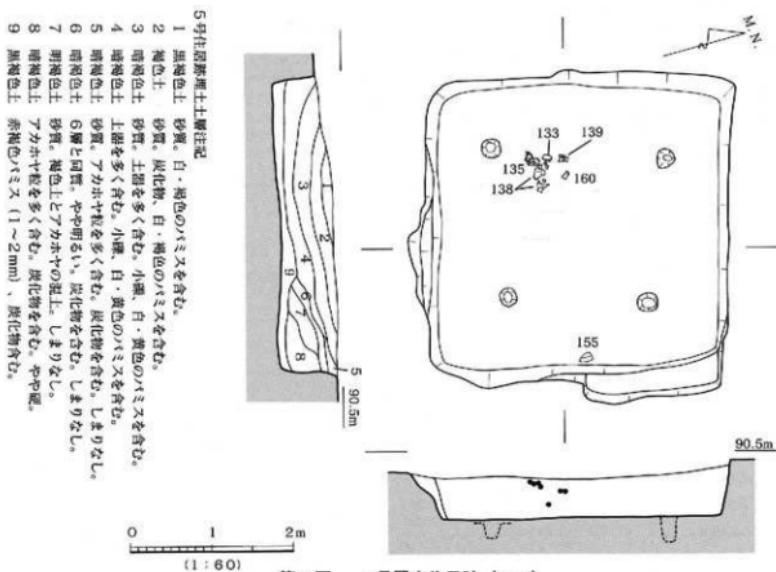
第17図 4号竖穴住居跡出土土器(2)・石器 (130は1/2、他は1/4)

第2表 上の原第3遺跡出土土器遺物観察表（2）

遺物番号	種別	器種	出土部位	法量(cm)		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
				口徑	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		
45	土師器	壺	底部	SA2		2.4	横ナデ 工具痕 黒変	ナデ ハケ目 指頭痕 粘土の縫合目	浅黄橙 浅黄橙	3.5mm以下の灰白色 1mm以下の乳白色	透明光沢	
46	土師器	壺	底部	SA2		3.0	ナデ 指頭痕 黒変	ナデ 指頭痕 粘土の縫合目	にふく音 明赤褐	1mm以下の乳白色	透明光沢	
47	土師器	鉢	口縁	SA2			ケズリ	ナデ	浅黄 灰黄	2.5mm以下の乳白色 1mm以下の透明光沢		
48	土師器	鉢	全体	SA2			ケズリ 黑斑	ナデ 粘土の縫合目	黄灰 浅黄	2.5mm以下の乳白色 1mm以下の透明光沢		
49	土師器	鉢	全体～底部	SA2		4.9	ナデ 指頭痕 粘土のかみり	工具ナデ	にふく音 にふく音	2mm以下の灰白色	透明光沢	
50	土師器	鉢	全体～底部	SA2		5.9	ナデ 指頭痕 粘土のかみり	スコ付痕 粘土の縫合目	暗灰黄 ×	2mm以下の赤褐色		
51	土師器	壺	底部～側部	SA2	20.6	15.3	16.2	ナデ 黒斑	ナデ 工具痕	橙 明赤褐	0.5mm以下の乳白色 2mm以下の白い斑点	
52	土師器	壺	底部	SA2	17.0	11.6	12.6	ナデ	ナデ	橙	光沢無	
53	土師器	壺	全体	SA2	14.6	10.3	12.9	横ナデ	横ナデ	橙	微細な透明光沢	
54	土師器	壺	底部～側部	SA2	19.9		ナデ ミガキ	ミガキ 横ナデ	浅黄 明赤褐	1.5mm以下の乳白色 2mm以下の白い斑点	黑色光沢	
55	土師器	壺	底部～側部	SA2	20.7	14.0	16.2	横ナデ ミガキ 指頭痕 黑斑	横ナデ ミガキ 粘土の縫合目	にふく音 にふく音	2mm以下の乳白色 指頭痕の透明光沢	
56	土師器	壺	底部	SA2	22.4	14.5	16.8	ナデ ミガキ 黑斑 黑斑	ナデ 黑斑 指頭痕 黒いナデ	にふく音 にふく音	透明光沢 2mm以下の乳白色	
57	土師器	壺	底部	SA2	27.7		横ナデ ミガキ	横ナデ ミガキ 黑斑	にふく音 にふく音	2mm以下の乳白色 1mm以下の黒色		
58	土師器	壺	底部	SA2	22.8	13.7	15.2	ナデの間にミガキ 粘土の縫合目 黑斑	ナデの間にミガキ 黑斑 工具ナデ 粘土の縫合目 黑斑	にふく音 にふく音	3mm以下の黒色光沢 2mm以下の乳白色 2mm以下の白い斑点	
59	土師器	壺	底部	SA2	18.2		横ナデ 黑斑	横ナデ 黑斑	浅黄橙 浅黄橙	1mm以下の乳白色 3mm以下の透明光沢		
60	土師器	壺	底部	SA2	17.8		ナデ	ナデ	浅黄橙 浅黄橙	1mm以下の乳白色 1mm以下の透明光沢		
61	土師器	壺	底部	SA2			ナデ ミガキ	ナデ	橙 橙	3mm以下の透明光沢 1mm以下の乳白色		
62	土師器	壺	底部	SA2			ナデ	にひく音 ナデ 黏土の縫合目	にひく音 にひく音	2mm以下の半透明光沢 1mm以下の黒色光沢		
63	土師器	壺	底部	SA2			横ナデ	ナデ 黏土のかえり	橙 黑褐	0.1mm以下の透明光沢 2mm以下の乳白色		
64	土師器	壺	底部	SA2		14.3	横ナデ	横ナデ 指頭痕	浅黄橙 浅黄橙	2mm以下の乳白色 3mm以下の透明光沢		
65	土師器	壺	底部	SA2			横ナデ	横ナデ	浅黄橙 浅黄橙	1mm以下の乳白色 2mm以下の透明光沢		
66	須恵器	壺	底部	SA2			ナデ	ナデ	夏オーラブ 皮オーラブ	1mm以下の乳白色 1mm以下の透明光沢		
67	須恵器	壺	底部	SA2			平行タタキの後ナデ	同心円当て具痕の 下にナデ消し	灰 灰	1mm以下の乳白色 灰白色		
71	土師器	口縁	SA3				タタキの後ナデ スコ付着	ナデ	にふく音 にふく音	3mm以下の乳白色 5mm以下の乳白色		
72	土師器	口縁	SA3				タタキの後ナデ スコ付着	ナデ	にふく音 にふく音	3mm以下の乳白色 5mm以下の乳白色		
73	土師器	口縁	SA3				タタキの後ナデ スコ付着	ナデ	にふく音 にふく音	3mm以下の乳白色 5mm以下の乳白色		
74	土師器	口縁	底部～側部	SA3	18.5		横ナデ スコ付着	横ナデ 工具痕	にふく音 にふく音	4mm以下の乳白色 黑色光沢		
75	土師器	口縁	SA3	10.7			横ナデ スコ付着	横ナデ	にふく音 にふく音	0.5mm以下の乳白色 5mm以下の乳白色		
76	土師器	口縁	底部～側部	SA3			横ナデ 刺み目突起 スコ付着	横ナデ 指頭痕	にふく音 にふく音	1.5mm以下の乳白色 1.5mm以下の乳白色		
77	土師器	口縁	底部	SA3			ナデ 刺み目突起 スコ付着	ナデ 指頭痕	黄橙 黄橙	2mm以下の乳白色 1mm以下の乳白色		
78	土師器	口縁	底部～側部	SA3			粗いナデ	粗いナデ	にふく音 にふく音	1mm以下の透明光沢 1mm以下の乳白色		
79	土師器	口縁	底部	SA3			横ナデ スコ付着	横ナデ	浅黄橙 にふく音	4mm以下の乳白色		
80	土師器	口縁	底部	SA3			横ナデ スコ付着	横ナデ	浅黄橙 淡黄	3mm以下の乳白色		
81	土師器	口縁	底部	SA3			横ナデ スコ付着	横ナデ	浅黄橙 淡黄	2mm以下の乳白色		
82	土師器	口縁	底部	SA3			ナデ	横ナデ	浅黄橙 にふく音	3mm以下の乳白色		
83	土師器	口縁	底部	SA3			横ナデ 工具痕	風化気味	にふく音 黄橙	1.5mm以下の茶色の砂粒		
84	土師器	口縁	底部	SA3			ナデの後ミガキ スコ付着	ケズリ ナデ 黑斑	黄橙 黄橙	2mm以下の乳白色 0.5mm以下の透明光沢		
85	土師器	口縁	底部	SA3			横ナデ スコ付着	横ナデ 黑斑	橙 にふく音	1mm以下の乳白色 0.5mm以下の透明光沢		
86	土師器	口縁	底部	SA3			ナデ	ナデ	浅黄橙 浅黄橙	1mm以下の乳白色 1mm以下の乳白色		
87	土師器	口縁	底部	SA3	13.3	8.2	11.9	横ナデ ミガキ 黑斑	ナデ 明黄橙 橙	2mm以下の乳白色 2mm以下の透明光沢		
88	土師器	口縁	底部	SA3	13.6		ナデ	ナデ	橙 橙	精良		
89	土師器	口縁	底部	SA3			ミガキ 風化気味	ミガキ	橙 橙	精良		

第3表 上の原第3遺跡出土器観察表(3)

遺物 番号	種別	巻種 部位	出 土 地 点	法 量(cm)		手法・調整・文様ほか		色 調		胎の特徴	備考		
				口徑	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
90	土師器	杯 口縫	SA3				ナデ ハケ目	ナデ	に赤褐色 に赤褐色		3mm以下の赤褐色 1mm以下の半透明光沢		
91	土師器	杯 口縫	SA3				ナデ	ナデ	橙	橙	1mm以下の半透明光沢		
92	土師器	杯 口縫	SA3				ナデ ハケ目	ナデ	に赤褐色 に赤褐色		3mm以下の赤褐色 無彩色		
93	土師器	杯 口縫	SA3				ナデ	ナデ	橙	暗灰黄	胎良		
94	土師器	鉢 底部	SA3	6.0			ナデ ハケ目 木の底葉 スス付着 ナデ 指頭痕	ナデ	に赤褐色 に赤褐色		1mm以下の半透明光沢 1mm以下の半透明光沢 3mm以下の赤褐色 無彩色		
95	須恵器	つまみ～口縫	SA3	12.3				横ナデ	灰、 灰				
96	土師器	口縫～底部	SA4	21.0	2.4	27.5	ナデ ハケ目 木の底葉 スス付着 ナデ 指頭痕	後ナデ 指頭痕 黒斑	に赤褐色 に赤褐色		4.5mm以下の褐色の砂粒		
97	土師器	口縫～側部	SA4				ナデ	横ナデ 葉の織ぎ目	浅黄	灰黄	0.5mm～2mmの透明光沢 温色光沢		
98	土師器	口縫～側部	SA4				横ナデ 黒変	横ナデ ハケ日	灰	浅黄	1~3mmの褐色 褐色の砂粒		
99	土師器	口縫 裏	SA4				ナデ 新土の織ぎ目	工具ナデ	浅黄	浅黄	黒斑を含む茶の茶と2.5mm 以下の茶、白、褐色	100-101	
100	土師器	側部～底部	SA4				ナデ 指頭痕 スス付着	ナデ	淡黄 灰黄	灰黄	3mm以下の茶、白、褐色 1mm以下の茶、白、褐色	99と同	
101	土師器	口縫	SA4				ナデ	ナデ	浅黄	淡黄	1~2mmの茶、茶、茶の粒 1mm以下の茶、白、褐色		
102	土師器	口縫	SA4				ナデ スス付着	ナデ	浅黄橙	黄橙	1~2.5mmの灰、褐色の粒 半透明光沢		
103	土師器	口縫 裏	SA4				ナデ スス付着	ナデ	浅黄橙	淡黄	1~3mmの灰、茶、褐色の粒 1mm以下の茶、褐色の砂粒		
104	土師器	側部～底部	SA4	4.7			ハケ目 スス付着	ハケ目	に赤褐色 に赤褐色	橙	2mm以下の褐色、灰褐色		
105	土師器	側部～底部	SA4				ナデ 平行タキ スス付着 無底外縁 タキ	ナデ 指頭痕	明黄褐	浅黄褐	黒斑を含む茶、褐色 2mm以下の茶、白、褐色		
106	土師器	側部 裏部	SA4	15.4		30.0	ナデ 風化味 黒斑	ナデ 葉の織ぎ目 温色	橙 黃	明黄褐	3mm以下の茶、褐色の砂粒 1mm以下の茶、褐色の砂粒		
107	土師器	口縫～側部	SA4				ナデ 工具痕	横ナデ	に赤褐色 に赤褐色	明黄褐	2mm以下の灰の砂粒		
108	土師器	口縫 裏	SA4	16.6			ナデ スス付着	ナデ スス付着	に赤褐色 に赤褐色	2.5mm以下の茶、茶色の砂粒			
109	土師器	側部 裏部	SA4				ナデ 黒斑	ナデ 黒斑	浅黄	灰黄	黒斑を含む透明光沢 3mm以下の茶、白、褐色		
110	土師器	口縫 裏	SA4	10.0			ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	浅黄	浅黄褐	1mm以下の茶、灰色の砂粒		
111	土師器	側部～底部	SA4				ナデ ハケ目 工具痕 指頭痕	ナデ 工具ナデ 指頭痕	橙 黃	1.5mm以下の灰、白、褐色砂粒 透明光沢			
112	土師器	側部 裏部	SA4				ハケ目	ナデ	刷黄褐	淡黄	黒斑を含む、褐色の砂粒 1mm以下の茶、白、褐色		
113	土師器	側部 裏部	SA4				ハケ目	ナデ	に赤褐色 に赤褐色	淡黄	黒斑を含む、褐色の砂粒 1mm以下の茶、白、褐色		
114	土師器	側部～底部	SA4				ナデ 工具ナデ	ナデ	浅黄	灰黄	4mm以下の茶、褐色、灰色 9.5mm以下の茶、褐色		
115	土師器	側部 裏部	SA4				ナデ	ナデ 指頭痕	灰	灰白	1mm以下の茶、褐色の砂粒 4mm以下の茶、褐色、灰色 2mm以下の茶、白、褐色		
116	土師器	高环 環状	SA4	21.2			横ナデ ミガキ	横ナデ ミガキ	黄橙	橙	2mm以下の茶、白、褐色 1mm以下の茶、白、褐色		
117	土師器	高环 環状	SA4				ミガキ	ミガキ 工具ナデ			1mm以下の透明光沢、褐色の砂粒		
118	土師器	高环 環状	SA4				ミガキ	ミガキ	橙	橙	1mm以下の透明光沢、褐色の砂粒		
119	土師器	高环 環状	SA4				ミガキ	ナデ	橙	橙	1mm以下の透明光沢、褐色の砂粒		
120	土師器	高环 環状	SA4				ナデ	工具ナデ	淡黄	暗灰	1mm以下の茶、褐色の砂粒 透明光沢		
121	土師器	口縫 裏部	SA4		11.8		横ナデ 黒斑	横ナデ 黑斑	浅黄	浅黄	1mm以下の茶、褐色 1mm以下の茶、褐色、灰色 1mm以下の茶、白、褐色		
122	土師器	口縫～底部付着 裏部	SA4	12.6			ナデ 葉の織ぎ目 スス付着	横ナデ	浅黄 灰 灰 灰	浅黄 灰 灰 灰	1mm以下の茶、褐色砂粒 透明光沢		
123	土師器	口縫～底部	SA4	9.1			横ナデ 指頭痕	横ナデ	指頭痕	灰	1mm以下の茶、白、褐色 1mm以下の茶、白、褐色		
124	土師器	完形 小环	SA4	7.1	4.5	7.1	ナデ 指頭痕 黑斑	ナデ 指頭痕 葉の織ぎ目	浅黄褐	淡黄褐	3mm以下の茶、褐色 1mm以下の茶、褐色、灰色 1mm以下の茶、白、褐色		
125	土師器	完形 小环	SA4		4.0	5.9	ナデ 指頭痕 黑斑	ナデ 指頭痕 黑斑	暗灰 暗 暗	暗灰 暗 暗	3mm以下の茶、褐色 1mm以下の茶、褐色、灰色 1mm以下の茶、白、褐色		
126	土師器	完形 小环	SA4		3.1		ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	に赤褐色 に赤褐色	4mm以下の茶、褐色 4mm以下の茶、褐色、灰色			
127	土師器	完形 小环	SA4	4.6	3.4	3.9	ナデ 指頭痕 黑斑 スス付着	ナデ 指頭痕 黑斑 スス付着	に赤褐色 に赤褐色	3mm以下の茶、褐色 3mm以下の茶、褐色、砂粒			
128	土師器	完形 小环	SA4	6.8	2.0	6.3	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	反黄褐 に赤褐色	4mm以下の茶、褐色 4mm以下の茶、褐色、灰色	5mm以下での茶、褐色、灰色 4mm以下の茶、褐色、灰色		
129	土師器	完形 小环	SA4	4.5	1.8	2.7	ナデ 指頭痕 黑斑	ナデ 指頭痕 黑斑	暗灰 暗	暗灰 暗	4mm以下の茶、褐色 4mm以下の茶、褐色、灰色		
130	土師器	口縫～底部	SA5	12.5			横ナデ ハケ目 スス付着	ナデ ハケ目 葉の織ぎ目	に赤褐色 に赤褐色	反黄褐 に赤褐色	3mm以下の茶、褐色 3mm以下の茶、褐色、灰色		
131	土師器	口縫～底部	SA5	19.4			ナデ スス付着	ナデ 黑斑	に赤褐色 に赤褐色	反黄褐 に赤褐色	3mm以下の茶、褐色 2.5mm以下の茶、褐色		



第18図 5号竪穴住居跡 (1/60)

### 5号住居跡 (第18図)

調査区中央西寄りの位置に検出された。一辺約3.8mの方形プランで、検出された竪穴住居跡の中で最も小さなものである。検出面からの深さは約70cmを測る。貼り床は見られず、主柱穴は4基である。焼土・炉跡等は確認されなかった。埋土はレンズ状の堆積を示し、中位から上位にかけて遺物が出土している。

132～145は甕である。肩張りせず、胴部最大径を胴中位に持つ。132は頸部が「く」字形に屈曲し、短く外半する口縁部が付く。内器面に粘土の接合痕が残る。133・134は頸部に後を有し、外半する口縁部が付く。135～138は胴部から口縁部にかけて緩やかにカーブし、頸部に稜は見られない。胴部最大径が口径を上回る。137の口縁部には、ヘラ状工具による刻線が見られる。139は138と同一個体と思われ、丸底に近い小さな平底を呈す。

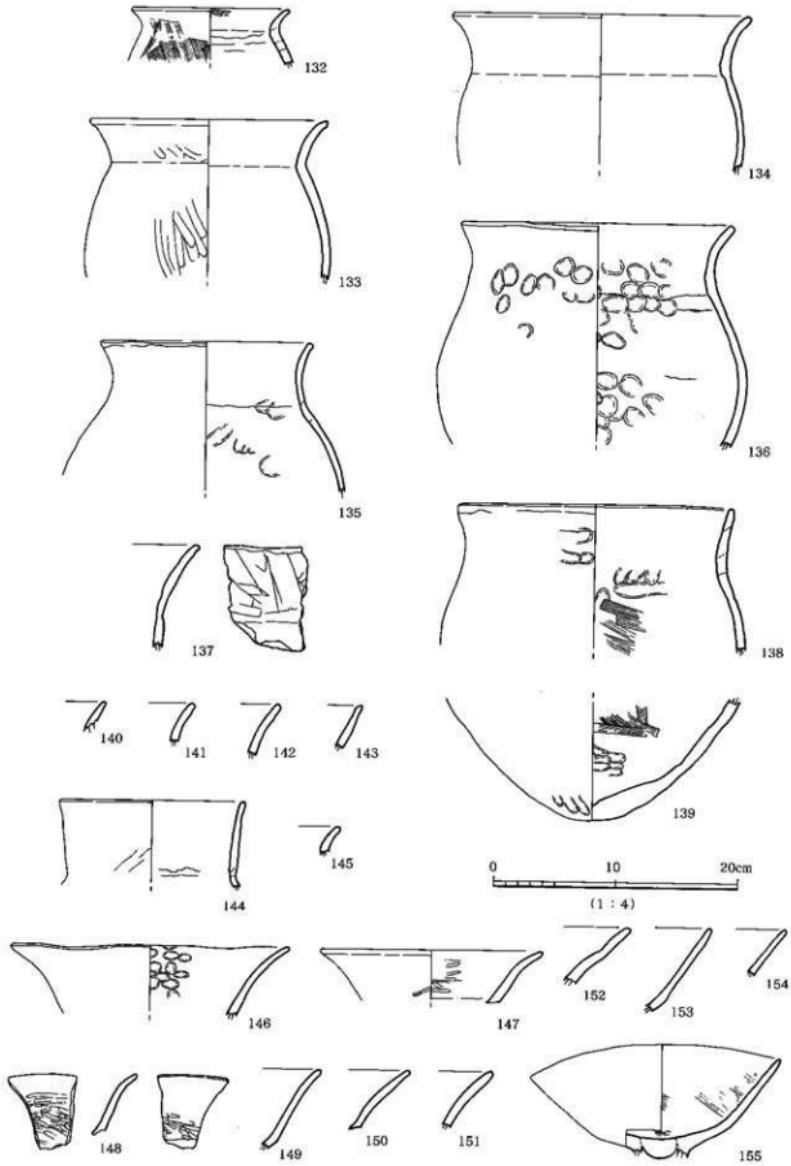
146～163は高坏である。坏部は、口縁部が緩やかに外半するもの、外傾する口縁部が僅かに内側に屈曲するもの、外傾し直線的に延びるもののが見られる。155は、成形後に意図的に口縁部を挟むように歪ませ、梢円形状に変形させている。156は大型の高坏で、口縁部が長く延び坏部は深い。脚部はやや開き気味の円柱形で、屈曲し大きく聞く裾部が付く。坏部と脚部の接合は粘土塊の充填である。162は大きく聞く裾部で、下半部で内側に屈曲し稜を有す。

164～168は坏である。体部は丸みが強く、底部は平底と丸底の両者が見られる。

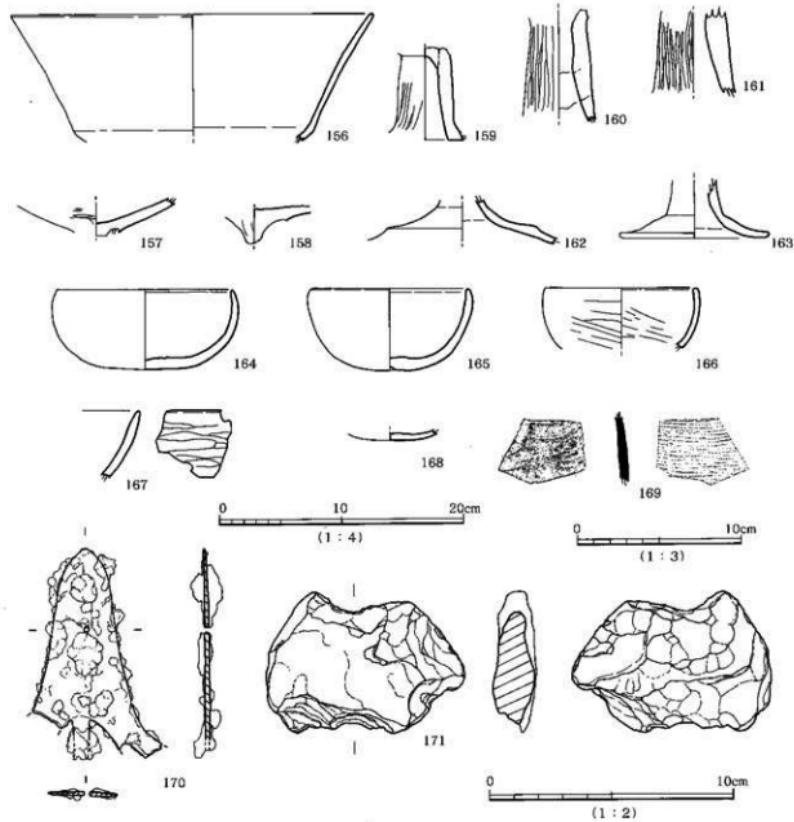
169は須恵器壺の脚部で、外面は細かな平行タタキ、内面は同心円當て具痕をナデ消している。

170は腸抉柳葉鎌で、二重逆刺と舌状の茎部を持つ。現存長8.7cm。鎌身中央に径2mmの穿孔が見られる。

171は溶結凝灰岩製の石鍤で、上下からの打ち欠きにより分銅形に仕上げている。



第19図 5号竪穴住居跡出土土器(1) (1/4)



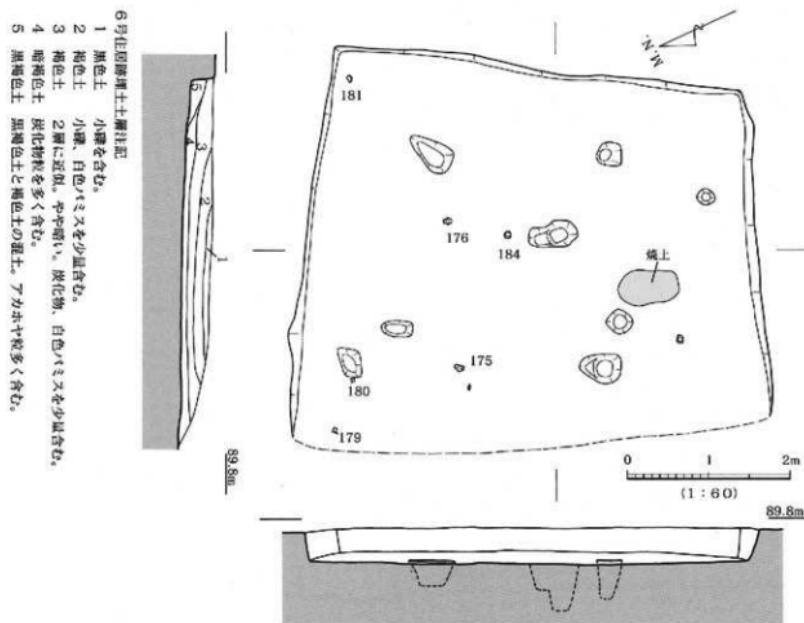
第20図 5号竪穴住居跡出土土器(2)・鉄器・石器 (169は1/3、170・171は1/2、他は1/4)

#### 6号住居跡（第21図）

5号住居跡の南西約16m、調査区西寄りの旧畑地境の段落ち部分に検出された。一辺約5mの方形プランであるが、南西壁はやや開き気味で、北西壁は段落ち部にかかるため検出されず、正確なプランは把握し得なかった。検出面からの深さは約45cmである。床のほぼ全面が貼り床で、柱穴は貼り床を除去した段階で8基を検出した。主柱穴は4基と思われ、南側柱穴間のほぼ中央の床面が被熱により赤褐色に変色していた。出土遺物は少なく、いずれも小破片であったが、床面直上あるいは若干浮いた状態で出土しており、住居と遺物の所属時期は近接したものと考えられる。

172～175は甕である。口縁部は、直線的に外傾し端部を平坦に仕上げるものと、緩やかに外半し端部が丸いものが見られる。底部は、厚みを持つ尖底気味の丸底である。

176は壺で、丸底に近い小さな平底で、内外面はミガキを施す。



第21図 6号竖穴住居跡 (1/60)

177～180は高杯である。杯部は浅く、水平に近い体部に明瞭な稜を有し大きく開く口縁部が付く。脚部は円柱状の脚に強く屈曲する短い裾部が付く。

181・182は杯で、ともにミガキを施す。182は口縁端部が短く外半する。

183は須恵器壺で、外器面は平行タタキの後にカキ目を施している。

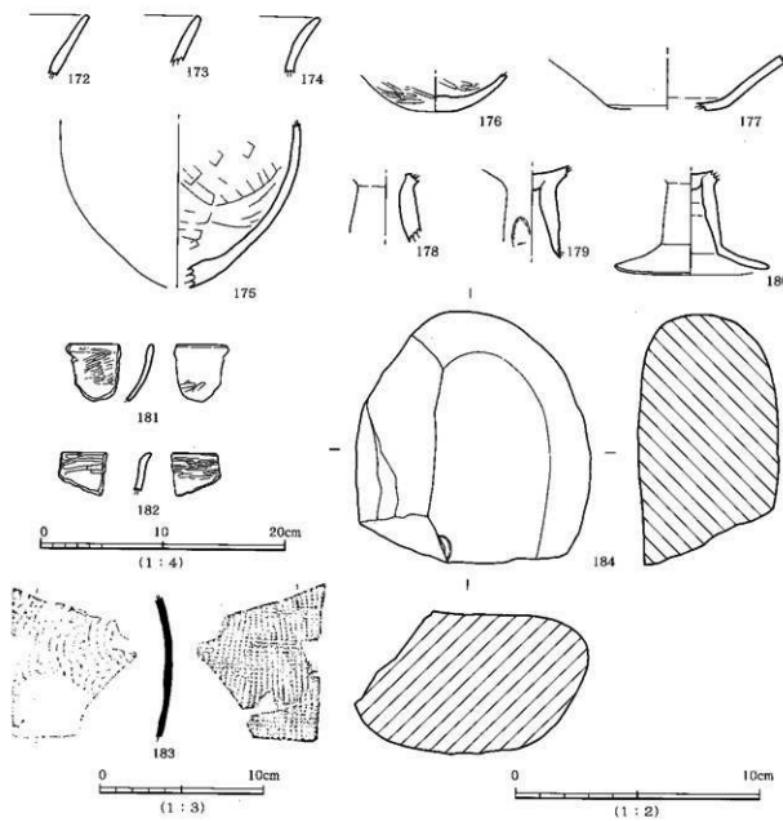
184は砂岩の磨石で、表裏面に研磨痕が認められる。

#### 7・8号住居跡 (第23図)

調査区西側、5号住居跡の西約20mに検出された。本遺跡中で唯一切り合った例であり、埋土土層断面の観察から、7号を8号が切っている。

7号は、 $5.1 \times 4.8\text{m}$ の方形プランで、検出面からの深さは約40cmを測る。床面は貼り床で、焼土等は見られない。柱穴は、コーナー壁際に3ヵ所と床面南東寄りに1ヵ所の計4基を検出したが、主柱穴を認定するには至らなかった。他の住居の柱穴配置を参考に積極的に推定を行えば、8号に切られた部分に3基の柱穴を想定し、方形配置の4本柱と住居コーナーの補助柱とするのが妥当であろうか。

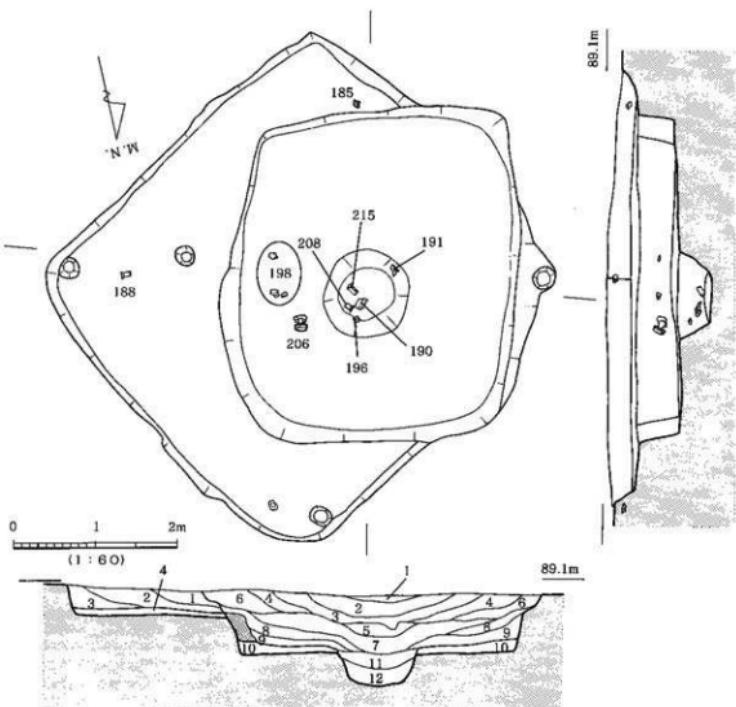
遺物は床面から浮いた状態で出土し、その量も少ない。185は平底の壺、186は丸底の壺である。187～189は高杯で、比較的短い口縁部と、円柱状の長めの脚が見られる。



第22図 6号竪穴住居跡出土土器・石器 (183は1/3、184は1/2、他は1/4)

8号は、4.0×3.5mのやや小ぶりな長方形プランで、主軸は7号と約45°異なる。検出面からの深さは約70cmを測り、床面は黒褐色土と褐色土の混土による貼り床である。床中央部には、直径1m・深さ40cmの円形土坑が検出された。埋土は、焼土・炭化物を多く含み歓賀であった。柱穴は検出されていない。遺物は、土坑内および床面から約20cm程浮いた位置から出土している。

190~197は甕である。191は、口縁部が緩やかに外反するものの、やや内傾しているため口径と頸部径がほぼ等しくなり、頸部径がそれらを上回る。193は尖底気味の平底、194~197は平底となり、196・197は底部外面を押圧により凹ませている。



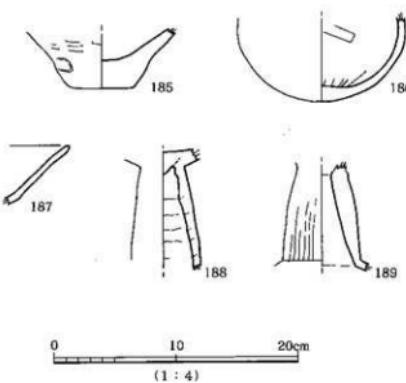
#### 7・8号住居跡土層注記

(7号)

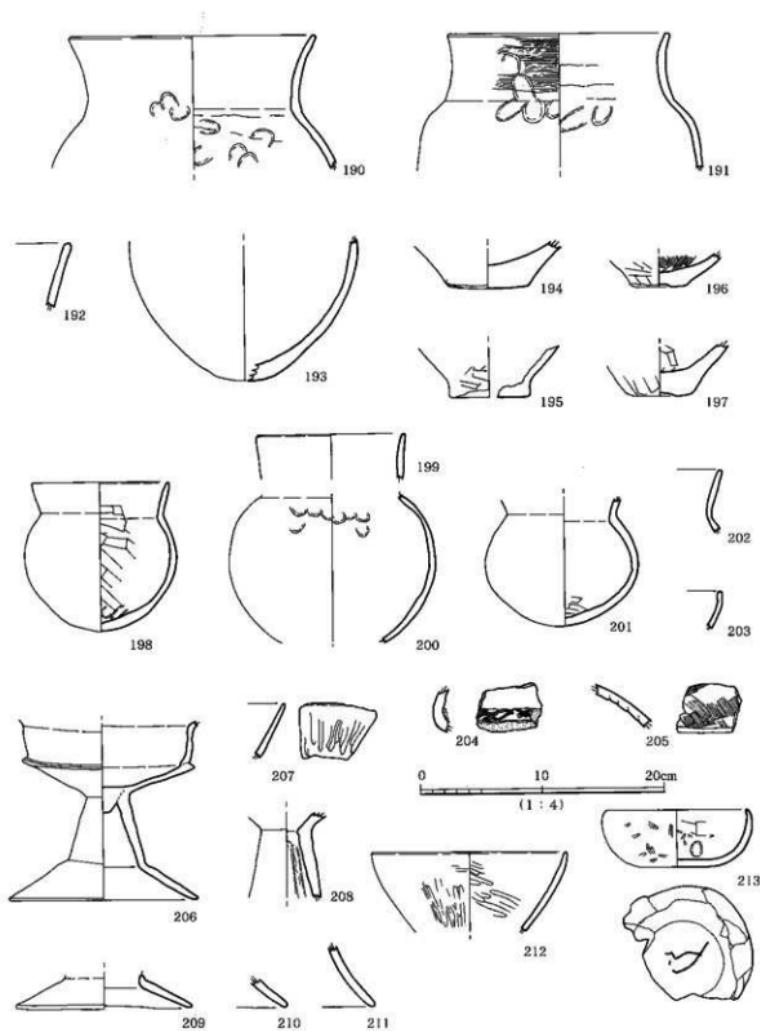
- 1 暗褐色土 アカホヤ粒を含み、炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 1より暗い。土器を含む。
- 3 暗褐色土 アカホヤを多く含む。壁の崩れ込みか。
- 4 明褐色土 脊り床。硬質。アカホヤと褐色土の混上。

(8号)

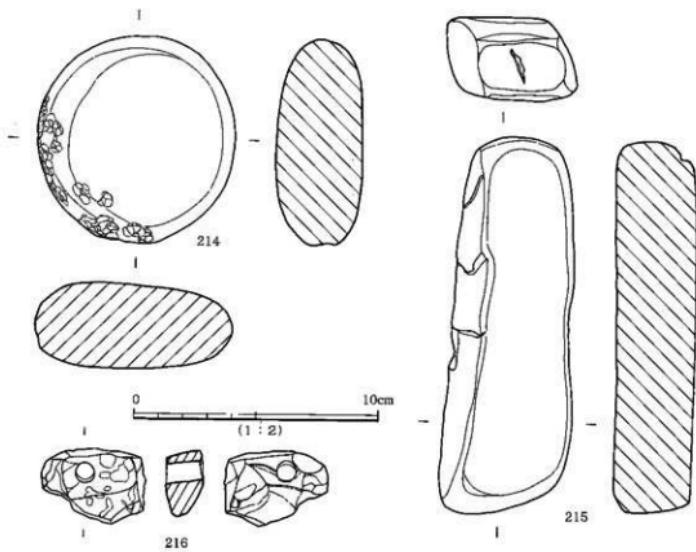
- 1 黒褐色土 棕色・白色バミスを含む。
- 2 褐色土 炭化物、褐色バミスを少量含む。軟質。
- 3 褐色土 2層より暗い。土器片少量含む。軟質。
- 4 暗褐色土 3層に似るが、より暗い。軟質。
- 5 暗褐色土 4層より暗い。炭化物を含む。やや硬質。
- 6 暗褐色土 5層に似るが、褐色土を含みやや明るい。軟質。
- 7 暗褐色土 炭化物、褐色バミスを多く含む。土器片多。軟質。
- 8 暗褐色土 アカホヤ・褐色バミス少量含む。やや硬。
- 9 黑褐色土 炭化物、アカホヤを少量含む。しまり有り。やや硬。
- 10 黑褐色土 キメ細か。しまり有り。褐色土ブロックを若干含む。貼り床。
- 11 暗褐色土 炭化物、焦土を含む。上層土含む。軟質。
- 12 黑褐色土 炭化物、焦土を多く含む。疊・土器片を含む。軟質。



第23図 7・8号竖穴住跡 (1/60)、7号出土土器 (1/4)



第24図 8号竪穴住居跡出土土器 (1/4)



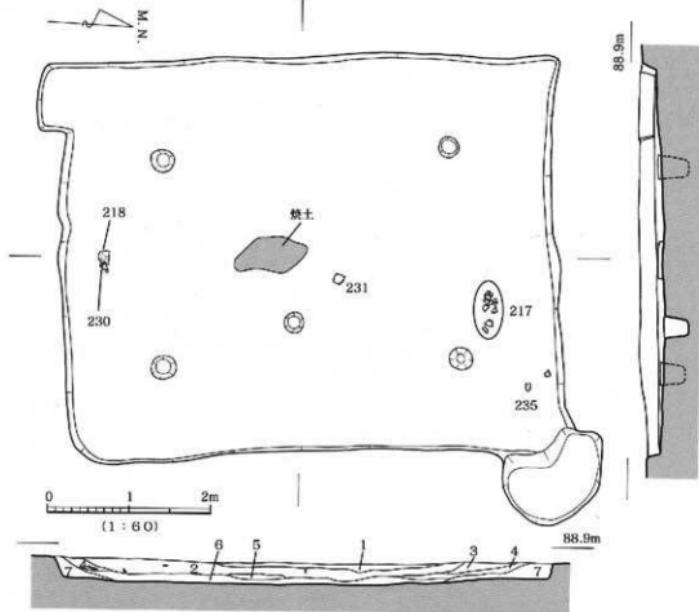
第25図 8号竪穴住居跡出土石器 (1/2)

198～205は壺である。198は小型壺で、頸部径が大きく球脛・丸底である。199・200は同一固体で、球形脣に直立する口縁部が付く。201は扁球形の脣部を持つ小型の丸底壺である。202・203は小型壺の口縁部である。204は布目压痕の刻み目を持つ貼付け突帯である。

206～211は高坏である。206の坏部は須恵器のそれに類似し、受け部状の突出部の内側にはほぼ垂直に口縁が立ち上がり、端部は外反する。底部は円錐形の脚に強く屈曲する裾部が付く。接合は粘土の充填である。211の脚裾部は立ち上がりの角度が大きく、坏基部から屈曲せずに開くタイプである。

212・213は坏で、調整はミガキである。213は底部外面にヘラ描が見られる。

214は砂岩の磨石で、側面に敲打痕が見られる。215は砂岩の砥石。216は軟質の凝灰岩で、円形穿孔が施される。用途不明。



#### 9号住居跡土層注記

- |                               |                             |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色土 白・褐色のバミス (1~2mm) を含む。  | 5 赤褐色土 焼土。炭化物を多く含む。         |
| 2 暗褐色土 炭化物、褐色バミスを含む。土隔片、礫を含む。 | 6 黒褐色土 キメ細か。しまり有り。          |
| 3 褐色土 砂質。炭化物を少量含む。            | 7 暗褐色土 壁の削れ込み。黒褐色土ブロック混。軟質。 |
| 4 暗褐色土 砂質。アカホヤ、炭化物を含む。土隔片含む。  |                             |

第26図 9号竪穴住居跡 (1/60)

#### 9号住居跡 (第26図)

調査区南西隅に検出された。6.1×4.8mの長方形プランで、南西コーナーがわずかに張り出す。北東コーナーには、時期不明の土坑が住居を切っていた。検出面からの深さは約30cmで、貼り床は見られなかった。柱穴は方形配置の4基の他に、中央やや東寄りに1基を検出した。床面中央やや南寄りの位置に焼土が見られた。遺物は、床面から10~20cm浮いた状態で出土している。

217~226は壺である。頭部から口縁部にかけて緩やかに外反するが大きくは開かず、頸部最大径が口径を上回る。220は、球形の胴部に直立気味の口縁部が付く。頭部と口唇部には明瞭に指頭痕が残る。底部はやや厚みのある平底である。内器面には粘土の輪積み痕が残る。

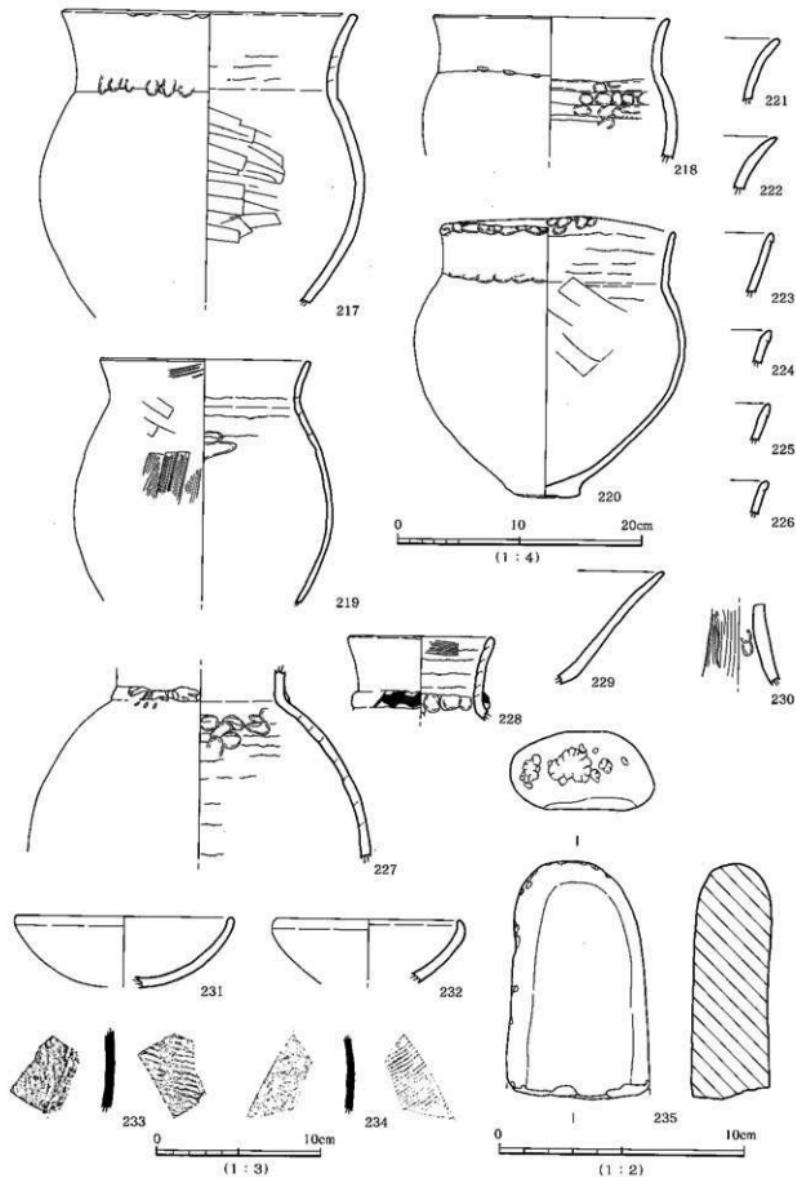
227・228は壺である。ともに頭部に貼付け突帯を有し、227はその大部分が剥離している。突帯下に刻みを施した際のヘラ痕が残る。肩部はあまり張らず、長胴となると思われる。228は突帯上の刻み目に布痕が見られ、内器面には粘土の輪積み痕が残る。

229・230は高杯で、口縁部が長く延びて深さのある杯部と、円錐形の脚である。

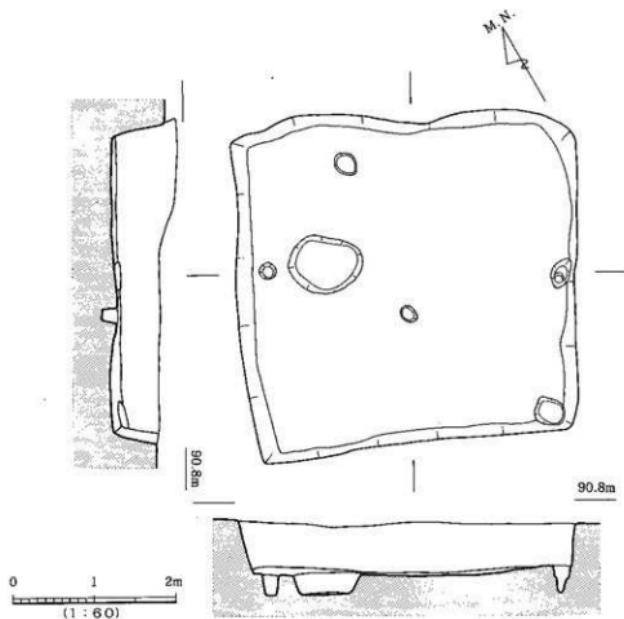
231・232は杯で、口縁部下にやや不明瞭ながら稜を有す。232は口縁部が内湾する。

233・234は須恵器の壺で、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕を残す。

235は砂岩の敲石で、側面に明瞭な敲打痕が見られる。



第27図 9号竪穴住居跡出土土器・石器 (233・234は1/3、235は1/2、他は1/4)



第28図 10号竖穴住居跡 (1/60)

#### 10号住居跡（第28図）

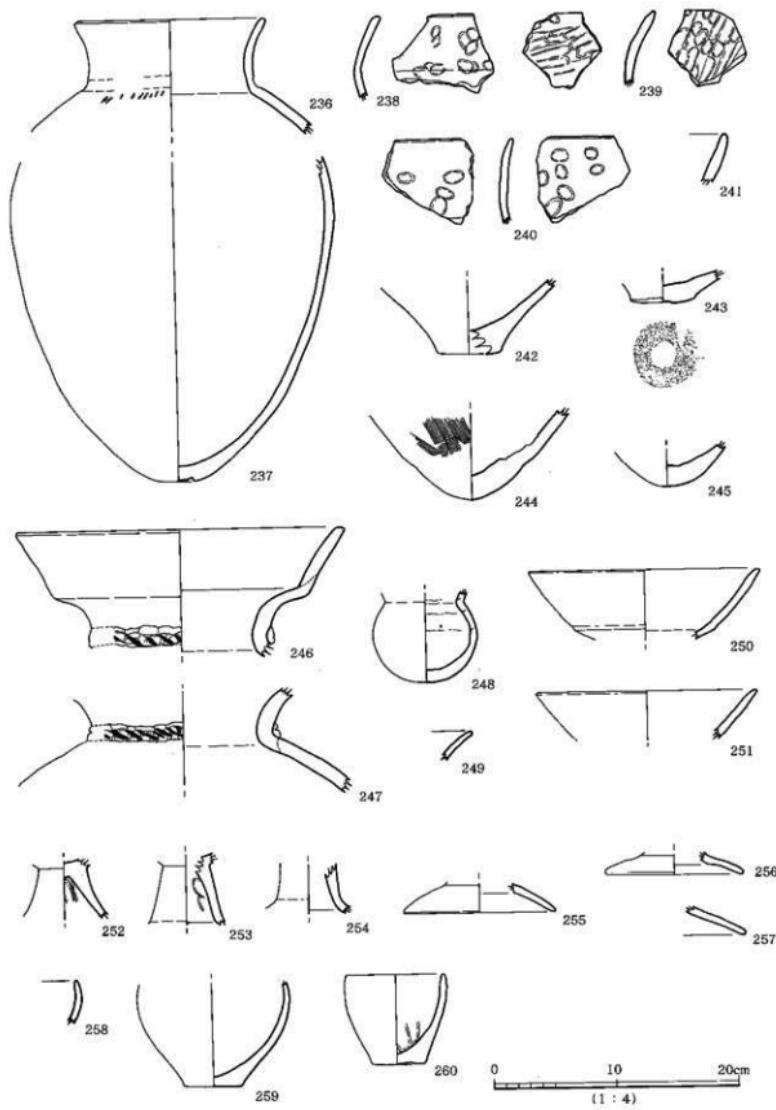
5号住居跡の東側2mに隣接して検出された。一辺約4mの方形プランで、検出面からの深さは約70cmを測る。貼り床は見られず、焼土・炉跡等も確認されなかった。柱穴は5基を検出したが、東西壁際の2基が主たるものと思われる。遺物は、床面から浮いた状態で埋土の中位から出土している。

236～245は甕である。236・237は同一個体で、長胴に尖底気味の平底を持ち、底部外面にヘラ状工具による押圧が見られる。頸部に貼付け突帯を有したと思われるが、全て剥離しており剥離痕と刻み目施文時のヘラキズが残る。頸部で明瞭に屈曲する口縁は、外反して端部を丸く仕上げる。242～245は底部で、平底と尖底気味の丸底が見られるが、243は底部外面を押圧により凹ませている。

246～248は壺である。246・247は接点が見られないものの同一個体である。外傾する二重口縁で、頸部に貼付け突帯を有し、布痕を残す刻み目を施す。248はミニチュアの丸底壺である。

249～257は高环である。250は明瞭な稜を有する環部で、口縁部は内湾気味で深さを持つ。252～254は脚部で、短脚で円錐形を呈す。255は丸みを持つ伏鉢形の裾部である。

258～260は鉢である。258・259は同一個体で、口縁部は内湾する。



第29図 10号竪穴住居跡出土土器 (1/4)

第4表 上の原第3遺跡出土土器観察表（4）

遺物番号	種別	器種	出土法	量(cm)	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考			
					部位	地點	口徑	底径	器高				
134	土師器	甕	口縁～肩部	SA5	24.2					ナデ	ナデ	明黄褐 燒	5mm以下の無灰、高炭の粒
135	土師器	甕	口縁～肩部	SA5	17.1					ナデ	粘土のかえり 工具痕 スス付着	にふく質感 にふく質感	明黄褐 5mm以下の無灰、高炭の粒 2mm以下の無灰、透明光沢
136	土師器	甕	口縁～肩部	SA5	21.8					ナデ	指頭痕 黒斑	にふく質感 黒斑	明黄褐 5mm以下の赤褐色の粒と 灰の粒
137	土師器	甕	口縁～肩部	SA5						ナデ	工具痕	にふく質感 機械的	にふく質感 5mm以下の赤褐色の粒 3mm以下の無灰、高炭の砂質
138	土師器	甕	口縁～肩部	SA5	22.3					横ナデ 指頭痕 粘土のかえり 工具痕 スス付着	横ナデ ハケ日 表面質	にふく質感 にふく質感	黄 5mm以下の茶色、灰色の砂粒
139	土師器	甕	肩部～底部	SA5	3.0					ナデ	指頭痕 スス付着	ハケ日 の後ナデ	にふく質感 5mm以下の茶色、系多色の砂
140	土師器	甕	口縁	SA5						横ナデ 粘土のかえり 工具痕 スス付着	ナデ	にふく質感 にふく質感	2mm以下の茶色、透明光沢 5mmの茶色
141	土師器	甕	口縁	SA5						ナデ	粘土のかえり スス付着	にふく質感	4mm以下の無灰
142	土師器	甕	口縁	SA5						ナデ	風化気味	にふく質感	浅黄褐 2mm以下の茶色、無灰の砂質
143	土師器	甕	口縁	SA5						ナデ	ナデ	淡黄	淡黄
144	土師器	甕	口縁～瓶頸	SA5	15.1					横ナデ 工具痕 粘土のかえり スス付着	横ナデ 指頭痕 粘土のかえり スス付着	にふく質感 にふく質感	1mm以下の茶色、ナチュラル、高 温灰化斑、透明光沢斑、無灰の砂質
145	土師器	甕	口縁	SA5						ナデ	ナデ	にふく質感	2mm以下の茶色、砂質
146	土師器	甕	瓶頸	SA5	22.6					横ナデ	指頭痕	明黄褐	2mm以下の無灰光沢
147	土師器	甕	瓶頸	SA5	18.1					ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	黄 にふく質感	精良 (鐵鍬な光沢板を含む)
148	土師器	甕	瓶頸	SA5						横ナデ ミガキ	ミガキ 炭化物付着	明黄褐 燒	1mm以下の茶色、無灰の砂質
149	土師器	甕	瓶頸	SA5						T.貝ナデ	ナデ	橙	2mm以下の茶色、無灰の砂質
150	土師器	甕	瓶頸	SA5						横ナデ 指頭痕 赤度 スス付着	横ナデ	にふく質感 にふく質感	2mm以下の茶色、無灰の砂質
151	土師器	甕	瓶頸	SA5						ナデ 赤変	ナデ 赤変	明黄褐 燒	1mm以下の茶色、透明光沢
152	土師器	甕	瓶頸	SA5						ナデ 黑変	ナデ	にふく質感	透明光沢、茶色、白土の砂板
153	土師器	甕	瓶頸	SA5						ナデ	ナデ	精良 (鐵鍬な光沢板を含む)	3mm以下の無灰
154	土師器	甕	瓶頸	SA5						ナデ 黑斑	ナデ 黑斑	橙 にふく質感	1mm以下の茶色、無灰の砂質
155	土師器	甕	瓶頸	SA5	20.4					ナデ 風化気味	ハケ目 風化気味 黑斑	黄褐 燒	2mm以下の茶色、無灰の砂質
156	土師器	甕	瓶頸	SA5	29.2					ミガキ (風化の為単刷)	ナデ 風化気味 黑斑	橙	3mm以下の茶色、無灰の砂質
157	土師器	甕	瓶頸	SA5						ミガキ	ナデ 黑変	にふく質感	精良 (鐵鍬な光沢板を含む)
158	土師器	甕	瓶頸	SA5						ナデ	ナデ	橙	0.5mm以下の無灰
159	土師器	甕	瓶頸	SA5						丁寧なナデ ミガキ	ナデ	にふく質感 透黃褐 燒	2mm以下の茶色、無灰の砂質
160	土師器	甕	瓶頸	SA5						ミガキ 黑変	ナデ	にふく質感 1mm以下の透明光沢	1mm以下の茶色、無灰の砂質
161	土師器	甕	瓶頸	SA5						ミガキ	ナデ	にふく質感 透黃褐	1mm以下の茶色、無灰の砂質
162	土師器	甕	瓶頸	SA5						横ナデ 風化気味 黑斑	横ナデ	明黄褐	1mm以下の茶色、無灰の砂質
163	土師器	甕	瓶頸	SA5	12.2					ナデ	横ナデ	淡黄	1mm以下の茶色、無灰の砂質
164	土師器	甕	瓶頸	SA5	14.3	8.2	6.6			ナデ 工具痕 黑変	ナデ 黑変	浅黄褐	浅黄褐 1.5mm以下の赤茶の砂粒
165	土師器	甕	瓶頸	SA5	12.6	5.0	6.8			ナデ 黑変	ナデ 黑変	灰 2mm以下の褐色の砂粒	2mm以下の褐色の砂粒
166	土師器	甕	瓶頸	SA5	12.4					ナデ 黑変	ナデ	浅黄褐 1mm以下の赤茶の砂粒	2mm以下の茶色、無灰の砂質
167	土師器	甕	瓶頸	SA5						ナデ	ナデ 風化著しい	にふく質感 1.5mm以下の赤褐色の砂粒	微細な透明白の光沢
168	土師器	甕	瓶頸	SA5	4.6					ナデ	ナデ 黑變	黄褐	2mm以下の茶色、高炭の砂質 1mm以下の透明光沢
169	氣泡器	甕	瓶頸	SA5						平行タタキ	円心円当て具痕の後ナデ	灰	精良
170	土師器	甕	瓶頸	SA6						ナデ 粘土のかえり 風化 斑斑	ナデ	にふく質感	4.5mm以下の茶色、高炭の砂質
171	土師器	甕	瓶頸	SA6						ナデ	ナデ 黑斑	透黃褐 燒	微細な透明白の光沢
172	土師器	甕	瓶頸	SA6						ナデ	ナデ 黑斑	にふく質感 1mm以下の茶色、無灰の砂質	1mm以下の茶色、無灰の砂質
173	土師器	甕	瓶頸	SA6						ナデ	ナデ 黑斑	透黃褐	1mm以下の茶色、無灰の砂質
174	土師器	甕	瓶頸	SA6						横ナデ スス付着	横ナデ	にふく質感 1mm以下の茶色、無灰の砂質	2mm以下の茶色、無灰の砂質
175	土師器	甕	瓶頸	SA6						ナデ 黑斑 スス付着	工具ナデ	にふく質感 1mm以下の茶色、高炭の砂質	4mm以下の茶色、高炭の砂質
176	土師器	甕	瓶頸	SA6	3.3					ミガキ	ナデ ミガキ 黑斑	浅黄	浅黄
177	土師器	甕	瓶頸	SA6						ナデ	ナデ	淡黄	きめ細かな光沢質

第5表 上の原第3遺跡出土土器観察表(5)

遺物番号	種別	器種	出土部位	法量(cm)			手法・調整・文様ほか				色調	胎土の特徴	備考
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面			
178	上部器	高环 底部	SA6				ナデ	ナデ	白 にぶい青	灰	黒褐色の透明光沢胎 1mm以下の砂粒、薄い砂粒		
179	下部器	高环 底部	SA6				丁寧なナデ 指頭痕	ナデ 葵上の巻ぎ目	淡黄 浅黄橙	きめ細かな光沢胎 1mm以下の黑色光沢胎			
180	下部器	高环 底部～胴部	SA6	12.6			横ナデ	ナデ	浅黄橙 淡黄	浅黄 浅黄	2.5mm以下の灰淡 赤褐色、褐色の砂粒		
181	土師器	口縁 底部	SA6				ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	橙	橙	1mm以下の褐色の砂粒		
182	土師器	口縁～全体	SA6				ナデ ミガキ	ミガキ ナデ	橙	橙	1mm以下の乳白色、薄い砂粒		
183	須恵器	底部	SA6				平行タキの後カキメ	同心円当て具痕	黄灰 浅黄 灰白	黄灰 浅黄 灰白	1mm以下の乳白色を帯びた 1mmの褐色、白色、灰色 灰色透ける部、乳白色の砂粒		
185	土師器	底部～底部	SA7	5.3			ナデ 指頭痕 工具痕	ナデ 黒変 塗化物付着	浅黄 淡黄	淡黄 淡黄	1mmの褐色、白色、灰色 灰色透ける部、乳白色の砂粒		
186	土師器	底部～底部	SA7				横ナデ 黒変 工具ナデ	粗いナデ 工具ナデ	浅黄 黄灰	黄灰 黄灰	2mm以上のトロイ 褐色、褐色の砂粒		
187	土師器	高环 底部	SA7				ナデ 指頭痕 スス付着	横ナデ	灰白 灰白	灰白 灰白	1.5mm以下の灰白色の砂粒 1mm以下の乳白色に透ける部 2mm以下の褐色、白色、灰色 褐色透ける部		
188	上部器	高环 底部	SA7				ナデ 黒変	ナデ 葵上の巻ぎ目	橙 成	橙	1mm以下の乳白色 2mm以下の褐色、白色、灰色 褐色透ける部		
189	土師器	高环 底部	SA7				ミガキの後ナデ	粗いナデ	橙 橙	橙 橙	1mm以下の黒、灰白 褐色の砂粒及び光沢胎		
190	下部器	口縁～胴部	SA8	20.0			ナデ 指頭痕 スス付着	横ナデ 指頭痕 黒土の巻ぎ目	浅黄 淡黄	淡黄 淡黄	2mm以下の褐色 灰褐色、茶褐色の砂粒		
191	上部器	口縁～胴部	SA8	18.1			ハケ目の後ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕 黒土の巻ぎ目	浅黄 にぶい青	浅黄 にぶい青	5mm以下の淡黄色 褐色、褐色透ける部		
192	土師器	口縁	SA8				横ナデ スス付着	横ナデ	にぶい青 白	白	3mm以下の褐色 褐色透ける部		
193	土師器	底部～底部	SA8				ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	明赤褐 橙	明赤褐 橙	2mm以下の褐色 透明白色の砂粒		
194	土師器	底部	SA8	6.6			ナデ 工具痕	ナデ 黒変	黄褐 浅黄	黄褐 浅黄	1.5mm以下の褐色、褐色の砂粒、 白色、白色透ける部、透明白色		
195	土師器	底部	SA8	6.5			ナデ 工具痕 粘土のかき入り	剥離	浅黄 浅黄	浅黄 浅黄	3mm以下の褐色、褐色透ける部、 1mm以下の褐色、褐色透ける部		
196	上部器	底部	SA8	4.5			ナデ 外表面方向の凹 粘土のかき入り	ハケ目 斜射状の工具痕	明黄褐 にぶい青	明黄褐 にぶい青	1.5mmの褐色、褐色透ける部、 透明、黑色光沢胎		
197	上部器	底部	SA8	5.2			前方のナデ 工具痕 スス付着	ナデ 工具痕 スス付着	橙 にぶい青	橙 にぶい青	2mm以下の褐色、褐色透ける部、 1mm以下の褐色、褐色透ける部		
198	下部器	完全	SA8	11.1	12.3		ナデ スス付着	横 斜め方向のナデ 指頭痕 黑変	浅黄橙 浅黄橙	浅黄橙 浅黄橙	微細な黑色光沢胎 5mmKF0系、灰、乳白色		
199	上部器	口縁	SA8	11.3			横ナデ	横ナデ	明黄褐 明黄褐	明黄褐 明黄褐	1mm以下の黒の砂粒	201-1	
200	土師器	底部～底部附近	SA8				ミガキ(底なし不明) ナデ 指頭痕 スス付着	ナデ 指頭痕	橙	橙	1mm以下の茶褐色の砂粒	201-2	
201	土師器	底部～底部	SA8				ナデ 黒変	ナデ	浅黄 明黄褐	明黄褐 明黄褐	1mm以下の茶褐色 灰、灰褐色、褐色の砂粒		
202	土師器	底部～底部	SA8				横ナデ	横ナデ 指頭痕	橙	橙	1mm以下の茶褐色 明赤褐の砂粒		
203	土師器	口縁	SA8				ナデ	ナデ	にぶい青 浅黄褐	浅黄褐 浅黄褐	0.5mmの茶褐色、 灰褐色の砂粒		
204	土師器	口縁	SA8				ナデ 划り目巻き(布刷)	ナデ 風化気味	にぶい青 浅黄	浅黄 浅黄	2mm以下の茶褐色、褐色透ける部、 灰、乳白色、褐色の砂粒		
205	土師器	底部	SA8				斜め方向のハケ目	ナデ 葵上の巻ぎ目	淡黄 浅黄褐	浅黄 浅黄褐	1mm以下の明赤褐色 1mm以下の茶褐色の砂粒		
206	上部器	底部～底部	SA8	15.3			丁寧なナデ 黑変	ナデ 風化気味 粘土の巻ぎ目	橙 横	橙 横	2mm以下の茶褐色、褐色の砂粒 1mm以下の透明光沢胎		
207	下部器	高环 底部	SA8				ナデ ミガキ 風化気味 スス付着	横ナデ 黑変	浅黄褐 灰白	浅黄褐 灰白	1mm以下の茶褐色の砂粒		
208	上部器	高环 底部	SA8				ナデ	ナデ	にぶい青 灰褐	にぶい青 灰褐	2mm以下の茶褐色、褐色透ける部、 灰、乳白色、褐色の砂粒		
209	下部器	高环 底部	SA8	14.2			丁寧なナデ	横ナデ	にぶい青 にぶい青	にぶい青 にぶい青	1.5mm以下の茶褐色の砂粒 1mm以下の透明光沢胎		
210	土師器	高环 底部	SA8				ナデ	ナデ	浅黄褐 橙	浅黄褐 橙	1mm以下の茶褐色の砂粒		
211	土師器	高环 底部	SA8				ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	浅黄褐 横	浅黄褐 横	2mm以下の茶褐色の砂粒 光透明光沢胎		
212	土師器	口縁～底部	SA8	15.8			ナデ ミガキ	ミガキ	にぶい青 浅黄	浅黄	光透明光沢胎		
213	土師器	口縁～底部	SA8	11.35	6.3	4.7	ナデ ミガキ 風变 ハラ記号 ミガキ 指頭痕	ナデ 1.5mmの工具痕 ナデ ハラ記号 ミガキ 指頭痕	明黄褐 灰褐	明黄褐 灰褐	1mm以下の黒色の砂粒		
217	上部器	口縁～底部	SA9	23.6			ナデ 工具ナデの後ナデ 粘土のかき入り 黑變 スス付着	ナデ 工具ナデ 粘土の巻ぎ目 黑變	浅黄褐 横	浅黄褐 横	8mm以下の灰褐色の砂粒 6mm以下の茶褐色の砂粒		
218	土師器	口縁～底部	SA9	19.2			横ナデ 指頭痕 スス付着	横ナデ 指頭痕	にぶい青 浅黄褐	浅黄褐 浅黄褐	4.5mm以下の灰褐色 褐色、褐色の砂粒		
219	土師器	口縁～底部	SA9	16.8			ナデ タキの後ナデ ナメル	ナデ 黒土の巻ぎ目 スス付着	横 指頭痕	横 指頭痕	2mm以下の茶褐色 褐色の砂粒		
220	土師器	口縁～底部	SA9	18.9	23.2	5.8	ナデ タキの後ナデ ナメル	ナデ 黒土の巻ぎ目 スス付着	にぶい青 にぶい青	にぶい青 にぶい青	1~6mmの茶褐色 褐色、褐色の砂粒		
221	上部器	口縁	SA9				横ナデ	横ナデ 黑變	にぶい青 にぶい青	にぶい青 にぶい青	3mm以下の茶褐色 灰褐色、褐色の砂粒		
222	土師器	口縁	SA9				横ナデ	横ナデ	灰黄 灰黄	灰黄 灰黄	0.5mm以下の茶褐色 0.5mm以下の透明光沢胎		
223	土師器	口縁	SA9				ナデ 粘土のかえり スス付着	ナデ	浅黄褐 浅黄褐	浅黄褐 浅黄褐	2.5mm以下の茶褐色 褐色の砂粒		

第6表 上の原第3遺跡出土土器觀察表 (6)

遺物番号	種別	器種	出土部	法量(cm)	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考			
					口徑	底径	厚	器高	外 面	内 面			
224	土師器	甕	SA9						ナデ 粘土のかえり 指頭痕	にい黄	4.5mm以下の角、黒斑の粒		
225	土師器	甕	SA9						ナデ 粘土のかえり スス付痕	にい黄	4mm以下の褐色の粒		
226	土師器	甕	SA9						ナデ 粘土のかえり スス付痕	にい黄	1.5mm以下の灰白 3mm以下の褐色の砂粒		
227	土師器	甕	SA9						ナデ 刻み目突唇	暗灰 灰斑痕	2.5mm以下の茶、褐色の砂粒	223 付	
228	土師器	口縁一部部	SA9	11.6					ナデ 黄土質(赤帶) 横ナデ 刻み目突唇(赤帶)	浅黄褐 灰斑痕	1mm以下の灰白 1.5mm以下の黒い砂粒 1mm以下の光沢の砂粒		
229	土師器	环 环 环 环	SA9						ナデ 風化気味	浅黄褐	浅黄褐 粒		
230	土師器	环	SA9						ミガキ 風化気味	浅黄褐	浅黄褐 粒	精良	
231	土師器	口縁一部部	SA9	17.45					ナデ 風化気味	橙	2mm以下の白色の砂粒 1mm以下の褐色の砂粒		
232	土師器	环 山腹	SA9	15.0					ナデ 風化気味	橙	1mm以下の黒褐色 灰色		
233	須恵器	腹部	SA9						平行タタキ	同心円当て須恵の表長手	黄灰		
234	須恵器	腹部	SA9						平行タタキ	同心円当て須恵の表長手	灰	1mm以下の白色砂粒	
235	土師器	甕	SA10	15.5					横ナデ 刻面が多い 底部に空隙剥離痕	にい黄	2mm以下の灰白 黒褐色	221付	
237	土師器	腹部	SA10	2.4					ナデ 刻面が多い	にい黄	2mm以下の灰白 黒褐色	221付	
238	土師器	口縁	SA10						横ナデ 指頭痕 黒斑	にい黄	1.5mm以下の黒褐色 灰色		
239	土師器	口縁	SA10						ナデ 指ナデ	横ナデ 指ナデ	3mm以下の白色砂粒 透明光沢の砂粒		
240	土師器	口縁	SA10						ナデ 指頭痕 スス付痕	浅黄褐	浅黄褐 灰斑痕		
241	土師器	口縁	SA10						ナデ	風化の為調整不明	にい黄		
242	土師器	腹部	SA10	4.9					斜方向のナデ	斜方向のナデ	灰 灰斑 灰斑痕	5mm以下で灰褐色 乳白、純白の粒	
243	土師器	腹部	SA10	5.3					ナデ 木ノ葉裏	にい黄	5mm以下で灰褐色 灰斑、純白の粒		
244	土師器	腹部	SA10						斜方向のハケ口	にい黄	5mm以下で灰褐色 灰斑、純白の粒		
245	土師器	腹部	SA10						ナデ	ナデ	にい黄 無	5mm以下で灰褐色 灰斑、純白の粒	
246	土師器	口縁一部部	SA10	26.7					ナデ 刻み目突唇(赤帶)	ナデ 著色斑 黏土の表長手	橙 灰斑痕	微細な透明光沢灰 3mm以下の灰白 黒褐色	220付
247	土師器	腹部	SA10						ナデ 刻み目突唇(赤帶)	ナデ 風化気味	橙 灰斑痕	微細な透明光沢灰 3mm以下で灰褐色 灰斑、純白の粒	246付
248	土師器	腹部	SA10						ナデ 黒斑	ナデ 黏土の表長手	にい黄	精良	
249	土師器	口縁	SA10						横ナデ	横ナデ	にい黄	1mm以下の無地	
250	土師器	环 环 环	SA10	18.7					ナデ 風化気味	ナデ 風化気味 黒斑	浅黄 浅黄褐 灰斑痕	2mm以下の半透明光沢灰 1.5mm以下の黒褐色の砂粒	
251	土師器	环 环 环	SA10	17.9					横ナデ 黑斑 スス付痕	ナデ 風化気味	にい黄	2mm以下の半透明光沢灰	
252	土師器	腹部	SA10						ナデ	ナデ 指頭痕	浅黄褐 灰斑痕	2mm以下の半透明光沢灰 3mm以下で灰褐色	
253	土師器	腹部	SA10						ナデ 風化気味	巣方向のナデ 指頭痕	浅黄褐 灰斑痕	1mm以下の黒褐色 0.5mm以下の無地	
254	土師器	腹部	SA10						ナデ 風化気味	巣方向のナデ	にい黄	1mm以下の褐色の砂粒	
255	土師器	环 环 环	SA10	12.3					横ナデ 黑斑	横ナデ	橙 黑	1mm以下の無地 巣方向の無地	
256	土師器	环 环 环	SA10	11.0					横ナデ 黑斑	横ナデ 黑斑	にい黄 黑	1mm以下の無地 巣方向の無地	
257	土師器	环 环 环	SA10						横ナデ	横ナデ	にい黄	1mm以下の無地 巣方向の無地	
258	土師器	口縁	SA10						ナデ	ナデ	橙 明黄褐	2mm以下の褐色 灰褐色の砂粒	257付
259	土師器	腹部	SA10	4.9					ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	橙 黑	3mm以下の灰、灰褐色 乳白色の砂粒	258付
260	土師器	口縁一部部	SA10	7.9	4.2	7.4			ナデ 黏土のかえり 器外縁に凹	ナデ 指頭痕	明黄褐 明黄褐	1mm以下の無地 1mm以下の透明光沢灰	
261	須文土器	深鉢 口縁	IV層						山形市ヤマニホウジヤク 3~4段の位置の表長手 斜方の凸出部の表長手 斜方の凸出部の表長手	粗いナデ	橙 にい黄	1.5mm以下の乳白色 1mm以下の褐色の砂粒	須文土器
262	須文土器	深鉢 口縁	SA4						山形市ヤマニホウジヤク 3~4段の位置の表長手 斜方の凸出部の表長手	粗いナデ	にい黄	1mm以下の乳白色 灰色の砂粒	須文土器
263	須文土器	深鉢 前部	IV層						地文に口盤条痕 2段の模彷凹印表長手 斜方の凸出部の表長手	粗いナデ	にい黄	1.5mm以下の赤褐色 1mm以下の透明光沢 黑色の砂粒	須文土器

## 2 IV層以下の遺構・遺物（縄文時代早期以前）

前章で述べたように、IV層以下（縄文時代早期以前）の調査については、トレントを設定し遺構・遺物の検出された部分のみを掘り広げるという断片的な調査にとどまった。その結果、礫群2ヵ所と集石遺構9基を検出し、多少の遺物が出土した。

### 礫群

調査区北縁と中央部やや南よりの2ヵ所で礫群を検出した。これらは、礫がある程度のまとまりをもって検出されるものの、集石遺構のように密に集中したり土坑を伴なつたりしないもので、疎らに広範囲に礫が検出された。礫群1・2とともにIV層下半部で検出されている。調査区北縁の礫群1内で、特に礫が集中する部分が1ヵ所確認され、1号集石遺構として図化した。

### 集石遺構（第30図）

9基の集石遺構は、1号が礫群1内で、2・8・9号が調査区南東部で、3～7号が調査区中央部で、それぞれ検出された。このうち1・2・4・5・6号を図化し、他は写真と観察所見のみを記録した。

#### 1号集石

1号集石は、100×90cmの範囲に礫が見られた。V層上面に構築される。検出時は平面的に土坑を確認することはできなかつたが、約15cmの厚みで重なつた礫を除去すると、浅い皿状の落ち込みとなつた。10cm前後の大きさの礫が使用され、全体に角張つたものが多かつた。赤化した礫が多かつたが、炭化物はあまり見られなかつた。

#### 2号集石

2号集石は、VI層に掘り込まれて構築される。直径70cmの土坑は深さ15cmと浅いものの、比較的明瞭な掘り込みとして検出された。埋土は炭化物を多く含む黒褐色土で、底面付近には焼土と思われる赤橙色のブロックが確認された。礫は45×35cmの範囲に疎らに見られ、ほとんどが赤化し破碎した3cm以下の小さなものである。

炭化物を多く含む土坑埋土や底面付近の焼土の存在などから、その場で火が使われたことが推定され、焼礫供給の場（火処）であった可能性が高い。また、付近に検出された8号・9号集石も、同じくVI層中に構築され、土坑や礫の状況が2号に近似していたことから、ほぼ同時期で性格を同じくする遺構と考えられる。また、周辺の同レベルから早期土器が出土しないことから、草創期以前の所産と考えられる。

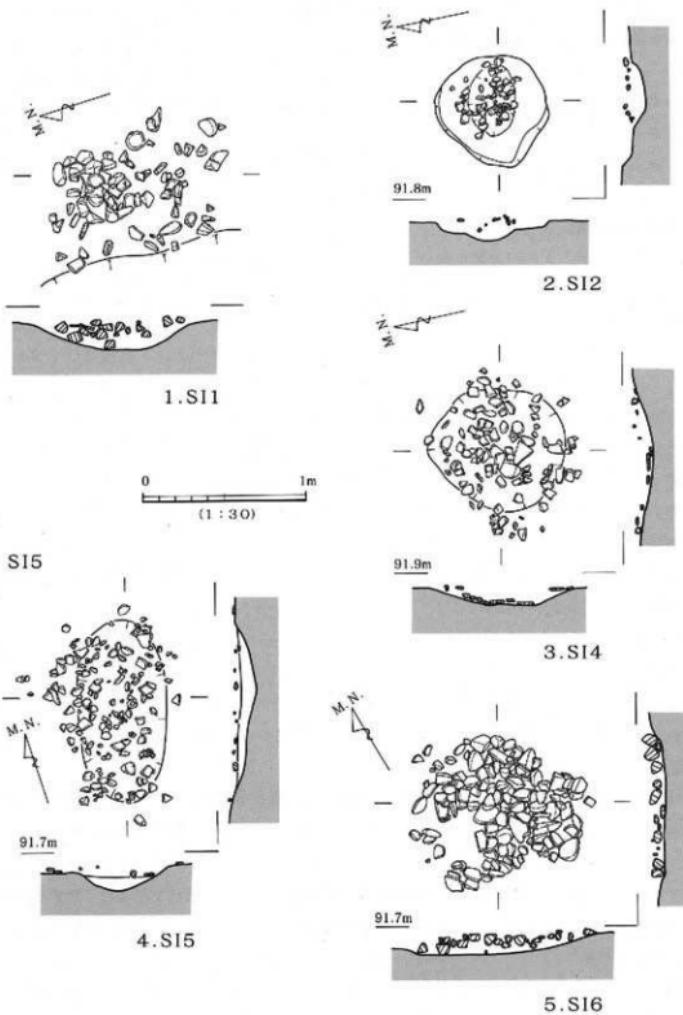
#### 4号集石

4号集石は、85×75cmの円形土坑を有し、V層上面に検出された。10cmと浅い掘り込みの底面には、比較的偏平な礫が並び、埋土は炭化物を多く含む黒褐色土であった。礫の多くは赤化し角張つたものである。

近接する3号集石はほぼ同一レベルでの検出で、礫の大きさやその形状など4号に近似するものの、掘り込みではなく平面的な礫の集積であった。炭化物もほとんど見られず、4号集石に対する準備礫としての性格が想定される。

#### 5号集石

5号集石は、110×55cmと稍円形の土坑を有し、V層上面に検出された。約15cmの厚みをもつ埋土は黒褐色土・褐色土の混土で、炭化物と屑礫が多く含んでいた。土坑上面に見られた焼礫は、3～5cmと小さく碎けた角礫が多く、そのほとんどが赤化していた。礫間に知窓式土器の破片が数点見られた。



第30図 集石造構 (1/30)

## 6号集石

6号集石は、5号に近接して検出された。明瞭な掘り込みは持たず、110×95cmの範囲に礫が集中している。礫はほとんどが赤化しているものの、削れたものは少なく完形度が高い。礫間に炭化物がみられず、5号集石に対する準備礫としての性格が想定される。また、7号集石も5・6号とほぼ同レベルで検出されたが、6号同様掘り込みを持たず割れていない礫の集積であり、炭化物もほとんど見られなかった。その性格も6号のそれに共通すると考えられる。

### 出土遺物（第31・32図）

貝殻文円筒形土器を主体に、いくつかのタイプの早期土器が出土している。ここでは文様・器形をもとに分類を行う。

#### 1類（261～274）

口縁部がやや外傾する円筒形で、薄手の器壁にやや厚みのある凹盤状の平底がつく。文様は、口唇部に細かな刻み目、口縁部下に横位の貝殻腹縫刺突文がめぐる。その下にクサビ形突帯を縦位に2段ほど貼り付けている。胴部は斜位の貝殻条痕を地文に、縦位や斜位の貝殻腹縫刺突文を施す。底部には縦位の細沈線がめぐらっている。「知窓式土器」と呼ばれる一群である。272は角筒となる。

本跡で最も多く出土した早期土器で、3号～7号の集石遺構はこの類の土器を伴う。

#### 2類（275～281）

やや厚めの器壁に横位あるいは斜位の貝殻条痕を施す一群である。275・276は、口縁部下に縦位の条痕を施す。277は口唇部に刻みを施す。28は底部で、最下部まで横位の貝殻条痕が施される。

#### 3類（282・283）

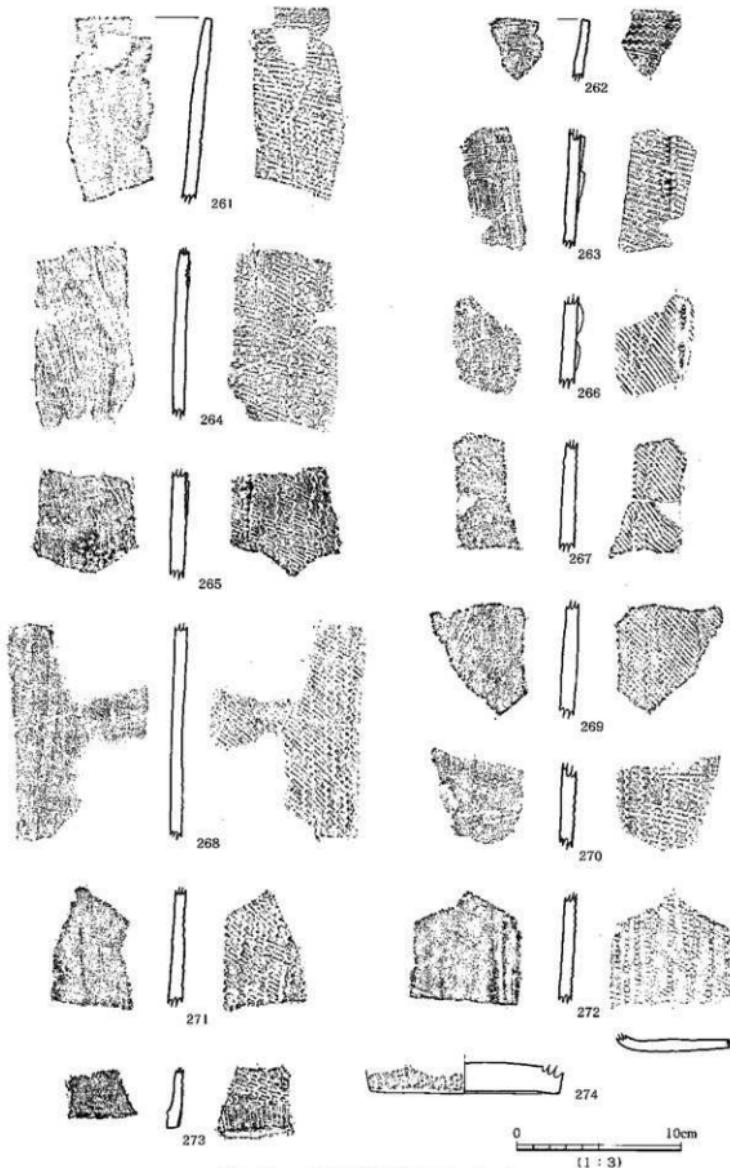
大きく外傾する口縁を持つもので、「平格式土器」である。282は、やや肥厚気味の口縁部に横位・斜位の凹線文を施し、その下に半裁竹管による連続刺突文を2段めぐらせている。283は、斜位の凹線文の下に刻み目突帯が見られる。

#### 4類（284）

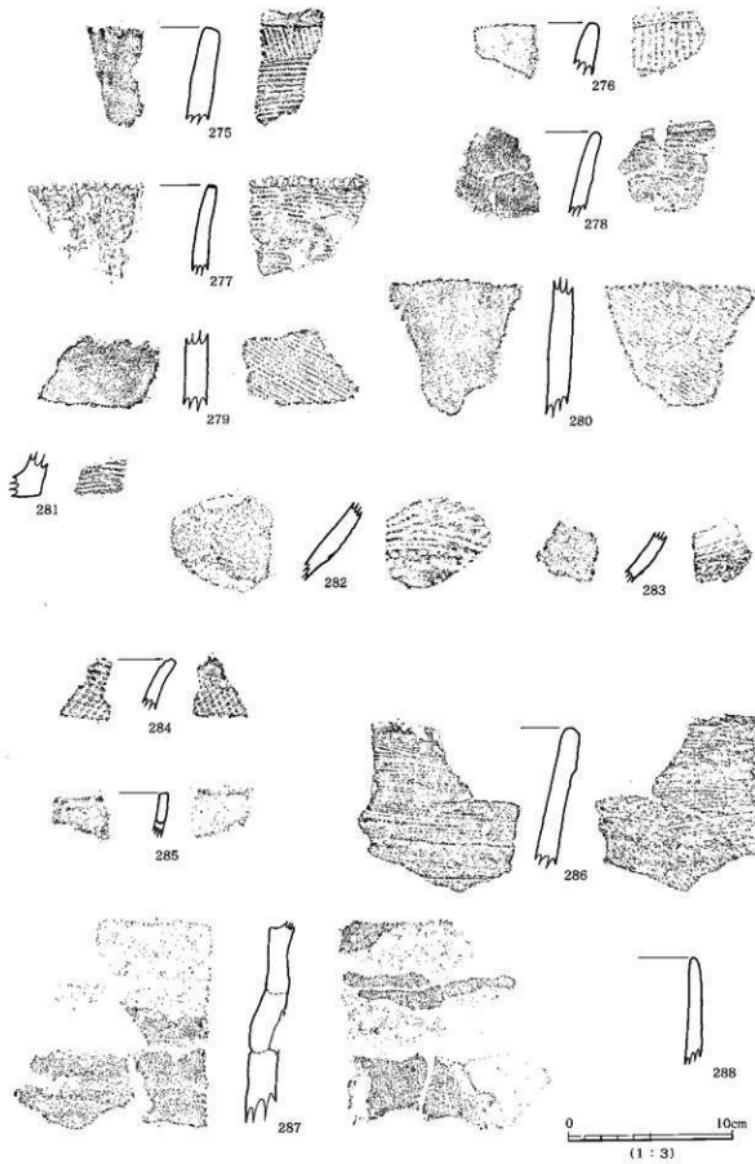
一点のみの出土であるが、押型文土器である。やや外反気味の口縁部の内外面に横円押型文が施される。内面には口唇部付近に押圧が見られ、横位の押型施文、外面は斜位の施文である。

#### 5類（285～288）

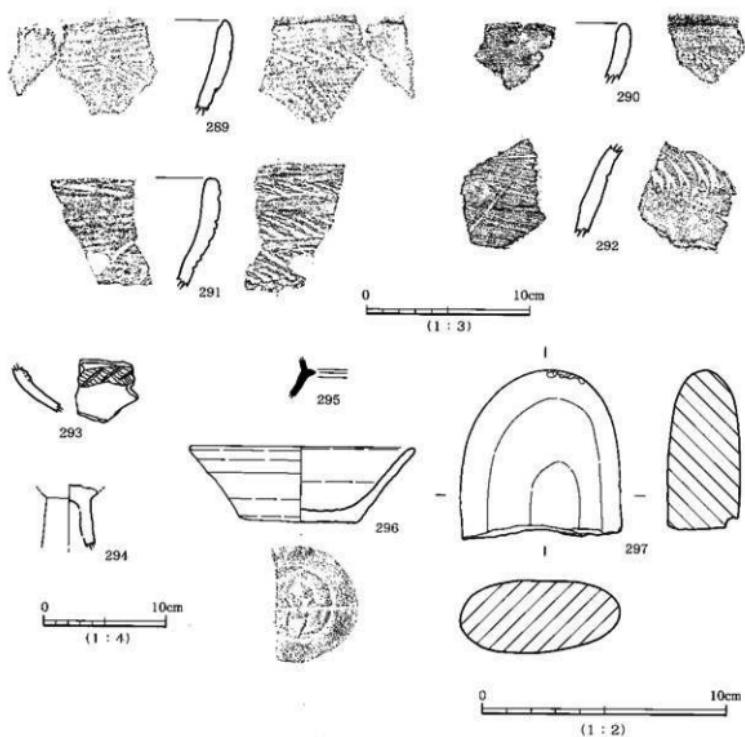
早期土器の範疇に入ると思われるが、明確にその分類的根拠を示し得ないものを便宜的に一括した。285は、やや内湾気味の口縁部で、口唇部を平坦に仕上げる。器壁は薄手で、両側から穿った円形の補修孔が見られる。外器面にわずかに斜位の条痕が観察されるが、その上をナデて仕上げている。286は、厚手の器壁の内外面に横位の貝殻条痕が施されるが、焼成は非常に硬質で色調は白っぽく、II類とは異なるタイプの土器である。口縁部下2cmのところに四線状のものが確認されるが、口縁部の区画の意図があるのか否かは判断し得ない。287は厚手の器壁で、焼成は軟質、内外面ともに剥離・風化が著しい。調整は粗いナデで、粘土の輪積み痕が明瞭である。288は、口唇部を丸く仕上げる直口縁の鉢で、調整は内外面とも丁寧なナデである。



第31図 繩文時代早期土器(1) (1/3)



第32図 桶文時代早期土器(2) (1/3)



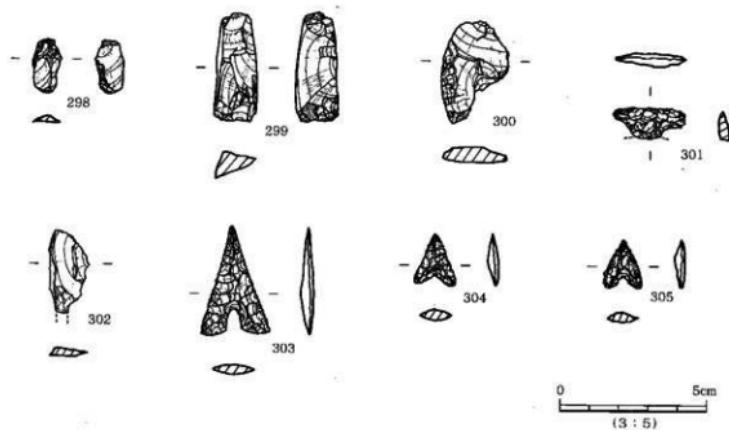
第33図 表土出土遺物(1) (293・294は1/4、297は1/2、他は1/3)

### 3 表土出土の遺物 (第33・34図)

289~291は、肥厚気味の口縁部に、斜位の貝殻腹縁刺突を2~3段やや間隔をおいて施している。292は、やや外傾する口縁に貝殻腹縁刺突によるロッキングが施されている。これらは縄文時代後期に比定される。

293~295は、古墳時代の遺物である。293は壺で、頭部に刻みを有する貼付突帯が見られる。294は円柱状の高环脚部である。295は須恵器环身である。受部はやや太めで、鋭さを失う。

296は古代の土師器環で、直線的な体部に丸く仕上げた口縁部を持つ。底部はヘラ切りで、その後を軽くナデている。



第34図 表土出土遺物(2) (60%)

297は磨石で、側面に敲打痕が見られる。砂岩製。298は黒耀石の細石刃で、頭部を残している。長さ1.8cm、軸0.9cmで、背面左側縁に小剥離状の使用痕が認められる。299は黒耀石の二次加工剥片で、断面三角形の横長剥片の両側に細かな剥離を加えている。300は黒耀石製のスクレイパーである。光沢の少ない黒灰色を呈し、姫島産の石材と思われる。偏平な不定型剥片の片側縁に小剥離による刃部を作り出している。301は、黒耀石製の縦型石匙の基部と思われる。302チャート製の石錐である。303はチャート製の打製石錐で、全面に細かな剥離を施す整美な鋸形錐である。304は姫島産黒耀石製の打製石錐で、乳白色を呈す。基部の抉りは山型で、さほど深くない。305は黒耀石製の打製石錐である。小型のものであるが、基部をU字に抉る鋸形錐である。

第7表 上の原第3遺跡出土土器観察表（7）

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法寸（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
264	圓文土器	深鉢 脚部	IV層				地文に貝殻条痕 2段の環形輪付穴帯 尖端两侧に列点文 底の且脱鐵鍍鉄文	粗いナデ	明赤褐 に赤褐色	明赤褐 に赤褐色	2mm以下の乳白色 2mm以下の透明光沢 黒色光沢粒	鐵土土器	
265	圓文土器	深鉢 脚部	SA4				地文に貝殻条痕 2段の環形輪付穴帯 尖端两侧に列点文 底の且脱鐵鍍鉄文	粗いナデ	におい青褐	橙	1mm以下の乳白色 灰色の砂粒	鐵土土器	
266	圓文土器	深鉢 脚部	IV層				地文に貝殻条痕 2段の環形輪付穴帯 尖端两侧に列点文 底の且脱鐵鍍鉄文	粗いナデ	暗青黄	におい青褐	4mm以下の半透明光沢 1.5mm以下の乳白色 2mm以下の乳白色	鐵土土器	
267	圓文土器	深鉢 脚部	IV層				地文に貝殻条痕 2段の環形輪付穴帯 尖端两侧に列点文 底の且脱鐵鍍鉄文	粗いナデ	灰黃褐	におい青褐	2.5mm以下の金黄色 半透明光沢、孔白の砂粒	鐵土土器	
268	圓文土器	深鉢 脚部	SI4				地文に貝殻条痕 2段の環形輪付穴帯 尖端两侧に列点文 底の且脱鐵鍍鉄文	粗いナデ	微 におい青	橙	2mm以下の透明光沢 孔白の砂粒	鐵土土器	
269	圓文土器	深鉢 脚部	SI5				地文に貝殻条痕 2段の環形輪付穴帯 尖端两侧に列点文 底の且脱鐵鍍鉄文	粗いナデ	橙	橙	3mm以下の乳白色 1.5mm以下の透明光沢 孔白の砂粒	鐵土土器	
270	圓文土器	深鉢 脚部	IV層				地文に貝殻条痕 2段の環形輪付穴帯 尖端两侧に列点文 底の且脱鐵鍍鉄文	粗いナデ	におい青褐	におい青褐	1.5mm以下の透明光沢 1mm以下の乳白色 透明光沢	鐵土土器	
271	圓文土器	深鉢 脚部	SA4				地文に貝殻条痕 2段の環形輪付穴帯 尖端两侧に列点文 底の且脱鐵鍍鉄文	粗いナデ	におい青褐	におい青褐	3mm以下の乳白色の砂粒 2mm以下の乳白色	鐵土土器	
272	圓文土器	深鉢 脚部	SA4				地文に貝殻条痕 2段の環形輪付穴帯 尖端两侧に列点文 底の且脱鐵鍍鉄文	粗いナデ	におい青 暗青黄	暗青黄	1mm以下の乳白色の砂粒 透明光沢	鐵土土器	
273	圓文土器	深鉢 脚部	IV層				地文に貝殻条痕 2段の環形輪付穴帯 尖端两侧に列点文 底の且脱鐵鍍鉄文	粗いナデ	におい青 暗青黄	におい青 暗青黄	1mm以下の透明光沢、黑 乳白色的砂粒	鐵土土器	
274	圓文土器	深鉢 底部	IV層	11.6			底面に縱方向の横刻線	粗いナデ	におい青	橙	3mm以下の乳白色、黑 2mm以下の乳白色、透明光沢	鐵土土器	
275	圓文土器	深鉢 底部	IV層				口縁部に横方向の且脱鐵鍍鉄 周縁は族方の且脱鐵鍍鉄	ナデ	灰黃褐	におい青褐	1mm以下の白色の砂粒 0.5mm以下の透明光沢		
276	圓文土器	深鉢 底部	IV層				口縁部に横方向の且脱鐵鍍鉄 周縁は族方の且脱鐵鍍鉄	ナデ	におい青褐	におい青褐	0.5mm以下の白の砂粒 1mm以下の透明光沢		
277	圓文土器	深鉢 口縫	IV層				口縫部にキサギ 横方向の且脱鐵鍍鉄	ナデ	におい青	橙	1mm以下の透明光沢、黑 乳白色的砂粒		
278	圓文土器	深鉢 口縫	SI4				横方向の且脱鐵鍍鉄	ナデ	におい青	橙	1mm以下の透明光沢 2mm以下の乳白色、透明光沢		
279	圓文土器	深鉢 口縫	IV層				斜方向の且脱鐵鍍鉄	ナデ	におい青	橙	2.5mm以下の乳白色、白 透明光沢、1mm以下の透明光沢		
280	圓文土器	深鉢 口縫	IV層				斜方向の且脱鐵鍍鉄	ナデ	におい青褐	におい青褐	1.5mm以下の風色		
281	圓文土器	深鉢 底部	SI2				横方向の且脱鐵鍍鉄 底部外周側底	ナデ	におい青	橙	1.5mm以下の風色 半透明光沢		
282	圓文土器	深鉢 底部	IV層				斜方向による羽状回転 且脱鐵鍍鉄文	ナデ	におい青	浅黄	2mm以下の風色、黑 乳白色的砂粒	下部丸頭	
283	圓文土器	深鉢 底部	IV層				斜めの回転文 斜め且脱鐵鍍鉄	ナデ	橙	浅黄	2mm以下の風色、黑 乳白色的砂粒	下部丸頭	
284	圓文土器	深鉢 口縫	SI2				ナデ	輪円押形文 押圧沈線	におい青褐	におい青褐	1.5mm以下の黑色 6.5mm以下の白色の砂粒		
285	圓文土器	深鉢 口縫	SA9				ナデ	穿孔	ナデ	におい青	6.5mm以下の黑色の砂粒 3mm以下の乳白色、灰 透明光沢		
286	圓文土器	深鉢	I層				貝殻条痕	貝殻条痕	浅黄	浅黄	3mm以下の乳白色、灰 透明光沢		
287	圓文土器	口縫-肩部	SA10				ナデ 黄土の繊維口 風化氣味	ナデ 黄土の繊維口 風化氣味	灰黃	灰黃	5mm以下の褐色の砂粒 3mm以下の乳白色、黑 乳白色的砂粒		
288	圓文土器	深鉢	IV層				ナデ 風化氣味	ナデ	灰	におい青	1mm以下の白色、透明光沢		
289	圓文土器	深鉢	SA2				横ナデ	貝殻条痕の後ナデ	明赤褐	明赤褐	0.5mm以下の風色、黑 乳白色的砂粒		
290	圓文土器	深鉢	SA2				横ナデ	貝殻条痕の後ナデ	におい青	におい青	1mm以下の風色、黑 乳白色的砂粒		
291	圓文土器	深鉢 口縫	II層				横ナデ	貝殻条痕による横刻線文 貝殻条痕による透脱捺压 (ロッキング)	橙	橙	2.5mm以下の風色、黑 乳白色的砂粒		
292	圓文土器	深鉢	SA1				ナデ	貝殻条痕による透脱捺压 (ロッキング)	ケズリ	橙	1mm以下の風色、黑 乳白色的砂粒		
293	土師器	盤	II層				ナデ	貝殻条痕による透脱捺压 ナデ	におい青	におい青	1mm以下の風色、黑 乳白色的砂粒		
294	土師器	高环 脚部	II層				ナデ	ナデ	におい青	におい青	2.5mm以下の風色、黑 乳白色的砂粒		
295	灰陶器	环	II層				横ナデ 受け部に沈線	横ナデ	灰黃	灰	1mm以下の風色、黑 乳白色的砂粒		
296	土師器	口縫-底部	I層	13.6	7.2	4.7	ナデ ヘラ切りの透ナデ	自転ナデ	橙	橙	3mm以下の風、灰白色的砂粒		

第8表 上の原第3遺跡出土石器・鉄器計測表

登録番号	種類	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
17 SA1	磨石	11.1	9.0	5.7	850	砂岩 鉄器
18 SA1	石皿	38.9	26.7	10.0	2100	砂岩
69 SA2	磨石	10.2	7.9	5.1	550	砂岩
70 SA2	石斧	9.2	4.5	1.6	88	頁岩
130 SA4	磨石	6.9	10.9	5.5	560	砂岩
131 SA4	石皿	26.6	18.4	11.8	3990	砂岩
171 SA5	石鍬	5.9	8.2	1.7	59.2	赤色泥灰岩
184 SA5	磨石	10.3	9.6	5.8	790	砂岩
214 SA8	磨石	8.5	8.2	3.6	33.5	砂岩
215 SA8	砥石	15.5	5.4	3.4	478	砂岩
216 SA8		3.1	4.3	1.7	10.6	赤色泥灰岩
235 SA9	磨石	9.8	5.9	3.2	300	砂岩
297 I層	磨石	7.0	6.7	3.0	199	砂岩

登録番号	形状	断面	最大幅(cm)	最大厚(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	石材	備考
298 N層	石刀	2.0	1.3	0.3	0.5	黒耀石		
299 N層	鐵刀頭	3.8	1.5	0.9	5.5	黒耀石		
300 SA8	刃物	3.5	2.3	0.6	3.8	黒耀石		
301 SA8	石鍬	(1.1)	2.5	0.5	1.0	黒耀石		
302 SA9	石鍬	3.0	1.4	0.3	1.3	チャート		
303 N層	石鍬	3.8	2.3	0.5	1.8	チャート		
304 SA1	石鍬	1.8	1.4	0.4	0.5	黒耀石		
305 SA8	石鍬	1.7	1.3	0.4	0.5	黒耀石		

登録番号	形状	断面	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	鉄	備考
68 SA2		(2.5)	(1.7)	0.12	1.3		
170 SA5	鐵鐵	(8.7)	(5.3)	0.2	19.9		

第9表 上の原第3遺跡堅穴住居跡一覧表

住居No	規模(長×短×深)(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	柱穴(本)	貼床	住居内施設	出土遺物
SA1	5.5×5.1×0.5	24.94	4	有	土坑、カマドか?	甕、壺、壺、ツキツア、磨石、石皿
SA2	6.5×6.5×0.8	35.42	4	有		甕、壺、高壺、ツキミ、カメ、鉄片、磨石、石斧
SA3	4.2×1.0	(5.38)	(4)	無		甕、壺、高壺、鉢、壺、フタ
SA4	4.6×4.4×0.5	16.39		有	土坑	甕、壺、高壺、鉢、壺、石皿
SA5	3.8×3.8×0.7	11.60	4	無		甕、高壺、壺、鐵鐵、石鍬
SA6	5.0×0.45	(24.8)	4	有	焼土	甕、壺、高壺、鉢、壺、カマ、磨石
SA7	5.1×4.8×0.4	(21.1)		有		甕、壺、高壺
SA8	4.0×3.5×0.7	11.35		有	土坑	甕、壺、高壺、鉢、壺、磨石、砾石
SA9	6.1×4.8×0.3	28.40	4	無	張出し、焼土	甕、壺、高壺、壺、カマ、磨石
SA10	4.0×4.0×0.7	14.23	2	無	土坑	甕、壺、高壺、鉢

( )は現存値または推定。遺物のカタカナは仮想器

## 第IV章　まとめ

第II章で述べた通り、時屋地区遺跡群の立地するシラス台地の広大な平坦面は、ほぼ全面が遺跡と言っても過言ではなく、各遺跡は小規模な谷地形等により便宜的に区分されているに過ぎない。各時期の本来的な人間活動の痕跡は、遺跡の区分を越えて広がっており、遺跡群として全体を見据えた検討が不可欠となる。

上の原第3遺跡では、縄文時代早期及び古墳時代中・後期の遺構・遺物が検出され、旧石器時代・縄文時代後期・平安時代の遺物も僅かながら出土した。これらを時屋地区遺跡群全体の中で見渡すと、旧石器時代から縄文時代については、椎屋形第1・第2遺跡、上の原遺跡<sup>(1)</sup>、上の原第1<sup>(2)</sup>・第2遺跡<sup>(3)</sup>、白ヶ野第3遺跡<sup>(4)</sup>に分布の中心があり、平安時代については、上の原第2遺跡、白ヶ野第3遺跡に遺構が検出されている。

上の原第3遺跡で検出された縄文時代早期の遺構・遺物は、時間的制約を受けた調査方法にも起因すると思われるが、その量は決して多いとは言えず、個別の検討を行うにはいさか材料不足である。他の遺跡の報告を待つて、群全体の中で検討を行いたい。

古墳時代については、上の原第1遺跡において前期～中期にかけての遺構・遺物が検出されている。上の原第3遺跡の堅穴住居群とは時期が相前後するものであり、遺構の形態にも若干の相違が見られる。ここでは、第3遺跡の遺構・遺物を検討し、時屋地区的古墳時代を考察する上での手掛かりとしたい。

### ・遺物について

10基の堅穴住居跡から土師器を中心とした多くの遺物が出土した。これらは、中期から後期にかけての資料であり、宮崎県内において住居出土としては数少ない貴重な資料である。特に2号住居からは、甕・壺・高环の三器種が比較的良好な状態で出土している。これらの出土状況は、主なものを第9図に示したが、ほぼ床面直上のものと床面から浮いた状態のものが見られる。两者には同形態の高环55・56が見られ、さほど大きな時期差はないものと思われる。この一群を軸に、他の住居出土資料と比較検討しながら、上の原第3遺跡の遺物群を考えてみたい。

2号住居の甕にはタタキ調整とナデ調整の両者が見られるが、ある程度全体形を知り得るのは後者である。やや不明瞭ながらも頭部に稜を持ち口径と胸部最大径がほぼ等しくなるものと、頭部に稜を持たず胴上部が最大径となるものが見られる。

壺は、球形あるいは扁球形の胴部と、丸底やそれに近い薄手の平底が見られる。小型丸底壺に系譜を持つ小型壺は、ナデ調整で平底となる。壺全体の出土量は安定している。

高环はバラエティに富む。第III章第2節で示した坏部と脚部の型式分類では、坏部に明瞭な棱を持つa類に対し、やや不明瞭ながらも稜を残し深さを増すb・c類、後の消滅するd類と新相を加える。脚部は内溝する裾部のa類がより古相を示す。これらの組合せとしては、51はa-a、52・53がa-b、55・56がb-c、58がc-cとなる。出土状況をみると、53・56・58が床直上で出土しており、異なる形態の3点が確実に共伴していたと見なすことができる。また、51についても、出土地点の床面は貼り床が不明瞭で調査時に掘りすぎている危険性がある。レベル的には先の3点とほぼ同じであり、共伴の可能性もある。

1号住居には、流れ込みと思われる破片2点以外に壺は見られない。壺はいずれも平底で、全体に粘土の輪積み痕を残す。頸部は緩やかに湾曲し稜を持たない。小型の壺4は、頸部のしまりがほとんど見られず砲弾形となる。坏は深いものが多い。2号住居資料とは時期的な隔たりが感知され、須恵器坏蓋が示すTK10の時期と考えられる。

3号住居は、部分的な調査に止まり遺物量も多くはないものの、2号住居に対応する器種がそろって出土している。壺には、タタキ調整で薄手のものが見られる。85の高坏縁部は、下半部が内側に屈曲し稜を有する。類例は宮崎学園都市遺跡群・熊野原遺跡C地区<sup>⑩</sup>SA10資料に見られ、古相を示すものと思われる。95の須恵器蓋は、鋭い稜、口縁端部内側の段、やや膨らみを持つ長めの口縁部、3分の2まで施される天井部のケズリなど古相を示し、TK23に相当する。

4号住居資料では、頸部に明瞭な稜を有し「く」字形に屈曲する96の壺、球形胴に尖底気味の小さな平底を持つ106の壺、明瞭な稜を持つ116・117の高坏部、縁部が強く短く屈曲する121の高坏脚部など、2号住居資料に対し古相を示すものと思われる。

5号住居資料の大半は埋土上半部からの出土で、あまり良好な資料とは言い難い。外半する壺口縁部や深さのある高坏部など、2号住居資料に併行あるいはやや新相を感知させるものであるが、162・163の高坏縁部はやや古相を示すと思われる。

6号住居資料は、高坏に4号住居資料に近似するものが見られる。

8号住居では、上げ底を意識した壺底部196・197が見られる。<sup>11</sup>・小型の壺はいずれも丸底である。206の高坏は、坏部のみ須恵器を模倣したものである。やや外傾気味に長く立ち上がり、口縁端部が外半する形状はやや古手の須恵器を模したものか。

9号住居では、タタキ調整をナデ消し器壁の薄い219や、薄手で球形胴・しっかりとした平底を持つ220の壺が古相を示す。

10号住居では、壺底部に尖底、尖底気味の平底、平底、平底の中央部を押圧にて凹ませたもの（上げ底の意識か）など様々なもののが見られる。壺には大型の二重口縁（外傾）、小型の丸底壺が見られる。高坏は、短脚でやや新しい様相を示すもの、内溝する裾部でやや古相を示すものが見られる。

以上、上の原第3遺跡の遺物群を住居跡毎に概観したが、SA1が唯-6世紀代（TK10）に下る以外は、ほぼ同時期ととらえられる資料群である。SA2資料に対し古相・新相を示すものも含まれるが、ことさら時期の変遷を設定するほどではないと思われる。須恵器は良好な資料が少ないが、概ねTK208～TK23の時期と思われる。

本遺跡2号住居資料と近接する時期のものとして、新富町八幡上遺跡<sup>⑫</sup>1号・3号住居資料、同上薦遺跡E・F地区<sup>⑬</sup>資料、宮崎市学園都市遺跡群・熊野原遺跡C地区5号・7号住居資料、高岡町高岡籠遺跡<sup>⑭</sup>2号住居資料等が上げられる。タタキ調整土器群の地理的偏在性などの点で若干の相違点を指摘し得るもの、大枠では共通項で括られよう。

八幡上遺跡では、遺物の詳細な出土状況が不明ながら、1号・3号の住居からタタキ調整の壺・壺、小型壺、高坏が出土している。直立する単口縁の壺や精製の小型丸底壺など、上の原第3遺跡よりもやや古い様相を示すが、平底化した小型壺や高坏の形態などに共通点を見い出しえる。

上薦遺跡E地区では、2号・4号・8号・14号・20号住居資料に近似するものを見い出しえる。壺は

頸部の稜がやや曖昧で、口径と胴部最大径が同じか後者がやや上回るものが多く、底部は丸みのある平底や尖底気味の小さな平底が目立つ。壺は量的に少ないものの、頸部に貼付突帯を有し長脚のものや、薄手で球形胴の中型壺、扁球形の胴部に平底となる小型壺などが見られる。調整はナデが主体である。高环は、坏部に稜を残しながらも体部が立ち気味で深さの深いものが多い。脚部は、内湾する裾部を持つもの、強く屈曲し大きく開く直線的な裾部をもつものなどが見られる。須恵器にはTK23～TK47の段階のものが目立つ。上の原第3遺跡と併行あるいはやや後出するものであろう。

上蘭遺跡F地区では、土師器編年の見通しとしてⅠ期～Ⅴ期の時期設定がなされ、それぞれ布留式最新段階、TK208段階、TK23～TK47段階、TK10段階、TK43段階の時期が当てられている。そして、Ⅰ期とⅡ期、Ⅲ期とⅣ期（あるいはⅣ期とⅤ期）の間に大きな二期を見い出し、前者は須恵器の導入に、後者は埋甕の出現にその背景を求めている。報告者の谷口氏も自ら指摘するように、住居跡出土の資料をそのまま一括資料として扱っているため若干の時期幅を含む結果となっている。しかしながら、器種毎の変化の方向性や組合せには首肯させられ、当地域の編年基準として昇華されるべきものであろう。

熊野原遺跡C地区では、2基（5号・7号）の占墳時代竪穴住居が検出された。遺物のほとんどが床面から浮いた状態で出土しており、同一器種の形態差も大きい。甕は頸部肩曲が明瞭なものと曖昧なものが見られ、稜を持たず僅かに外反する程度の口縁も含まれる。底部は平底が優勢で、一部に上げ底気味のものや丸底化したものも見られる。壺は資料に乏しいが、小型丸底壺に伴って平底化した小型壺が存在する。また、直立あるいは若干外傾する二重口縁壺も見られる。高环は、口縁が大きく開き体部との境の稜が不明瞭なものと、明瞭に屈曲し稜をなすものが見られる。脚部は、長く延びるもの他に、エンタシス状に中膨らみとなるものがある。これらはやや時期幅を含む資料と思われるが、全体的に上の原第3遺跡に先行するものであろう。中でも近接する時期のものとしては、頸部に稜を持たない甕や丸底化した球形胴の甕などが上げられ、布留式の新段階に併行するものと思われる。

高岡麓遺跡では、2基の竪穴住居とタタキ調整甕を主体とする遺物群が見られる。特に2号住居からは、床面からやや浮いた状態ではあるものの、甕・壺・高环・鉢が多量に出土している。甕は粗いタタキ調整で、頸部に弱い稜を持つものと、頸部がしまらず砲弾形となるものがある。壺は、平底化した小型壺や中型で球形・扁球形の胴部を持つ丸底壺が見られる。高环には坏部に稜を有するものが少なく、丸みを持ち深い坏部が目立つ。脚部は、八字形に緩やかに開き裾部との境に稜をなさないものが多い。須恵器は出土していないものの、上の原第3遺跡と併行あるいは若干後出する時期と考えられる。

上記の遺跡と上の原第3遺跡の遺物群を比較すると、八幡上遺跡・熊野原遺跡C地区がやや先行し、やや遅れて上蘭遺跡F地区Ⅰ期が続く。上の原第3遺跡は、上蘭遺跡F地区Ⅰ期～Ⅱ期に併行する。上蘭遺跡E区は、同F区Ⅱ期～Ⅲ期にかけてピークを迎え、高岡麓遺跡もほぼこの時期に併行するものと思われる。

宮崎平野部の土師器の編年については吉本正典氏の論考がある<sup>10</sup>。吉本氏は、比較的資料に恵まれた児湯郡域を中心とする宮崎平野北部と、宮崎学園都市遺跡群を中心とする宮崎平野南部の小地域に限定し、土器組成中に一般的に須恵器が加わるTK47型式以前の土師器を検討している。型式変化が緩慢である甕を基軸に据えながらも、各時期に普遍的に存在し、分化・収斂といった系統を複雑にする要因が少ないとする観点から、二類四型式に分類し、2期5小期を設定している。氏の指摘のように、住居跡一括

資料とはいって、その出土状況が不明確であるなど必ずしも資料的に精度の高くないものも含まれ、やや大きな時間軸を内包する。しかし、その分析手法や得られた型式変化の方向性は説得力を持ち、今後、より精度の高い資料との置き換えや他器種の分析を加えることにより、当地域の土師器編作の根幹をなすものと思われる。同氏は、予察として八幡上2期や熊野原C2期とTK47型式期の間には1~2様式が存在することを指摘している。今回報告した上の原第3遺跡の資料群や、上畠遺跡E・F地区資料、高岡龍遺跡資料はその狭間に埋める資料であり、更なる詳細な検討を行う必要があろう。

#### ・造構について

10基の住居跡はいずれも方形プランで、主柱穴4本柱が6基、2本柱が1基、不明が3基である。貼り床は6基に、焼土は2基に見られた。壁面溝はいずれの住居にも見られなかった。

床面積は、時期の異なる1号と一部のみの調査となつた3号を除くと、最大で35.42m<sup>2</sup>、最小で11.35m<sup>2</sup>、ばらつきがあり一定の面積にまとまる傾向は見られない。

1号住居に見られた南壁沿の白色粘土塊は、被熱痕跡や炭化物・焼土が見られなかつたものの、右側の土坑とセットでカマドの構造に類似するとの指摘もあつた。宮崎県内におけるカマドの出現は、TK43段階での埋蔵との併存が確認されており<sup>(10)</sup>、それらを遡る時期のものは知られていない。SA1出土の土師壺は6世紀中葉に位置づけられ、須恵器もTK10段階のものである。こうした年代観からみると、現段階ではSA1の施設をカマド（あるいはその構築途中の段階）と見なすことは困難であろう。類例の増加を待ちたい。

#### <註>

- (1) 宮崎県教育委員会 1996 「椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡」県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- (2) 宮崎県教育委員会 1996 「上の原第1・第4遺跡、白ヶ野第3遺跡」県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（2）
- (3) 宮崎県教育委員会 1995 「上の原第2・第3遺跡」県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
- (4) 宮崎県埋蔵文化財センター 1997 「白ヶ野第3遺跡B地区」県営農地保全整備事業（時屋地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（3） 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第3集
- (5) 宮崎県教育委員会 1985 「熊野原遺跡」「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書」第2集
- (6) 新富町教育委員会 1992 「八幡上遺跡」「新富町文化財調査報告書」第13集
- (7) 新富町教育委員会 1995 「北原牧地区遺跡 上畠遺跡F地区」「新富町文化財調査報告書」第18集  
新富町教育委員会 1996 「北原牧地区遺跡 上畠遺跡E地区（1）」「新富町文化財調査報告書」第19集
- (8) 宮崎県教育委員会 1996 「高岡龍遺跡」高岡郡便局庁舎新築工事に伴う発掘調査報告書
- (9) 古本正典 1995 「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察—須恵器出現以前の資料を中心として—」「宮崎考古」第14号 宮崎考古学会
- (10) 新富町教育委員会 1995 「北田地区遺跡」「新富町文化財調査報告書」第17集  
西都市松原本遺跡においても同時期のカマドを有する住居が検出されている。（未報告）



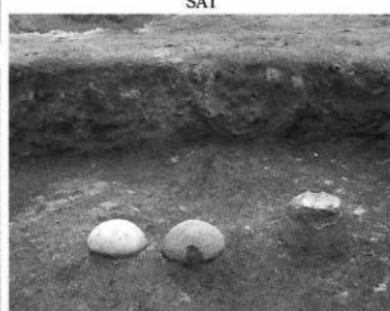
上の原第3遺跡全景



SA1



SA1遺物出土状態 (1)



SA1遺物出土状態 (2)



SA2遺物出土状態 (1)



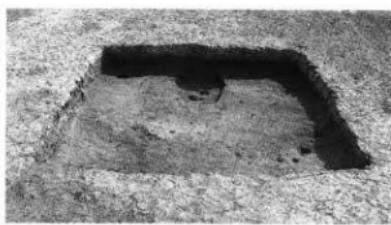
SA2



SA2遺物出土状態 (2)



SA3上層断面



SA4



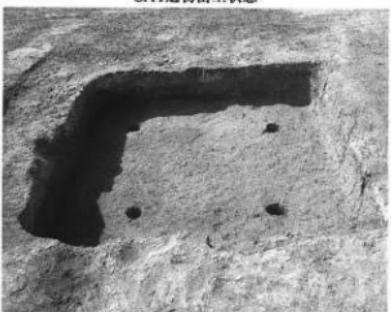
SA3



SA4遺物出土状態



SA3須恵器出土状態



SA5



SA6



SA7・8



SA8遺物出土状態（1）



SA8遺物出土状態（2）



SA9



SA10



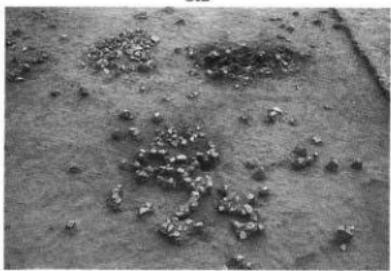
群1



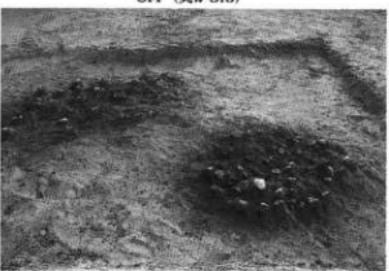
群2



SI4 (奥がSI3)



SI5・6・7



SI8・9



SA1出土土器



7



8



11



12



9



10



13



14



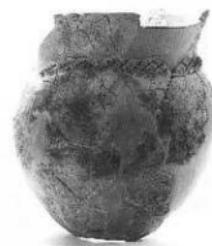
17



18



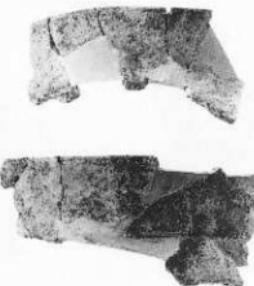
19



23

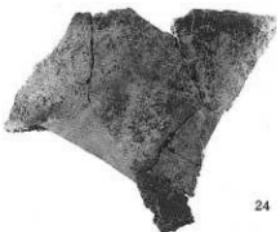


21



20

22



24



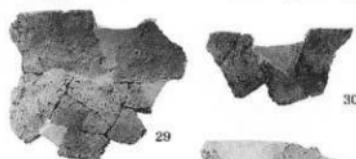
26

27

28



25

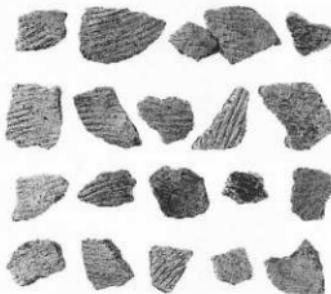


29

31

32

33



SA2タタキ調整土器



34



39



40



37



41



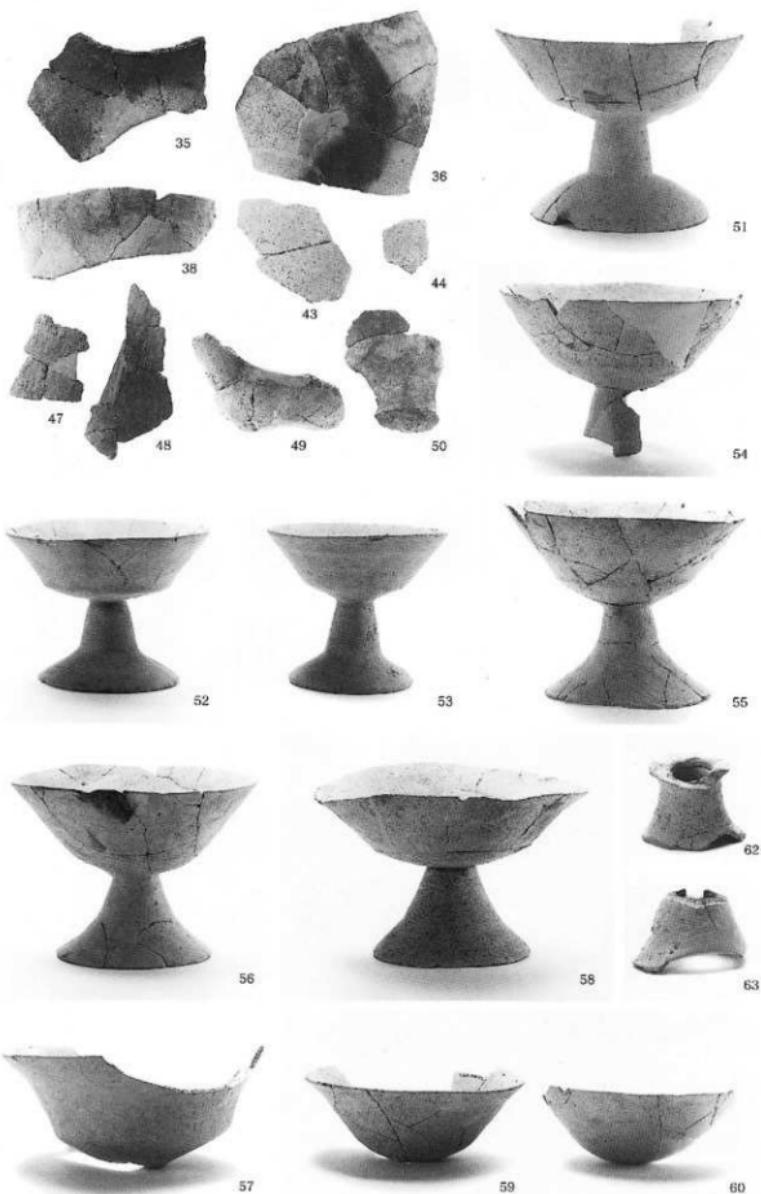
42

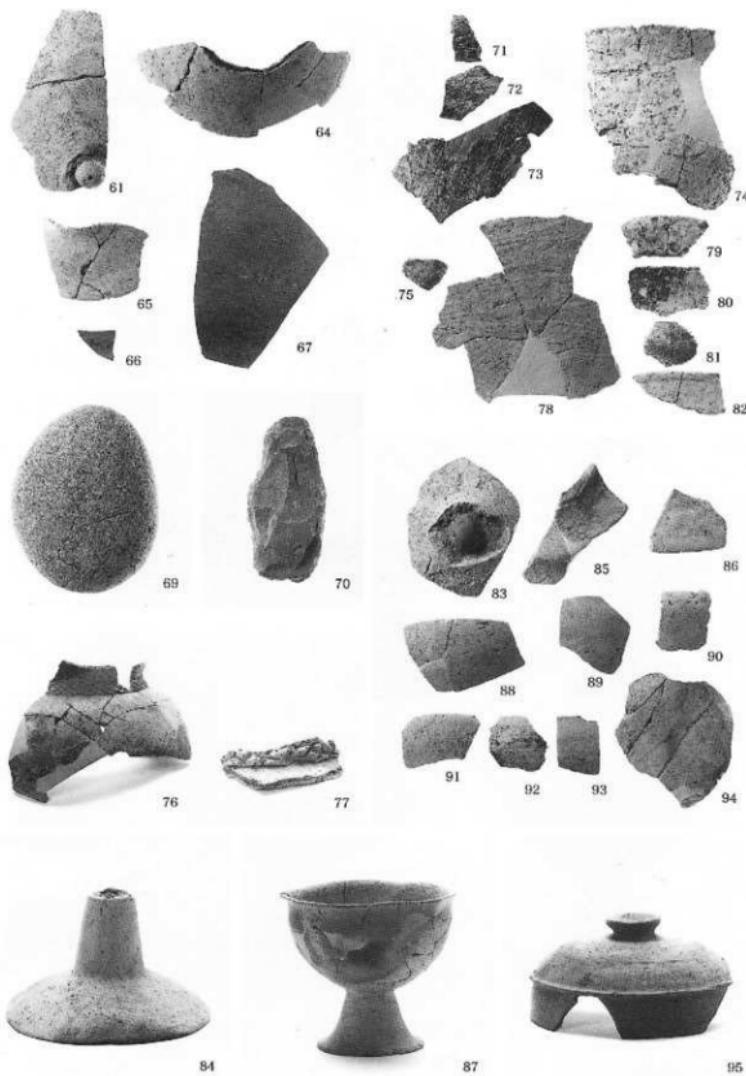


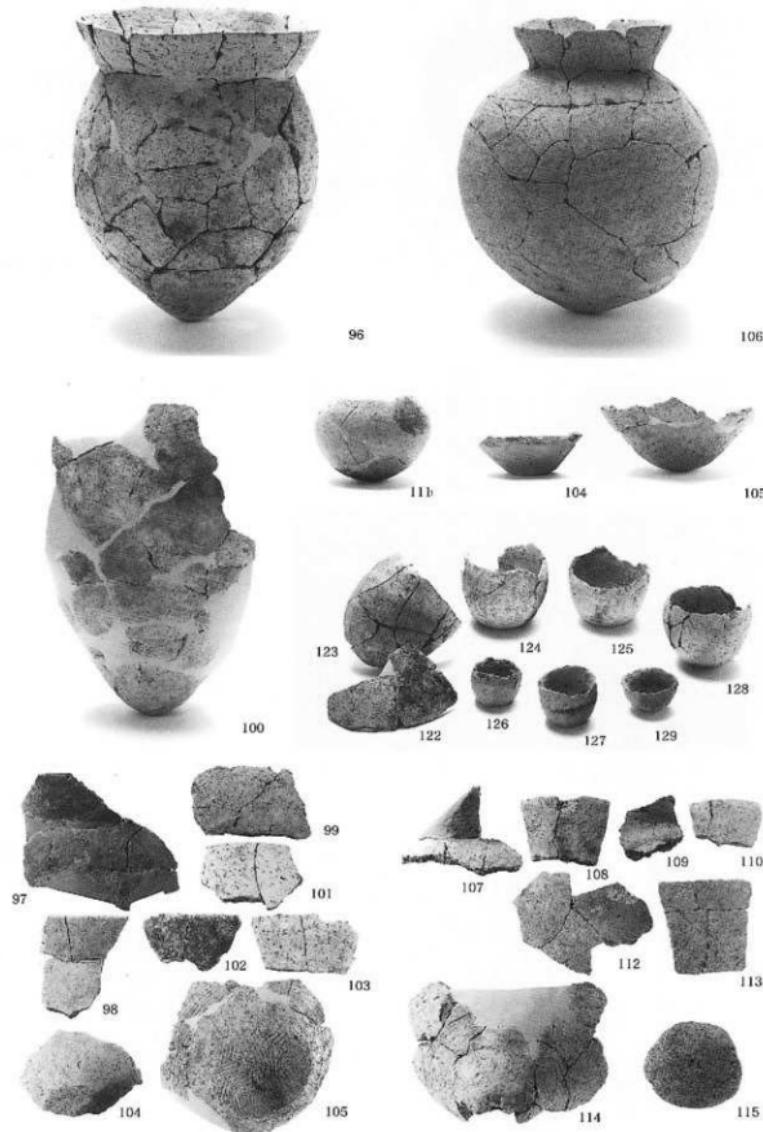
45

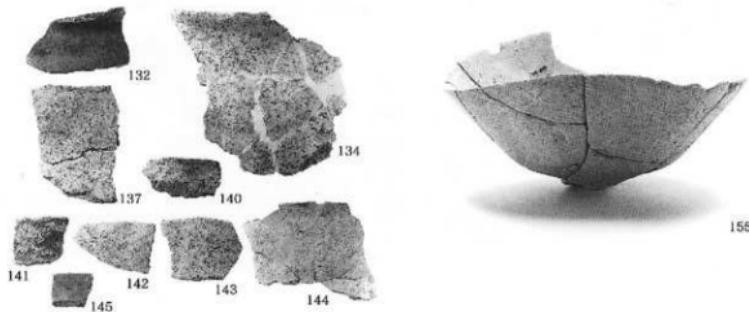
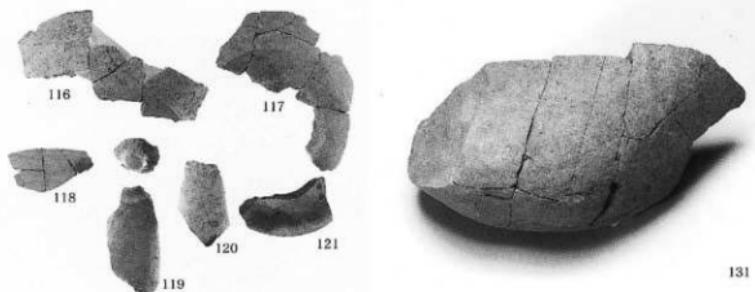


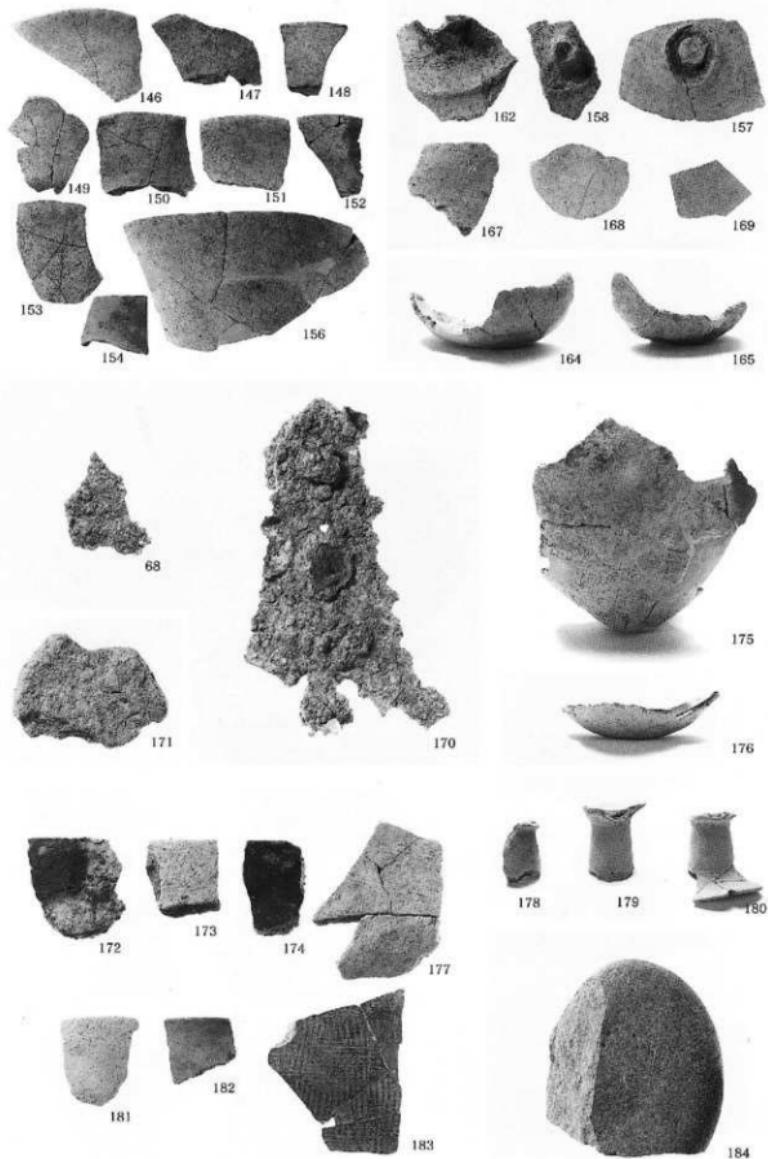
46



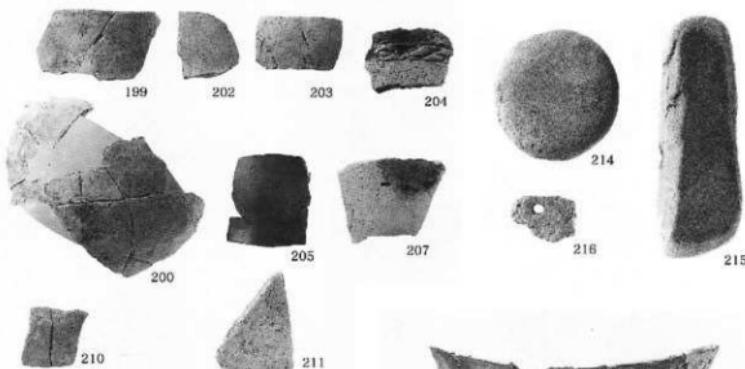












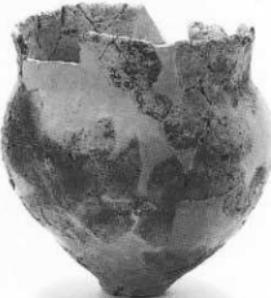
218



217



219



220

